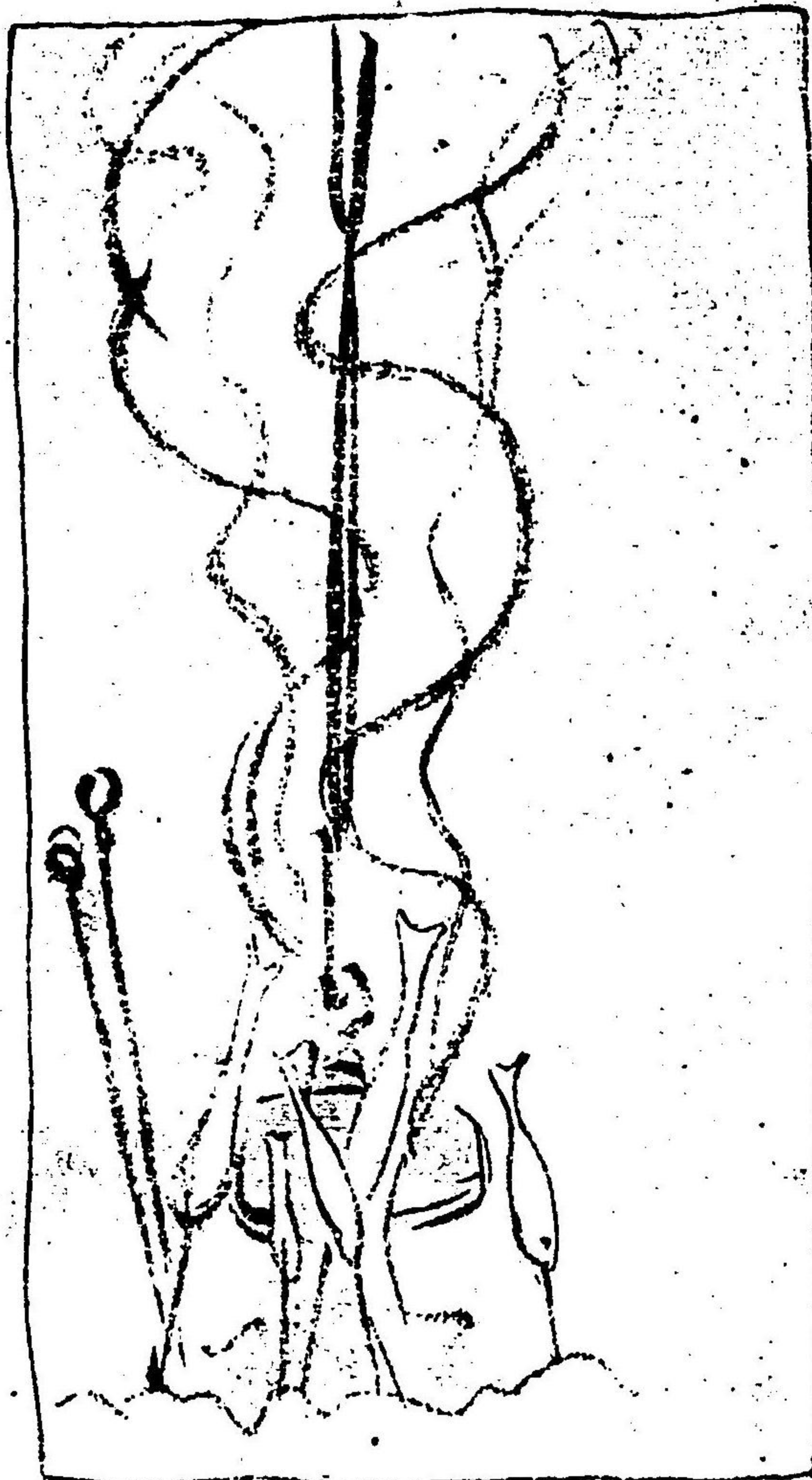


35-2323



山之  
松の  
湖  
松  
湖  
松  
湖



紅葉集



美形を探り町名熟地年齢より家業に至るまで委細洩さず、少年が散步の種子  
 としけるに、西の大關は麴町何丁目とやら、河屋の次女にして十七年と記せり。之  
 に便りて尋ねしに、栗さる哉希代の優物。芝居歸りといふを以て、而も其芳年が  
 「三十二相」の朝顔を見て楊枝つかふ女に似たり。此にて西の大關とあらば、  
 と姓名を見れば、麻布米町の華族藤村房永長女ゆかり子十九年とあり。地下のも  
 のとは品更り、雲鬢花顔こそと見ゆ内よりあこがれ、道は少し遠けれど其にかまけて時過なは、丁  
 の御年頃と申し、高末は御輿入下々より早目なれば、今の間に振袖姿を見損じて、縁葉嘆の及に並ら  
 む事の無念さに、用もなき其處の朋友を訪れ、餘所ごと紛らはしながら嫉妬の様子を尋ねけるに、至極満  
 足なる返答を得たれば、戯れ言のやうに、今生の思出、男と生れし身の冥加に餘所ながら拜たこといへば、  
 打笑ひて易き事なり。さりながら其人は蓮花草、野原の詠めざりに果させ申さむは不便の御事なりと  
 に物の挟りたる言語。その子細はと幾度問といはずして、關係なき人の身持穿鑿は無益の程生か



した媒人などに足下が頼まれしといふやうなる、次第ならば、此方も其様に話すべし。察するに例の好意か、何歳まで氣樂な了簡ぞと、内兜を見透されし上からは今更變まむも卑怯なるべしと、東の大關の事と語れば、この米價騰貴の折から殊勝の御志と、何處までも弄ばれてもはや返す言葉はなかりき後の柱に三時の音すれば其男心づきて、御執心の姫君此處を御通行にはや間もなし。二階へゆきて前面の窓より鷹の目配りて必らず見外したまふな。心得たと二階へ飛上り、賊窓に倚りて放へられし方角を望み、遅しと待つに三十分不足過ぎて、遙に人力車の此方へ驅來るを認め、女か男かと脊伸をすれど乗客は執れと別れど、低くさしかけたる傘の色の媚かしきは、まさに女人に極めたり。下なる男を喚びて其車を指さし、あれかくと問は、たしかに姫君一熟視よと脊たゞいて下へ行きぬ。われも續て飛下り、ついで戸外へ出て、車と擦違ひざまに視れば。まことに玉簾の中に生長たまひしはまた格別にて、「美」中に「威」あり、「威」中に「美」あり。細面にして瘦せず、鼻隆く眼清やかに小さからず、色の飽まで白きに、髪は光るばかり黒々として厚きを高島田に峠て、黄金環の根懸に紅梅重ねの葛引を結び、藤紫地に秋海棠と片輪車を染めたる一樂織の半纏して、象牙造の頸を伸たる姿は、何ともかともいふべきにあらず。芋畑のやうなる奥襟もあれど、華族と名

乗出むには是ほどの姿色なくては同族の顔汚。人界にかゝる女あるよりして見れば、繪にかけける天女の醜容。よき寶を持つて生れたるよ。よき寶、よき寶とつぶやきながら戸内に入れば朋友笑ひかけて、御意に合ひしや。雲に梯子のとも及ぶべきにあらねば、好不好をいふは無益なり。其はともあれ、唯氣懸りな足下が先刻の一言、蓮花草とは、甚感。やはり野におけの心なるべけれと何とも合點ゆき難しといへば、其男煙草を輪に吹き、雉子聲くといふ。これは誰も知る蛇喰ふと聞けばおそろしの意なるべしと判じたれば、益々見免されず責めかけて問詰めに、彼も餘義なくなりて少し唇を解き、容親よりは心といふ事往昔も如是女ありしよりの諺なるべし。十六の年紫縞子の行燈袴を解かれし折、其對手は讀人不知にして濟ませしが、内證聞けば恐るべし抱の車夫に唆かされしものといへり。夫には金銭をつかまして暇をやり、十八歳の春まで可成外出を禁じられしが、女普通の物學びもさせずして丈ばかり伸びむもいかゞと、また一學校に入舎の身となりしに、柿實は磨けと黒く、書も讀み、手も書き、歌もなり、舞も出らせど、百藝に替難き大瑕瑾は、いち早き風雅をなんまたしける。此度はしのぶの亂れ限り知られり落ちて校長の従弟に忍び、二月餘りは人に知られず、後の事には何の思慮なく、只其日を樂しむ



春夜の風暖く、梨花雪と亂るる齋堂の欄干に、薄月の曇れば我胸もどつぷやく後に、いととき人がいつか  
 忍びよりて、そつと肩に手をかけながら、巻たる小簾をすくくとおろし、朧月夜にしくものぞきまを  
 まく其處に轉寢の折から、階子に音して同宿生が繪具皿を取に來しに、ふしだらを見られて浮名忍ぢに  
 ろがれば、同年頃の女達が多少か羨ましその法界悋氣に居づらく、且は舍監の耳に此事のどくかざりしを  
 斷念の種にして、人目繁きにはかくし離別の言葉もかばさず、目顔に思ふ萬分一をいはして難なく宿へ  
 下りぬ。事もなくては退舍を兩親許すへま理なけれど、十六にて戀するほどの女は萬事に賢く、親などばま  
 だく嬰孩と思ひこめる油断につけいり、あの塾の某といへる教師がいやらしき手紙を兩三度袂に投入し、  
 其儘しらぬ顔にて十日も打遣置きしに、人なき折を見澄し我に通りて恐かりしと、娘持つ親心に最も恐じき  
 拵らえ事を吹こみ、我口よりは退塾と言すして先兩親が辛抱せぬやう甘々と説付け、己は何喰ぬ好子になり  
 て退舍せし手際の姦才。宿へ歸りてからは暫時殊勝に身を行ひけるが、是も長くは續く事にあらず。二十歳  
 までに二度よからぬ名を立てしが、對手は何者やら今に知れず仕舞。今年二十四歳春色すこしも衰へず、一  
 笑百媚の容粧誰見ても二十歳の内なり。一昨年働きたし淫行の可憎は我他人ながら忘れず、遇ふたびに其

面に唾を吐かけてやりたしと、其次第をこまやかに聴くほど、愛憎もこそも盡果て、此鬼め！おのれ只はお  
 かうかど、此女の淫行から連累の難義に泣きし女子の哀れを、著者に語るまゝに綴りて、人は容貌より心な  
 りけり。

( 二 )

此藤村に十三の春侍女奉公に上り、二十三の今にいよく重寶がらるるは美代といへる婢女なり。上に詣は  
 す下に驕らず、勤仕にすこしの陰陽なく氣質内端にして情深く、女今川が假に人間に化生せずば、如此は行  
 かぬものと奥様はいつも罽物にしたまへり  
 下司の産急にしてお末の角が珈琲茶碗を取落し、これは殊に御秘藏の御道具、いかなる目を見る事かと、顔色  
 青ざめて道前の揚板にべたりと座り、途方に暮し處へ美代何心なく來りて、お角どの何處ぞ病まや。有體は  
 大事ゆる無理せずと部屋へ行て寢みたまへ。お奥へは私より其通りをよく言上げう程にといへば、角は氣の  
 なき聲して、お美代どの大變な事をしましたと、袖の下より三ツに裂れし茶碗を出して見すれば、お美代  
 駭き、やゝは是はと手にとりあげて角の顔を視れば、朋輩思ひの美代を此上の頼とせしに、其人さへは



て言葉なければ、落膽の餘りに涙を浮べ、謝罪なければ此から直に宿へ下り、親父を同道してお詫に上るより外なしと力なく立上るを、夫程に騒がずとも別によき思案あるべし。今更いふとも還らぬ事ながら、平常あまり粗笨ゆるお前の鹿勿は度々にて、私の謝罪も奥様はお聞飽遊ばせしといひ、此品は殿様の大事がらせたまふ物といひ尋常にて此お詫は協ふまじ。其ゆゑに私の當惑、よい智恵あらば助ると思て貸して下され、宿へ行くもよけれど親父に譴責れるが一苦勞、それも眞實の親ならばと無益なる縁言の、親といふ一字に美代は心を動かされ、わが兩親なき身に引較べて餘所事のやうには思はれず、思案の體なりしが、腰を折りて角に近寄り、小聲になりて、よい事を思ひつきたれば必らず心配したまふな。此度に限りお小言のないやうに私が取計ふべし。さればこれに懲りて以來は暮々も心を用ひ、物は丁寧に扱ひたまへと、破茶碗を持つて奥へ立ちければ、角は我にもあらず其後姿に頭を下げて安堵の息をつきしが、なほ心元なく思ひて拔足に後より忍びゆき、襖の陰に身を寄せて内の模様を立聞けば、殿様の聲にて、十年來これが一度の鹿勿なれば恕すべし。心配ひするには及ばぬとのみにて坐を立ちたまひ、此後に注意せよともおほせられぬに、何と理由はわからぬぞ存外なる仕合に呆れながら、なほ子細を知らむと呼吸を殺せば、美代は申譯なしと糧返へしな

ら、其處に無氣味に蹲まる梯子なるに、奥様が、もうよいくあちらへ行けとの御言葉なり。角は急ぎ臺所へ立歸り、奥の間の方を覗きて美代の來るを待つ程なく、しづくに戻りて、お角どの事なく濟ました嬉しやと胸を撫で下せば、お美代どの。え。お前は罪を着て下されたな。其をどうして。死るとも此恩は忘れじと歡喜泣に泣こそ道理なれ。

(三)

他人に慈悲をかくるは徳徳づくにならぬことなり。さればその報酬には、また金錢に買はれぬ事身に適合せ、因果の不思議なることは説教に會得せずとも、日々の見聞これを離るることなし。美代が實意のほどは茶碗の一事にても知べし。此心萬事に行渡りて、主には忠實なり、朋輩には深切なれば、殿様にぶつく口答へする車夫の正吉までが、お美代には心底懐きて之を畏るればおのづから上下和熟して家内丸く治まる事。此美代一人の心からなり。出入の呉服屋小問物屋肴屋八百屋に至るまで、來れば式のごとくお美代の安否を尋ね、留守と聞くとときは主人不在のやうに本意ながりて、此人此家に息災長年と祈りぬ。霜ふり氷厚き朝は赤き手足の酒屋の御用を憐み、まづ引入れて臺所火鉢にあたらせ、暖き茶を汲み、我へおすべりの菓子なご



りて、やさしき言葉をかけてやるほどに、近所に此家の沙汰よく、商人などは藤村様とはいはで、お美代様のお屋敷にて通ること、まねもならぬ徳の感化は神なり。

これ其人の天成に在りければ、樹の水は四角に湛へ、教育本性を鑄て百種の形状をなすべし。思ふに美代の氣質の柔和にして情深きは、其身の境遇に悪徳磨滅され、美德丸く残りしものか。もしさらすばかほどの君子に何奴の悪戯か、八年前の大厄。

言葉に訛りなく、容姿に土氣を見ず、今は純然都女の一人なれど、故國は埼玉の在といへり。女親は美代が十二の年喘息の持病に倒れ、父親長左衛門は小作人の身の無人に憐み、あるならひの糺子苛責をやらざるが如何も不便ながら、背に腹は替へ難く、氣質のやさしきといふに不器量極まれるを我慢して、桑といへる壯健女を買ひし翌年、早々十三の女子を人中へ手放すは鬼々しけれど、慈悲ある主人に就かば糺母の手に合さうよりはと紹介ありて藤村へ住籠ませしに、蔵入の都度村人は見て、一年まじに容姿を上げて掃溜へ鶴が下りると褒られし揚句は、戸長殿の次男が宿下姿を見染めて、ゆくゆくは欲しきやうに長左衛門聞くにはづみて。後継木山前夢畑に一生を果させむも可愛ければ、小身なりとも苦からじ、東京にて髭ある人

に結婚け、翌殿は黒色羅紗のだんぶくろ穿きて巻袴をくゆらしすてツきとやらいふ杖をつき、我娘は水色縮緬の羽織被て眉毛は落さず齒は染めず、大圓盤にゆひて嬌態と手を引かれ、裏の蜂屋柿のよき頃に來るのが見たいと、豆粉ひく女房の桑と圓爐裏の對座に、手刻みの多葉粉を喫しながらの夜話。

(四)

此糺母はとんだやさしき女にて、美代が蔵入の翌日は、今頃はもう無事に歸へつたとの葉書が來さうなもの、また顔見らるゝは來年の事と、名残惜しさに強留して、馳走といふても東京の奢れる口には合ふまい物を勧め、さぞ迷惑せしなるべし。其上に歸家の時刻運なはりしゆゑ、もしや奥様のお小言はあるまじや。其は一ツまた二ツには日暮て途中が心配など、此女病氣に亡くせし先夫との間に、これも十歳にて殺せしが今算ふれば美代に二ツ下の女子ありしより、其子のやうに思ひていとしがりしが、美代が奉公五年目の七月初旬、鷹野扶斯此村に流行て夫婦枕をならへ、劇性に浴びる薬も効なく、四日といふ間に前後を争ひて墓なき仕合せに及びければ、永訣の飽氣なきに只呆るゝばかりとして涙も出ず、一期の無念や！死顔に遇もせずして菩提寺の古井にわが面影を見れば、もはや此世には水底の人の外には便るべきものはなきぞ。本堂に行きて



和尙にあへば、眼はしよぼくとして眉毛白く、さても夢の間に老けたまへり！久々の挨拶を申してお肚健を喜べど、我れを見忘れたまひ、何處の御方かと丁寧なる挨拶。よく百合花とりに垣を破りて、棒にて逐れました長左衛門内の美代と申せば、和尙ひたと驚き、扱もよい娘になられしよな。我衰老は我知らねど此方の成人を見るにつけ、貧道も明日明後日の間に長左衛門殿の跡を逐ふ身といふに、幼稚馴染の顔の年々に減るさへ心細きに、親亡くなりていと世を慕なむ折から、此言葉に胸通りて土の下なる雙親なほ戀ひしく覺え、回向よろしく頼み上げますと、實父實母繼母三人同穴の墓標に、苔石一基の前に念佛稱名申して麻布へ歸りぬ。

其夜より歎き始めて三日ばかりは食事も碌にせず、涙盡きて血を流す孝子の志目前にて、眼は眼白眼に血入りみ、六日目より眼病を煩らひければ、朋輩はいふにも及ばず、主人夫婦娘に至るまで易からぬことに思ひて、醫藥介抱と家内惣立に騒ぎ、奥様は部屋までおでましなされ、兩親亡せたりとも行末身の落着を苦にはすな、悪からぬやう殿様が世話してやるとのお言葉ぞ、我も共々力になりて心配すべしとの御意に、手を合して、最早親なき身の此一命は捧げましたれば、これまでの御恩報しに此お家に御奉公死いたしまする存念、行末共

にお目懸けられましたと、それより種々にいひ慰められ、世間に鬼はなき物とすこし心丈夫になれば、眼病も日に薄らぎ、半月ばかりにてまた舊の如くぞ愛嬌眼となりける。

(五)

奥の一間に喚鈴の音するは、お嬢様の御用と美代が行けば、ゆかりは古銅の一輪挿を前に置き半開の澤瀉に葉を添へ、無餘念枝振を詠めてありしに、御用で御坐りますかと言へば、その水瓶に一杯入て来てたもれ。かしてまりて勝手へ立ち、水汲みて来りし時は花は手際に出來たりければ、其に水を注し、打詠めて、此はまた澹泊として一段の風情とお賞め申し、お庭の池の蓮の苔も大分ふくらみしましたれば、其中にお活け遊ばしませし。あの花は妖嬌なくて好もしき姿といへば、美代は蓮が好きかどの言葉なり。風雅に心なき私等の好と申せばとて何處が如何よく、何故にと申す事はなけれど、田舎に在りし砌は家近くに蓮田ありて、浮葉巻葉の陰に小魚を掴み花は紅白の麗はしく、朝氣にばちくと響きて苔を破る心地よさ。こればかりは今に比れ難くお庭のを見るに付ても古里の景色目に浮び、世になつかしき花なればといふ。其は然もあるべし。外にあの花を好く因縁やあらむと、意味あり氣なる言葉に美代は小首を傾け、其外には何も御座りませぬと



いへば、其處に切すてたる澤瀉の莖を取て美代の膝に投付け、そらぐしい！蓮田といふ人は什麼？あれ  
 又お嬢様の……御戯談をおつしやります。此頃はめつきりお人が悪くおなり遊ばして、よく眞顔にて其  
 様な事をおつしやりますと、撈拾し葉を拾ひ集めて立むとするを、もはや隠しても益なき事なり來月初め  
 には祝言ぞといへど、美代は眞實に思はず、ゆかりを見て笑ひながら、一日も早くそのやうなる身になりたけ  
 れば、似合はしき男あらばお仲人をお頼み申します。美代、お前はまた知らぬか。其は眞實かえ。御戯言は  
 つかり。眞實。御戯言はつかり。眞實、眞實、其話聞かむほどにまづ少時といはれ、思ひも懸けぬことな  
 がら、他人の噂にしても青年は聞きたき一條、美代は其處に座りぬ。

一昨日の夜われも同席せしが、母様より此事を仰せだされ、似合たる縁とて即座に父様も御得心。今日は蓮  
 田が来るはず、其口上次第翌日にもお前にお話しあるべし。これでも嘘か。今に蓮田が来るが何よりの證據  
 といふ時、しどく／＼聲踏む音の力あるは、夫かと二人見向けば、まことに蓮田震策、お嬢様御機嫌よろしく、  
 これはお美代どのと言葉を懸けられ、さつと根めし顔を背くれば、ゆかりはわざと覗きこみて、美代、蓮田に  
 お茶を……。

ぶつつきとも如此話の是までなかりしかば、蓮田と夫婦にならんなどは、皆ゆかりが放言なるべしと思へ  
 ど、時ならぬに蓮田の來りしは不審の一ツ、これには何ぞ子細あるべし。なるほど主人夫婦がその存心を聞  
 かむとて、わざ／＼呼寄せしといふは、然も可有様に思はれて、もしや此身の目出度からむ事、眞實——か  
 ——ならば機敏なき蓮田様を夫に持は嬉き事なり。さりながら萬事に行渡りたる人の氣稜は取悪きものと聞  
 けば、我如きうつとりものには荷重くしてちと不釣合なる縁談。これは御主人が折角の思召しなれど、御辭  
 退申したが此身の爲かと先潜の思案、ふと心付いて我ながら可笑なり、洋燈の心を繰上げ、縫かけし襦袢  
 の袖口に針の運びを走らし、無益な事を思ふ暇あらば、今夜中に此を仕上ぐべきものと、少時は之に心を移  
 しけるが、夜靜なる部屋に只一人、誰話しかくるものなき折からなれば、人は一分時も無念無想にてはあり  
 がたきに、また此事浮み出で、一應は嘘誕の様にもあれど、一二年前より御主人も折々此事をいひ出でた  
 まひ、似合しき縁のなかりしと、此身此處を出てはさしづめ不自由したまふとに、確乎とせし事なく過來りし  
 が、聞けば蓮田様もおひ／＼御昇進なされ、お交際も廣まり、人出入も繁きに、六十近き御老母一人にてその  
 世話ならざるよし。もはや女房持たすべき時節との噂も耳に入りたれば、其や此やと思ひ合すれば、ゆかり様



の晝程の御戯談は御戯談にてあらざりしか。丁度鳴る奥の大神計を算ふれば十一時なり。蓮田様の御歸りなされたは四時過。其節は用事ありしまゝお奥へも参らで、殿様より蓮田様へのお話の模様は聞かざりしが、さして手間取りたる様子もなく、日常に變れる事もなかりしが、其にても縁談なりしや。もし蓮田様わたくしととまに御不承なされて、行末見捨てじとの御挨拶ありしならば、今頃はお奥から御話しあるへきに、更にその景色なきは蓮田様御不承知にて、曖昧に其場を濁してお逃げなされしか、其も知れず。されど親人おはすお身なれば一存にもゆくまじく、我は異議なけれど一應話して見ねば、母親何と申すや圖り難しとて、御即答なかりしやも知れず。されど、世間には親の不承知に事寄せ、申込人に否とは言はれぬ義理ありて、我は天地の諸神かけて願はしけれど、親の心にはまた背き難ければと、體よく免けるはある手なり、其手にてもやあらむか。蓮田様に好かれむを強て此方より望むといふにはあらねど、あのものは如何にと、此身をさして申頼みし縁談を、たとへ難はつけられずとも破談にさるゝことは不面目なり。もしとあらば、蓮田様にまたと顔を見らるゝはつらし。お嬢様にいはるゝが情ない。噫嘆ませう、夜も更けた。

(六)

此事妄想ならで、二日過ぎて美代は奥へ呼ばれ蓮田を世話したければ了簡聞きたしとの言なり。かねても申上ぐる如く、幼稚よりお世話に預り、今は親なき身の恐れ多き事ながら、頼みに存じますは此お家なれば、命召すもありともなか／＼否やはいふへきにあらす。まして此身を思ひて数々の御心配、難有き心は言葉につくし難し。不束なる私しを蓮田様へお厭ひなくば、お世話を頼み上げますと挨拶すれば、主人夫婦は斜ならず喜び、當人は勿論の事母親も満足にて、お前のやうなるやさしき嫁は老ての力。既に目を注げては居たれと言ひ出しかねたりしに、此は渡りに舟なり、老人は心忙しく、一日も早く式ありたきとの口上なれば、其は相互の仕合、蓮田は知る如くの男にて人にも才子といはるゝほどのものなれば、亭主に持ちて肩身狭からず。母親は心懸よく氣質むづかしからねば、餘所外の姑のやうにはあるまじ。美代しかと得心か。われ等主人が媒約ゆゑと氣の進まぬを遠慮づくに納得するには及ばぬぞ。夫婦は一生の合體、微塵も心合はぬやうにては後來家内風波の基、必ず遠慮なく、不得心ならば其よしをいへとあれば、美代ははつと頭を下げて両手をつき、過分なるお言葉、勿體な過ぎて此身に罰あたむかと恐ろし。田舎女の私しを蓮田様こそ可厭にもあるべけれ、私しには異存なきのみか身に餘れる果報、何分とも頼み上ますと、奥を下りてゆ



かりの部屋の前を通ぐれば、其處へ行くのは美代か、はい。一寸と呼入れ、懇懇に手を支かふれば、美代さや嬉かゝるべし。何事でもござりまする。明日あたりは結納の交換ありて、間もなく圓溜ゆふ心の中が美まじといへば、美代は赧めし顔を下げ御庇陰にて雖有うでんじまするとしほらしき言葉に、ゆかりも疊みかけて戯言はいはれず、弾力ぬけて可笑くしよげしが、其は兎も角も、蓮田は外貌おとなしく、内心雄々しく活潑に、しかも實意ありて如在なく、容姿までがよければ、誰が夫にしても、耻かしからぬ人物なり。今より念の爲めいふにはあらねど、挿花の稽古にゆく道なれば、以來は折々お前の家に寄る事あるや知れぬと、其は迷惑か、お邪寛か。是はしたり、お嬢様のお言葉とも覺えませぬ。汚穢ともお構ひなくば、毎日なりとお宿懸なりとお出下されまじといへば、蓮田の家を「むさくとも」とはもう奥様じみた御挨拶、お手廻しのよい事と笑はれ、これははたりと思へば居たゞまされず、一寸行つて参じますと立上るをゆかりは呼留め、蓮田様へよろしく。ええもうお嬢様と通げ行きぬ。祝言前後は、一生の可憐可喜とはかゝる所をいふにや。それにしるものゆかり様の人の悪さ、これを當世貴婦人氣質と、舞踏好の若紳士はよがりたまふとかや。

(七)

女の一生を二ツに分けて、嫁入前は花盛。色の香のどよやかういはれながら、己からも浮々して冬も秋も此世にあるを知らざる景色、餘所目も只美麗なり。嫁入後は實然りて姿風情に構はず苦勞多ければ子細らしくなりて、雪霜を心待ちに恐るゝ姿なり。この二季を較ぶるに、花盛りの短かき事風の過る如く、實を持ちてから枯木の烟とふすぶるまではやゝ長ければ、前に愁くとも後には樂しかるべしこそ願はしけれ。幼稚くして親に別れ、子普通の放意の味知らず他人の中に揉れながら生長なる事、苔を雨に澆かれ、開けばまた風に拂られてやる瀬なく、春は此梢に長閑からずして青葉に更るは本意なし。さりながら花は人の眺めにとて咲くにあらねば、秋の實豊に障る事なくば、仇花三千菜更に益なく、何事も末の古なるがよし。美代は花を人に見せず見られず、人間天樂の配當に幾割か洩れて聞にさへ不運の身上なりしが、福の裏に貧乏あり、福のあとには福の座ありて、枝もとをくにやうやく果熟ぬ。嫁の身の仕合せは、第一に良人のやまじきなり。之はもとより論なけれど、姑の氣むづかしきには、柳も風にしなひされず、飽かぬ中の生木もひて、浮世の義理にはと涙を呑む事少からぬ例なり。良人の心は角にても嫁の手にて丸くはなるべけれど、梅圓にても姑のは、之を握るに難しといへり。世に生れながらの姑なく、いづれか嫁の花散りてにあらぬ



なまに、我も苛くあたられしを愁きものとの同情はなくて、其遺恨を恨なき方に露さむとの心は淺まし。いはば我子の何がそれほど疾きか。死水もこれが取れるものと男はいへど姑はまた老爺殿の鼻負が見苦しいと、この病死なすばやむまじ。女を形付けし親は良人と和合に一トまづ安堵の胸は撫づれど、ついでに姑の機嫌に心を慍まし、折々の音信にも、御母上様を大事にかけよとあるは、文面孝行盡せよと見えて美しけれど、其心は「よきやうに丸め置け」なり。此通り姑は荷厄介なれば、まづ媒人に親人あるか、兩親か片親かと尋ぬるは女の母の情にて有と無とは随分貧富を入替にすべし。金あるが上に男よくても、親あればまづ考へ、金なく男悪くとも、只一人厄介なしとあれば相談の緒に運ぶほどなれば、天下の邪魔物は捷徑の「往來止」と姑なるべし。

(八)

大悪醜へれば大善となり。溺るも水なれば生るも水なり、虐徒るに姑の愁けれど、佛のやうならば持たぬ女は可有願ひ、あるものは良人ともも百年も壽よと祈るべし。

蓮田震策が母親は美代が嫁となりし日より、家政萬端老身に太儀とこれに委せ、己は隠居所あらば引籠り

夜は早寝朝は晏起、晝は亦樂寐して嫁に此上なき馳走したけれど、玄關客間居間と合て僅に只三間の小家なれば、嫁が愁かるべし、如此したくはあらねど火鉢の前に美代が厚意の厚蒲團に樂座して、可厭ながら嫁の舉止を見張を、嗚やと思遣れば、可成見まじ、それには近所を徜徉き留守勝にして樂ささせむとの心はあれど、性來の外出嫌につひ聲重くて思ふにまかせず。せめては一人多忙きに助手と、流しもどなる筍の皮を剥き、ゆでこぼす湯の釜の下を焚き着くれば、美代は裏に洗物しながら引窓より立登る烟に驚き、馳つけて之を見るより、あれあなたは何處を遊びします。さる事は打捨て昨日震策殿が買戻られし小説なりと御覽なされまし。いやく是しきの事は間暇ある身の運動がてら、なかなか太儀にもあらず。其方が来てより御大層なる隠居様になりたれど、それまでといふものは下女同様の働ぶり、それが突然に動かぬも胃病にやなるべき。なるほどおッしやればさる事ながら、お留守にかやうな事ありと震策殿に知れましからお小言あるべし。聖所事は偏に思ひ留りたまへといふを、無理にといふも心を損すべしと姑は情はずさしき志しにほくくと座敷へ戻りぬ。

午後には姑、戸棚の隅より搦餅の袋をとり出し緞念に遠火に焼きて茶を煎れ、美代と喚べばはいくと親



輕に答へて、何ぞ御用と来て見ればこの體様なり。朝からつめての洗物、何程わかき身とて毒になるべし。天氣は今日一日に限りたるにあらねば、好程に切上てまた此次にせよ。まづ茶一ツ、此處に搦餅を焼きまじた。震策は餅嫌ひ、それに變つて我は好物。下齒は入齒ながら意地蔵くて此の味忘れ難く、毎年少しづつ搦餅を造れど、かうせねば嚙むに難義と紙のやうに薄ければ、其方には味なかるべけれど點心には金米糖よりましと勸むれば美代は會釋し、難有き御志し一ツ頂きますと木彫盆の上の茶碗を見れば、つひに眼馴ぬ湯呑なり。とり上げて是はといへば姑微笑みて、子供賺のやうな紅い模様の可笑けれど、ゆふへ震策と勸工場へゆきし序に其方のにと買ひました。さあ〜暖かいうちに澤山喰へよ。まだいくらも焼くべしといへば、美代は湯呑を兩手に握り占めて、はらく〜と膝に落せし涙を、何故の落涙ぞ。泣くほどの事あらば誰に隔あるべき、憂むはつらし恨めしと身を進めて心配面色に現はるれば、美代は眼を拭ひ、かねてもお話し申せし如く十二の歳母に別れ、十三の春より藤村様へ御奉公に出ましたれば、他人の中に物心つきて、甘露のごとき母親の慈愛の味知らず。此身や阿波鳴門のお鶴に似たらむ。母が口移しに御飯くれし事もありたらむなれど、其は今覺えず、何のかのど甘え盛を手放されて、肌着も母が手にかゝりしを纏はず、一皿に四の

箸を入れしもわづかのまにて、日傘さしかけられて後ろより母親に帯を直さるゝ娘子を見るにつけ、幾度か人知れぬ忍び泣に堪なきものよ此身はと、そればかりがあけくれの遺恨なりしに今お手づから搦餅を我に焼き、我を喜ばせむとて湯呑を買ふてたまはるとは、御志の添ひけなきが骨身に徹へ、其につけても亡母なつかしさのあまり、ほろ、うツかり涙を滴しました。震策などは其味を知らねば折々不孝をして我を困らする代り、其方が孝行にしてくれるが我は何よりのよろこび、嫁のにくしといふ女に一日其方を貸してやりたし。

## (九)

藤村家に蓮田震策の關係は、藩閥主従の緣故より今に絲を引きて、震策が亡父條藏は此家に召仕はれ、京都より此地へまで隨從して家扶やうに勤めけるが、震策は内務省の屬吏となりて、親父亡くなりし後は足近く藤村に出入り、身に應ぜし用は遠慮なく吩咐けられ、月々の給料とはなけれど、相應の惠金を給はりて二代の條藏なりけり。今年廿八まで妻を持たず。もはや好時節世話せむと同僚の妹などを推舉せられし事もありしが、蒲給の身にて一人口殖るるは此上の難義なり。母も折々は此事をいひ出せど、今少時といひ延して過



ぞぬ。されど悪所へ立入る景色はなく、酒を好むで飲むでもなく、着物にしやらくするにもあらず、親父が頂物の五紋の羽織を縫直して、母が被するまゝ可厭な顔もせず、今の若者に希物と譽めらる、外形から大人じき男なり。如此性質は多く世事に疎く、交際に角ありてむつ／＼せるものなるに、辯口ありて如才なく、いふ事なす事を見れば確然浮世才子。御紋所の御はおりを脱ぎて今様の装束つけなば、此省の交際官として何處へも押出さるべし。瓜核顔にて色浅黒く、兩断にわけたる髪の毛柔くして末に二三段の波線あり。眉濃く、眼圓く、鼻高く唇薄く、身の丈五尺ゆたかにして、肩少し怒りたる計り、すらりとして外には難なし。懇親會の席には杯盤周旋のうつくしきに思ひざしを受け、柱に倚かゝりて今笑ひたまふお方は誰様と我名を餘所に尋ねられ、または名刺を所望されて下等印刷の見苦しきを羞ぢ、生憎持たぬといへば紙硯を持参るべし、書てたまはれなごゝ此周圍に小袖幕を打めぐらし、この花をあらき風にまかせじといとしがらるれば、(瞋恚のほむらは「身をこがす」思ひしらすや「おもひしれ」と熱酔の老人までが濁聲立ていやみの一節。桃李物言はねど其下に蹊をなして、いつも果報の聖断をすれど、これゆゑに亂るゝといふ事なく、此會の解散怪しと見れば人目を忍びてぬけ出し、一筋道に歸宅して假初にも浮たる心はなかりき。

藤村夫婦も此處を洞察さ亡父條義は律義一遍ものにて大丈夫なる老人なりしかと、事によりては頑固が妨げ、圓滑ゆかざりしに引替へ、物堅くて道理のわかりし重寶物として信用よりも可愛がられ、祝儀不祝儀の外にも出入繁く、娯樂を見る隨從には何日とて泄らさるゝ事なく、其上奉公人にまで可厭がられず、これもさして世事愛嬌など撒くといふにはあらねど、阿彌陀佛を拜めば我にもあらす慈悲心の萌すことと、身に備はる徳なり。美代と女夫にして一塊に纏めるは惜むべき愛嬌と、殿様も申されけり。

(十)

新婚の翌日は男子も羞かしけれど女子は一層羞かしく、まして其日は日曜とて震策も出勤せねば、狭き家の陰なく鼻撞合してもち／＼と一日を送る美代は我身を我身との感觸なく、不祥な比喩なれど、谿に轉けいり、懸崖に生ひし葛の一條にとりつきたることと、高くは咳もせけず、身動きもならずして、一生一度の艱苦は此時なるべし。知らぬ同士はかへつて如此までにはあるまじけれど、藤村に久しき馴染にて、蓮田が夕暮に来ていつもより告別の早き時は、支那まで送りながら今宵は何處に待つ御方あるにやなど、下女の角といふ事あれば、其次蓮田來りて美代が新結の髪を見て、柳橋邊の藝妓が御座るのかと思へば、お美代との



かといはれし事などありしものが、一轉に阿耶——美代とよべ唯と答へ、後から羽織を被せかけ、曉の柔物の好みを聞くなど、狂言の稽古するやうなる心地にて、相互に往時を知り、顔を知るほど、急に享生風もならず、女房氣取も可笑く、其を笑ふ事はなほならねば益々羞しくてたまらず、姑の傍にゆきて少し談話をしかくれば、それとなく震策の方へおしつけられ、いつそ二人の外に人なくば無遠慮に兩戸を締切り、此家を常闇にして相互に姿を見せずば、思ひ切て少しは打解けたる物語もなるべし。夜にいれば灯を點さず、また十二時を眞闇にしていろく話し續けなば、其次の朝は大分夫婦馴れあふべきに、此苦惱を助けたまふ神はなき歎とまでつらがりしに、震策「粹」を心得、此方より打解けて見せける上、二日三日と過る間に霧翠て富士白く、世の中にこれほど嬉しき物はなくなりぬ。

夜は更けねど母親は次間にすやく眠り、柱に時計の齒を噛む音響き、戶外には垣根の一簇草に蟲の聲々、夏ながら秋の涼しさ。鐵瓶烟を吹き洋燈の火影滲曇りて、之を私語の夜とやいふべき。二人坐對にて震策は火鉢の縁に頬杖つき、われ妻を持たばと、かねての願望は其齒を染て見たかりし、眉毛も剃たけれど其は堪忍すべければ、鐵策だけはつけて見せよと眞顔にいへば、美代は笑ひて、其を可厭といふにはあらねど、

今流行ねば見苦し。白齒に馴れし目には若き女房の齒を染めたるは、妖怪のやうに見えてといへど、震策承かず、似合ふもあり似合ぬもあるべし。其方には似合と見立ての注文なれば、難有く御受して容姿をあげよ。他人が見て笑ふを氣遣はく、常分外出を慎むまでの事なり。さらば買物にはいかにして参るべきや。その本箱の抽斗に我曾て使用し呼吸器あれば、其を懸けて出なば何の子細あるべきと笑ひぬ。美代も笑ひて、眞實かと思へばまた御戲言か。さる益なき事をおしやらすとほやお寝みなされまし。お床を展べむといへば、震策火を埋ながら、今打ちしは十時ならずや、人間六時間寝れば事足れり。美代は笑ふて、毎朝三度までお起し申さねばならぬ方もあり。廣き世界にはあるやも知れず。されど此處にはなしといふ。其様に立派なる口をきかれて明朝は存じませぬぞえ。其方が折角存じてくれぬとも、母親といふ深切な方ありて、呼起さるゝが苦勞なりと欠伸をすれば、美代は火鉢を片よせ寢道具をとり出し枕紙に反古少したまはれといへば、震策また欠伸して、其邊に許多もあらむ。寝むたや寝むたや。

(十一)

勝手の水仕業も飯事戯のやうに面白く、用濟めば姑に新聞のやきしき處を讀みて喜ばせ、それより綴衣の



針は持てど、急がぬ裁縫なれば精も盡きず、寢業が歸宅の三時遅しと、待つことを日々の勤務にして、うか  
 うか一月餘は過ぎぬ。天氣よければとて姑は九時頃より、知音の方へ無沙汰見舞に出でしあとには美代一人  
 なり。晝なれど——狭き家なれば用もなくてばつりと只一人は寂しきものかな。かゝる折に猫兒など飼ふて  
 あらば、翫弄びて愛寵は紛らすへきに、猫毛はよく脱けて食物の中に飛び、心悪きゆゑ飼ふ事は思ひとま  
 つてくれよ。それよりは早く初孫生まむことを頼む。子を持てば猫も犬もなし。目の眩るほど世話は焼くれ  
 ど、その可愛さは持たぬ人には語り難し。犬猫など座敷に飼ふ女は、皆千なきまことの心、休ど、母様のお言葉  
 なれば其もならず。早く孩兒を持ちて可愛がり、二人が中にも此上の情愛の、鑓打たねば、眞實夫婦の情濃  
 ならず。それと顔髪て乳根張り、美しき女にしても姿の衰ふるものなれば、此身のやうなる醜婦はとぞや  
 見る影なくなるべし。其も一ツの苦勞なり、此間藤村様へ伺ひしに、御嬢様もお角殿も我を女房づくりしと  
 いはれしは、はや世帯の脂に染みけるか。時節来れば結さへ錆れば是非なし。折から格子戸引開る音に立出  
 て見るに髪結の浦なり。一日早ければ明日より三日ばかり、親類に事ありて休ますれば今日参上ましたとい  
 ふ。扱は定めて多忙かるべきに、と、鏡架柳登紙油瓶取出す間に、浦は火鉢の傍に澤を懸け、

接待煙草二三服ふかして、厚き唇を疎へし、御新造様歌舞伎座を御覽遊ばしましたか。良夫が芝居を好かね  
 ば其樂みはなしといへば、浦は眼を圓くして、お嫌ひ？おきらひな旦那様が御見物あるべきはずなし。さら  
 ば何日か見物せしを。見た段では御座りませぬ。しかも先日の日曜、さる方へ奉公に上げし娘が宿下りして、  
 是非行けといそがしき中をそのかされ大入なれば豫約なしには場所なく、不本意ながら土間の六に割込ま  
 され、人間の鯨は苦しきものなり。東の高土間に二十歳ばかりの、お屋敷風のそれはく美しくと申すべき  
 か、麗しと申すべきか、女人さへ見惚るばかりの女子ありて、西の樓敷には雙眼鏡の筒口を揃えてこの一人  
 にさしむけ、土間も壁も大入場も一齊にこの女子に首を回らし、歌舞伎座中何萬の人の心を味にせし美女に  
 我も眼を着け、いかなる御身分の御方にやと、娘とも語り、隣り客とも話し、暮の間はとかくその女の噂の  
 みなりき。その良夫とも見はかねたる三十恰好の男と、一樹に只だ二人はいふかし。御息女めかせし姿はす  
 れど、化生變化の旦那を阻しにやあらむ。其にしてもかほどの美女に懸るは男の冥利、其顔見たしと心を  
 付けしに、高帽子目深にしてよくは知れぬと、何處やら此方の旦那様の面影あれば、それと疑ふにもあら  
 ず、不思議に思ひて始終眼を配りしに、狂言の間一寸帽子を脱ぎたまひしを見れば、夢か、現か、それと



も之は 幻まぼろしか。御新造様、それは判然此方の旦那様なり。其は虚うそ！大方人違ひなるべし。成程始はさる思しひたれど不用世話いらぬせりながら何となく、心に懸りてならねば、運動場へ立ちて、後面よりさし覗きしに、紛れなき旦那様にて、人違ひ見違ひといはせぬは、羽織の御紋が「對細角」。世間に似たる人多ければとて、お顔は寸分違ふ處なく、御紋所まで一ツとは、餘り類似様が過ぎたりと申すべし。必らず相違ないことば私が請合ますと、髪かみ相結あひむすふ元結もとむす嚙かみむ齒はに力を入れぬ。美代は始終を聴きて、此事虚に極めたれどやかう取合ひなば、一日言争ひても盡きじ。他人はいかにともいはいへ。此心の底にさへ月影清からば我は其にて事足るべし。我事足たらばいふべき事なし。結髪工かみゆい置おにはしたなき心底を見抜かれむは無念なりと、柔和やわやわき女の思慮深くて不快なる顔せず、扱あて近頃夜更けて戻りたまふ事の重なるを可怪あやまとは思ひしが、いつも上手じょうずなる遁辭いひわけに巻かれて、いくぢなくも疑うたがはざりしが、さうした快樂たのしみを他所に拵たえたまふか、可憎にくまひ人なりといへば、浦は勇みて、外みか貌かに神妙を見せかけ、金佛様のやうな顔したまひて、母上様の前にては唯々はいくと頭あたまも上たまはず、又あなたには物やさしく親切らしく繕つくろひたまひながら、芝居にてはその女子としなだれながら猪口の獻酬けんじゆ、見るもなか／＼憎かりし。油断あせりならぬを小娘と紙袋かみづきとは申しながら女の夫はなほ心は放されず。

女房のわれ等が格氣するほどは、外にゆかしがられぬ亭主ていしゆにしても、相應の蕩樂たうらくをかはかして手に合はぬものなるに、此方の旦那様は、容色ようしきはよし言行ごんぎんはよし、女の飛付くべき薩摩芋男、これはしたり御免遊ばしませし。諺にも黄金持かねもちての旅は、日暮れて宿らず拂曉よあけまへに立たずとやら、あなたも普通の御苦勞では済まじき事なり。私今四十路越よそての婆ばなれば、若き時とは違ひて格氣するほどの根氣もなければ、七年前に夫を失ひしまゝの寡婦あづまぐらし。配耦つれあひなき身の氣樂きらくさは、おもしろき思おもひせぬかはりに苦勞くろうなくて脊後せな輕かし。さりながらその亭主には、衣類いりは肉にくまで剥かれ、一車にたらぬ家財けざいまで沽却かされて、我はいくぢなくも酒樽さかづきと揚錢あがりの御用達、泣言なみごの字じでも言へば蹴けれ撲たかれ其にても未練みれんありて離縁わかれせず、長年我をいぢめ飽あきておとなしくなりしと思ふ間に、酒色の毒どくに骨肉こつにく朽くりて、紀念かたみにのこるは今の貧窮ひんきやう。されば夫には油断あせりしがたじ。随分心をつけ眼を配りて、針ほどの事を見出したまはと棒のやうにつけくいつて嗜あめたまへ。夏季なつの鮮魚あじと亭主ばかりは、やいてせかねば持ち難むづかしと、いらざる悪智恵あくちゑをふまこみて、お暇申やすみまします。

(十二)

我此世に圓滿まんまんの戀あるを知らず。神もし戀をしたまはと兎も角も、人間の淺ましきは、此裏こゝに疑念ぎねんあり邪推じあ



あり嫉妬あり暗涙ありて、片時も胸に涙立たぬ事なかる可し。火よく焚ゆれば鐵を鎔かし、寒薄うしては堅く氷らざるの理に背かて、百煩惱も戀の深淺の度によりて、濃淡その權衡を失はず、疑念嫉妬の餘所から見て疾むべきも、いづれか愛情の極ならざるべき情氣せぬ女は張合なくして、はづきざる戀を弄ぶがごとしといへり。戀も疑念嫉妬の在る間は紛雜の綾ありて、物の哀もとは此ところをよく詠みたるものなり。されど物は至極に近きて其勢ひ失せその形なくなり、始めて有無の界を出づれば、やがて圓滿の地に到て、我いはゆる神の戀なるべけれど、人に心あり思ありて、此の影に情慾躍れる中は涙に袂は干難く、疑念に花と月との分別つかず、邪推に「物の裏面のみ見えて、果は嫉妬の火炎に身を焦し、尻火移りて人の心まで灰となして、戀は全く冷たくなんぬべし。之を思ふがゆるに教を立てし人の賢く、嫉妬を慎めといへり必らずせざれといふにはあらで其手綱をゆるめなば、奔逸の憂あらむを氣遣ふての本文味あり。貞女烈婦は女なり、女は人間なれば、貞女烈婦にも疑念嫉妬のあること、淫女姦婦に遠ふ所なし。されど、其慾を慎しむと慎まざるは、一步を異にすれば東西千里末に到りての相違なり。疑念とは、海水の如けむ、其性に流動あれど誘ふ物なければ、油を盛り疊を敷き、平和にして恐るべき所なし。風起りては山轉け舟舞ひ、南無や大悲大

悲、佛力も及ばじ。

美代は震策の行狀に常住疑ふ缺點なければ、芝居見物に女を連れたりとの、浦が物語は痕跡もなき空言なり。耳の役目と聞きはしたれど、其言葉は信心に染むことなく、震策たとへば不身持の人にしても、さもなき事に尾を添へて坐興に等しき其場ざりの無根草、髪結工輩のさかな口は、心に留むるに足らじと思ひけなしたれど、如此事は、聞くに快からず、「さりながら萬一」のむらむらの雲おこりしを我と吹散らし、震策とのに限ては、中々さうした浮氣ものに非ず。母様には優しく、我には實意あるにても知れしことなり。外に増花に戯るゝ男の癖として、其おもしうさに、我家は固固か病室のやうに空氣腐りて、鬨を跨げば不愉快いむ方なく、其氣はななくとも家内のものに無情あたり、おのづから宿泊他所になること、十人が十人まで違はず。さるに震策との神妙なることは、我目に見てさへ少しも保養めける事なく、あつしては氣の鬱したまふべきにと思ふはなるに、何時をやりくりしてさる淫行を得したまふべき。まして物堅きあの人が、嘘嘘、嘘なり。何の思慮なく迂闊と他人の注水に堰かれ、わが添ふ良人を假初にも疑がふなど、我身ながらさることや女人は淺ましきものかな。此上の淺ましきは浦なり。益なき饒舌をして情氣の喧嘩させ、見物して



保養にもならざるものと、之を浦がもし聞かば、のろき御新造とまた隣家へ行て吹聴すべし。

(十三)

藤村家に大客ありて人手足らねば、一晚宿りにて美代を借りたしとの使なり。異議なし前日の早朝より道はすべしと答へしを、藤村にても世帯持の身は多用なるべしと察して、夫には及ず午後よりとの事なり。美代は飯も二日分を其日の晝炊にして、菜も姑が手の懸らぬやうに用意して、震策に氣を付けてと留守を頼み、姑には呉服屋來らばこれくいふて下され、米屋參るやも知れず、其の時はこの前貫ひしは種まじりて迷惑せしと、小言いふて下されなどこまぐく囁みて藤村へ出向けば、明日は三十餘人の大勢にて、しかも手の懸るお客様と、勝手は朝より戦場のごとし。獻立の仕出は料理人來るとその用意にはあらねど、膳椀器物は自慢の道具ありて土藏より出せし函を山に積み、障懸の男女五六人取散らせる間紙の雪に埋もれ、皿を拭くもあり揃へるもあり。平の蓋が足らぬに立よ探せと彼方に喚び、この鉢の縁すこし缺けたるは今せし寵勿にあらず。去年仕舞ふ時か、土藏から運ぶ時正吉ごのが手荒をせし故と此方につぶやき、賑はしき事なり。美代はまづ奥へ挨拶して、烟草も吸はず下女部屋に行き、持參の風呂敷包を手早く解き、平常衣に着

かへて前掛は木綿の新らしきをして、大きに運刻ました。皆様御苦勞様と會釋して己も其處に飛入り、袂より藍臭き手拭を取出し、打冠りて働き始めれば、新手の加はりしに一同疲勞を忘れ、見るも目眩しくいそがしき一盛過ぐれば、先一服と美代は下女部屋に行き、角を呼びてつまらぬ物なれど、めりんすの半襟二懸、絹まじりの前垂地一枚くるりと半紙に包み、のしと一筆書の簡略なるは、氣の張らざる手土産も角は氣毒がりて、此間も頂き毎度にては迷惑といふを、迷惑したまふほどの品ならよけれど、烟管をとり出せば、角は立上りながら、自分が香まぬゆゑ煙草盆には心づかざりしと尻輕に飛ゆき、奥にて煎餘の茶に湯をさして俱に持來り、お美代ごの大變があるぞと聲を潜てすり寄れば、美代は吸付けむとせし烟管の手を留め、其は何事。また寵勿ではなきかといへば、寵勿か拍子か知らねど、餘りといへば呆れもし、お前には氣毒にて話しはしにくけれど、入口の障子を明けて戶外の人氣を覗ひ、蓮田様の舉動に變りし所はなきやとは、子細知らねど心ならざる言葉に、美代は眉を擧め、角の顔をじつと視て、其はまた何故に？震策殿の身に何がかりしや。神ならざる身はよもや知るまじ。我もよもやと思へど正確なる證據人あれば後に其者を呼びて尋ねば聽きたまへ。何やら知らねど胸騒する話の様子、早く聽かして下されといへば、角は呼吸をばづまし



震ふる聲こゑになりて、胸騒むねさわをもせで何とすべき。お前は御亭主を寝取られたと、聞くに美代は眼を睜みはり、何なにの震策殿を。蓮田様を寝取られたに口惜くちやくくはないが、無念むねんとは思はぬか。他人ながらも腹が立つ、お美代どの私わたしや口惜くちやくい〜と、おろ〜聲こゑして美代の膝にとりつけば、そりや寝取られての無念は、問ふにも及ばず推したまはれ。されど其女は何者——誰。其を聞かして下され。さあ、いふて下されと詰寄れば、いや〜其はいふまじいふたら氣良きよしきお前、日頃の恩にからまれて欲言事ゆひたきことも得いはず、欲為したき格氣りんきも得せず、只くよ〜と思ひ詰めての果は、名もなき病氣を煩わづらひて、いとじやな死なねばなるまじ。其を思へば寝取た奴が——女が憎にくい〜〜憎にくい〜。

角は我一人口惜がりて對手を明かさねば、美代はせきこみ、よしや切なる思ひに我死ねばとて、捨てられし身ならば子細こさいはあらじ。其女は誰ぞ拜むほどに聞かしたまへ。もはや此事を明かしたまひし上は、女の名のみ裏うらみたまふとも、美代が心には火焰はむら焚もえて、終には之に身を焼くに極めたり。此身不便ふべんと思ひ、且は今までの馴染なじみを忘すば、何人といふことを知したまへ。其女もしたた我の知人ならば、頭の一字にても苦からじ、教へて下さらば無量の慈悲じぞと角の手に細れば角は兩眼らうがんに涙を浮うべて、親に降す事ありともお前には何をか

憂うれむべき。そりながら。不言いひぬはなか〜憂うれむにあらでお前がいとここの餘り。もしいふたならば、其は今いふごとく懸念けんねんには及ぬ事なり。其を聞かぬ中は御用も手につかず、今宵も寝られず。お前も此處は立しはせぬと、思入りての言葉はさも有る可し。お美代殿明かします。明かして下さるか。忝かたじけないぞ拜まねばかりに喜よろこべば、忝かたじけないとは何事ぞやとまた涕泣なみりなき。其對手あひてといふはお嬢様！ え、エーゆかり様ーや、や、や、や、眞實まことかと反問す時、お美代殿お奥にて御用ごようとの聲に膝立てながら、今宵ゆるりと話してたまはれ。また前程ぜんじやういはれし證據人しやうことは誰ぞと尋ねれば、正吉が判たしか然見届けて我への物語、彼人も切齒はがみをして無念がり、是非しぜいに是はお通知しちゆ申さむと二三日相談さうだんもしたれど、今日お出とありしゆゑ差控さしこえて居ましたなれど、此口惜くちやくは人事じんじとも思はれず……。またお美代どのと呼ぶ聲に、障子しょうじを明けて二人とも立出でながら、角は言葉を繼つぎて、晩には正吉を呼びて委細いさい聞きたまへ。よき様に頼みますとて別れぬ。

美代は奥向の用事に立働らき、多忙たひやう中にも此事を思へば何をす空うつそもなかりき。空言うつそに極めし浦が話はなは思おもなりし。其時は閑流かんりゅうにしたれど、芝居で見たりし女の二十歳ばかりにしてお屋敷風やしきかぜとは、町の娘にもあらず、藝者げしやにもあらずゆかり様にてありけるよ。申すは恐多けれど、お嬢様は年端としはのゆかりより淫名いんなありて早稲はやいねな



る性質なれば、この病いつかな已むべきにあらず、如此事のまた何日あるべしとお氣遣ひ申したれど、其の對手に震策殿とは神様も知りたまふまじ。行狀堅固に見せられしは、外貌なりしか。我連添ふての月日は長からねど、此間に氣質の大概は知るべきに、まことにさる不徳無殘の人とは見ざりし。嗚乎不徳無殘の人にはあらざれど、此度の淫行は若輩の過失なるべし。素より人の道には有るまじけれど、男の浮氣は世間に例多く、女も其は其人のはたらきと、大概は見容すべき習慣となれば、我も些細なる事にいやみは謹みもすべし。藝者娼妓賣女の類に懸合ふならば、後腹疾めす始末よろしく、其は一時の放蕩にて世間の手前は濟むべきなれど、人の娘をそこのかすは罪深くして通るべき道はあらじ。まして是は大恩あるお主様の娘子との密事、末はいかなる難義にや遣はむ。ゆめゆめ格氣するにはあらねどこの對手は悪かりし。情なき無勘辨の震策どのと、其處に崩折れて沈吟の後に、美代久しく逢はざりしとはゆかりの聲なり。居形を正して、只今お歸り遊ばしましたか。其内は心にもなき御無沙汰いたしましてと挨拶すれば、蓮田も無事かとそらくしき言葉に、美代も流石に堪忍しがたく返事なしについに其夜の十一時過には支度繰る方なく整ひ傳へて書問の返事は洋燈を圍繞て雑談すべき氣力もなく、我勝に滿

團引ずり出して、はたくと轉けるかと思れば、女に似氣なき高軒、切齒きりりと腰まじく、其中に雜りて油揚の附焼が三枚とあり、寢言いふ側に、寢返り打て足とたりと棚から物の落ちたることし。狹き角の部屋には角と美代車夫の正吉三鐵輪になりてこそこそと語らふ。美代は上手の壁に添ひて、注然懐手して首を垂るれば、角は膝の上に手を組み、正吉は胡坐掻きて腕組しながら猫背に屈み、面ざし出して美代に向ひ、正吉何と思ふて空言を申す可きや、たゞ此中何時出來しや知らず。お奥と下々とは隔たれば、蓮田様御入來になりてもお二人の様子を見るべき様なし。さりながらお前様が御奉公中の事にてはあらじ。其折からの首尾ならば、お奥へ出入自在の御前様の眼裏に懸らぬ事はあらじと思へばなり。其はともあれ、この淫行の實證見届けしは去る十日お嬢様挿花のお稽古とて、いつもの師匠の許へ御伴致せしに今日は近所の朋友を尋ね、時間取るべければ先へ歸れどのお言葉に、かしこまりて歸路本國にて馴染の男に遭へば、之も兩三年前出京して今は車夫となりて駿河臺下に夫婦暮し、女房も識る顔なれば遠慮には及ばず、数年ぶりの逢ふとて其家に誘られ、牛肉鍋にて三四合傾けながら浮世話の末に、國元の何處の小女郎も、はや誰の女房となりて子を持ちたり。誰の妹は誰が手に入れしを、誰がうまく横ばんきりて、鎮守祭の夜を喧がせし杯と亂



話に移りしに、其女房我に無類の別品を見せむといへば、其男が、はや来りしかといふ。今しがた這入りしばかりと解せぬ事いひ合ふを何ぞと聞けば、垣一重前面の二階屋に男女の密會あり。一週二度づつ日を定て雨にも風にも違ふ事なし。其は賣淫かと聞ばなかくさる卑賤きものならで、身分すぐれし地色なり。女は華族のお嬢様とやらにて、容色は百人寄せて似るものなく、千人聚めて及ぶものなし。萬人に一人は可有きか、其もちと覺束なきまでに思はれて、衣装は四邊目眩き絹づくめ、層屋が目にも高家の姫君なり。男は官吏と見えたり。されども、風俗とんと下りて、連も其女子に戀を仕懸けむ便宜を持つべき身分とも見えねど、其美男のほどは恐らく役者の素顔など見るべくもあらず。妄推慮には、女子から落ちて出来し首尾かと、談話の内も小癩に障り、面白し！其を着に今一盃といふ所なれど、業が沸えて一滴もはや入り難し。この窓を開けなば機關は見ゆるにや。二階に障子を立たれば、にくや雲めが邪魔をして拜むことかなはずと、聞くにいよく憎くなりて、此處に獨身者ありと知らざるか。畜生め！驚かしてくれむと立上るを二人に留められ、成ほど是も殺生の一ツか。明日は伯父の命日と辛抱したれど、此密會心憎く捨て歸るべきにあらねば、茶漬二三膳汲ひこみ、横に介れて二ツ三ツ雑談に時移りしに、女房外面より走込み、今出て行く所を見よ。遁して

なるかと飛起き、入口より首さし出して覗へば、後向の女の立姿は、晝日中よもや狐は化けまじきに、我阿嬢様に紛れなし。魂消て飛込めば、わが顔色を怪しめられ、骨も蕩くるほどの美色、眼球が筋斗を打つたど紛らし、また立出て小陸から、二人連立ちてその前を通るを隙見せしに、女はまさしくお嬢様にて、相手の男といふは——潰ぶれし膽の二度潰ぶれ——蓮田様にてありけり。追尾むかとは思ひしが、見咎められなば此上くはしく詮義の邪魔と、宿の二人へは何氣なき顔して、此首尾をしきりに羨み、其内またく見物に來るべしと暇を告げて戻りぬ。

(十四)

正吉始終を語りて、蓮田様はあの通りの堅固人不義は女から仕懸けしに極つたり。憎いはあばずれお嬢、お美代殿何となさる御了簡ぞ。かゝる所にては日常の慈悲は必らず無用たるべし。きつとしたる思案ありて、手強くやッて退けねば女の一分立つまじ。人の良夫を竊みしからは、盗入盜賊ふてくされ、主人も糸瓜もあるべきや。此正吉が不承知と居丈高に言れば、角も首領さ、我等も對手を主人とて恐れはせじ。此事公然にたまはく、ともく、に力を合はせ、屹度誓をとらねば置かぬ。まづ眞當人のお前がしつかり腹を据るべし。







悪き親はなく、殿様奥様はゆかり様に嫁入まへの悪名つけたる我を恨みたまふべし、悪みたまふべし。これ御恩をうけし御主に對しての美代が本意にあらず。我思ふに、此を表立つるは火を煽ぐがごとく、堰くにつのる戀のならひとや。我格氣ゆゑにいよく愛想つきて、ゆかり様と深くなるは知れし事なり。それといふは、われとは媒人ありての夫婦中、もとより好き好かれしといふにあらねど、よく思はぬ女ならでは、女房捨てこの戀はせまじ、此方にかほどの弱身あれば、なまじひ格氣立てして争論の上、出て失せよとあれば去状もつて歸へるべき所なく、其上ゆかり様の悪名ふらせしお悪しみを此方に受け恩知らずの人非人とて、とりあふてたまはらぬ事もやあらば何とせむ。身の行所なく分別盡きなば、世間に捨られましたと泣きにゆくべき所は兩親おますあの世なり。淵川に身を沈むるとも哀れといふべき人一人なく、御主に長く恩不知よ非道よと悪まれ、震策殿ゆかり様には淺まししの最期を笑はれて、捨つるにこの心の證明たつ命ならず。無念の中にもをどなくせば、お主様には御恩がへこの寸志届き、二ツにはかはらす良人を大事にかくる情にかの人も絆されて浮氣もいつかやむ時あらむ。さては短慮の犬死にまさりて、今のやしさをともく昔に語り雨降りて地堅まる行末を頼みに、此眼はつふるまで泣き、此胸裂くるまで無念を忍びて見るべし。

お前二人は我を思ひ、さほどまでいふてくれるを、わが意氣地なき丁簡聞きて、相手にならぬ臍甲斐なしと嘸や愛想も盡べし。されど我身にしての此辛抱は、對手を刺殺して我も命を捨つるよりは、なほなるまじき事と、腹立てず、笑はず、よく勘辨したと賞めてたまはれと、思ふ一通を述べれば、流石二人も天晴れなる心中に感じ、書にでもあるべき賢女と、理に服して返す言葉はなかりき。美代は涙を拭ひて、この事外に洩れては一大事。わが折角の志も烟となるへければ、ゆめく口を固めて噎氣にも出さぬやうにして下され、頼みをする。正吉との、して其首尾の宿はと尋ねれば、何町の通りを二つ目の横町の中頃に、上總屋といふ人力車屋の北隣なる小さき二階家なり。今度一度出掛て行て實證見届けたまへといへば、首肯きて、あゝ！無分別な、若氣とはいひながら。

(十五)

此處は、正吉が見たりしといふ二階に陰首尾の興味は、世帯染みし夫婦中とはまた格別と、震策が何言にゆかりは眼中に微笑を浮べ、さりながら末は奈何すべき心ぞや、今より其が氣懸なとあれば、震策腰轉びながら、末とは。末とは末なり。その末なりが分りませぬ。添ふ事かなはぬといふにや、但しは露顯の曉にやと問へ。



44  
 ば、其方は美代とて貞實なる女房ある身、此身はまた、先頃佛國より歸朝せしかの法學士に嫁可き身なれば、天下晴れて添はむなどは思ひも懸けざる事ながら、此中もし美代に知れなば。それは案じたまふべからず。よしや美代が知とも對手が貴嬪なれば、主思ひの美代が之を荒立つる事は萬一もあるまじ。主とて嫉妬に用捨はあらじ、但は之れを荒立てなば、其方に愛想盡かされむを恐るゝ迄に、美代は其方にほの字にれの字か、これ蓮出と震策の腋わきのした下を掴めれば、飛起て、階下にも人は居るものを靜になさりませといへば、唯々といひながらゆかりは笑ひていふ事を忘れし。昨夜の夢に、美代が其方に恨の數々を並べしと見しは心元なきが、美代はけぞれる様子になさか。其配慮は御無用になさりませ。露ほども變れる様子なく……。其方を大事に懸るや。其は知りませぬ。なんの此方にて一ト通りにするものを、先方より大事にすべき理あるものならず。必ず可愛がるに相違なしと、帯の間より黄金側の女時計をとり出し、時刻を見るまねして美代が定めて待遠なるべし。さあ〜早く歸りて顔を見せよと、震策の肩を衝けば、衝かれて後に兩手を突き、われも法學士ならばかほと手苛くは扱はれまじと、啣くはつやうにいへば、ゆかりは震策の顔をじつと見て、また法學士か、氣色わるし。此間の約束には、再び我に向ひて法學士とはいはじとありしにといへば、今こそ

口にはとやかく言へ 未來の良人にあらずや。其時急に可愛がりたまはと覺えて居たまへや、蕨人形に五寸釘。ゆかり様、男の一念といふものは世に恐ろしきものぞといへば、ゆかりは首肯して、かねてもいふ如く、我良人を持たりとも今日の歡樂を捨てたまふな。此方には捨つる心なけれど、危きものよ。何が？危きものよ。何が？

それ！膝にて茶碗を轉かしたり。危きものよと其故に心注けたりしにといへば、ゆかりはやさしく覗みて、我は悪なれば存分弄りたまへ、美代の惻愍の様には到底行かじとすなれば、法學士といはるとが可厭ならば我身にもなりて見たまへ、美代く〜と更に嬉しき事はあらじといふにゆかりも言葉なく、口説の種も早盡さぬれば、此次の逢瀬はゆるりと顔見合して笑ひ、立際にゆかり震策を呼留め、古金襴の紙入の中より幾千か取出し、少なけれどと差出せば、押返へして入用あらば申すべきに是は御自分のになさるべし。先日のごとくまだ餘れるをといふを無理に取らせぬ。

(十六)

其ぞと感ふて見れば、震策の舉動に臭味所なきにあらねど、夜歸る事あるにもあらず、もじや役所へ行



とて餘所へ外れるにやと、出入する同僚に其となく尋ねれど、少しも變る事なし。されど疑ふて見れば、朋友も同穴にてわが前を取繕ふやも知れず、其にしても良夫の我に對する調子の以前に變らざるは不審の第一なり。さりながら髮結の談話といひ、正吉がたしかに見届けたりといふに、根の無き事にあらざるべしと思へど、われ其證據を押へしといふにもあらずして、震策我に強顔あたる事さへなければ、何分にも半信半疑にていづれと定め難し。角に言はれ正吉が話せし其時は、くやし涙にも暮れたりしが、今にしてつくづく思へば、我心狭く量見淺かりし。さほどにゆかり様との交情ならば舉動に幾分かは顯はる可きにと、嫉妬すこしく靜まりぬ。嫉妬といふこと何より起るかと思へば、情人の我を捨てて彼に移るゆゑなり。我を捨つるとは、我に情愛認めてつれなきより、ありし時の濃かなる契に思ひくらへ、其人を恨み吾身をほかなむ餘りに格氣は出るなり。つまりは一種の自愛心なれば、我身に受る愛情に不足ありと感ぜずしては格氣は成り難し。よし不足を感ぜずとも、目前良夫がゆかりに戯るゝ風情の睡まじさを見れば、其人への愛情には我へのは及ばざる事とて、また格氣も出るべし。此時には他人中に入りて何程賺すとも感むとも、この一念はじたと消ゆるものにあらず。されど我に愛情の満足ありて自愛心發せざるに、御身は飽かれたり、棄てられ

たり、誰といふ増花ありなど、人の中口なりとも嫉妬はおこるまじ。勿論其れを聞て嬉しくはあらじ、また快意もあるまじけれど。唯それより疑念は湧きておのづと氣を廻せば、等も化物の世の諺、撫づれば撲つ意、可愛は可憎の裏と、萬事につけておもしろからぬ思慮のみ浮べば、その心より出づる此方の言葉も舉動も自然不平を離れざれば、それより不吉なる顔を見せ合ひ、いよく立派なる嫉妬に仕上ぐるつまりは合せ物は離れものと天下國家の是が大本たる夫婦中を「燒燵茶碗」と語ふは扱も輕薄なる世間なり。されば美代もゆかりと譯ある中と聞きて心快からず思ひながら、人は情に脆くして震策がやさしきに絆され、角、正吉が騒ぐほどにはあらで、家内穩かに納りけるが、四五日前より震策の顔色済えず、多く物も云はず食事も常より少なくて浮立たぬは、何處ぞ加減宜しからぬにや早く診察をうけたまへ。病氣は一日の手後にても恐じき事になるものといへば、何處も悪き所あるにあらず。さらば一方ならざる心配ありて其に屈託したまうなるべし。さもなくして此頃の様子ほど推して尋ねれば、少し役所の事にてとばかり深く言はねば、心懸りな、何ごとか聞してともく、に苦勞したしといへば、其方達の知る事にあらずと勿らるゝに返すべき言葉なく、其後は苦勞の日に増し面色に顯はるゝを、餘處に見る事のつらけれど、細みて子細を明かさねばなすべき様



なく、不機嫌なる心をとり損じてはと、はらくとたゞ心を傷めぬ。  
 震策は沈みたる男ならで、善く言ひ善く笑ひ、此月ほど、大分氣遣はしき晦日前も浮かぬ顔せず、役所に地震沙汰ある頃、同僚來りて寢食も安からぬなどいへば、主なき大も食ふて生る世の中に、一箇の男子ではな  
 いか。其はともあれ。地震必らず有るべき確とせし徴候あるにもあらで、風聲樹のびくくもののが、  
 無根の浮説に我から騒立つるに何の懸念あるべきやと、多少は其沙汰の根據ありと信じて、心を弱せじ  
 と、大丈夫、大丈夫、安堵したまへとはぐらかして、何時も談話は愉快を種として、世間はおもしろく渡ら  
 ぬが損との主義なれば、胸狭き女人の縋りて柱と頼むには心丈夫なる人物なり。如是男一人ある家内には、十  
 分の苦勞も七八分にて済み、泣言好の女房も自然氣に腐敗なくなり、一圓持つても百圓束二ツある心の饒  
 に、壽命の十年は請合延ぶべし。震策顔色蒼さめ溜息を吐くことなど、其も稀なる病氣の折ならで、何時が  
 日にも見懸けしことなきに、此の日頃の容體に美代は不審をうつ段は過ぎて、一方ならざる憂慮なり。病  
 氣かと尋しに其にもあらで、押して尋けば女人の知る事ならず、役所に關しての筋なりとは、いよく聞捨に  
 なり難く、なほ其子細をと思しが氣の結ばれたる時には人の言葉は腹立しきものなり。まして女人の知る

事ならずといはるるものを差出がましやと、温讓の女人なればそのまゝ言葉を返へさず已みて、心の中  
 に其か此かと推測れど、我と得心すべき見當つかず、思ひ悩む餘りに、いつそ此事を母嫌に打明けてと思  
 ひたれど、年寄れる人はいと々苦勞をしたまふべし。我にさへ聞かせじとの事なれば、悪耳に極まりたりと  
 胸に納め、姑の前はさり氣なく笑顔を粧り、良人に對しては、馴々しからず言葉少なにしほらしくとりな  
 て、露を蹴さぬ蓮葉にも横紙破の風あてゝ震策の苦き顔は和らがず、三日の間に十度とは物を言はせりし。  
 四日目の朝は寢過したりとて、朝飯にも及ばずそとと出勤せしが、新裁の綿入に常用の羽織を重ねて  
 着せしを、其とは心付かざる氣色なりし。女人はいそがしき中にもかゝる事には氣付くものなるに、成程男  
 子といふものは……此間も近藤様が下前にしつけ緒のついたる衣物をきて見えしと、脱更へし古小袖を疊  
 まむとて、左の袂より丸めし巾を引出し、また右へ手をいれるれば鼻紙屑一揃もありて、みな役所用の郵  
 紙なり。なほ剩残あらむかと探るに、出でしは粉薬らしき紙包を、袋入にして見るから勿體らしげなれど、一  
 字の上書なければ、何とも知れ難し。されど此處にあるからは、自分の服装に疑ひあるべからず。扱は顔色の  
 わるさも病氣なるか、其を押巻むは可怪やと糊封の口を引裂き、紙包を取出し押開けば黒色粉薬なり。



なくく視れば茶褐の様な所もあり、摘みて拵るに柔かくして、之を嗅ぐに少し焦臭し。元のごとく包んで袋に收め、火鉢の角におきて、疊みかけし小袖を形づけし所へ來合せしは懇意の醫士なり、是は蜷川様！早速ながら是は甚麽なる藥劑なるや、御覽下りませしとかの紙包を差出せば、蜷川開きて點檢し、美代の顔と薬とを見合して驚ける眼色なれば、何の藥劑と復尋ねれば、何處よりお手に入れしぞ。夫は良人の袂より只今見付出したるなれど、この兩三日は顔色悪く、氣分快ざる容子ゆゑ、病氣かと尋ねしにさらぬよしを答へながら、我見し所にては何所ぞ悪きに相違なし。かく藥劑を所持するからは必定其なり。是を見てたまはらば病症は知らるべし。腦か、肺か、それとも例の胃病にや氣遣はしといへば、蜷川は眉を擡め近頃怪しかる事かな。これは男子の用ゆべき藥劑にあらず。血道かと尋ねば首を掉り、寸白か、否と膝を進めて聲を落し、□□といへる墮胎藥と聞くに美代は膽を消し、是が手に取上げ、しげくと脈入りしが、扱は！と思ひ當れるを色に出さず、かゝる恐ろしげなる物を何用ありて靈策殿がと蜷川の顔を見れば、蓮田君に限りては淫行すべき男にあらざれば、是に用ありて所持せしにはあらざる可し。さりながら是は直據取捨てたまへ。母様は彼方にか、久しく御無沙汰せし故今日はお門を通る序にといへば、長らくお見え遊ばさぬといつもお

噂をなされて御座ります。何卒彼方へ。御免と蜷川は坐を立ちぬ、美代はかの藥劑を掴んで火鉢の前に控と座し心細げなる溜息吐いて、いよく一大事とはなりけり。よもや如此までとは思寄らざりしが、お嬢様身重にならせ給ひて、もはや陰すべき術なきまゝと鬼のやうなる事を巧み、墮胎藥とは恐ろしき男、女哉、外に千百も仕様模様のあるべきに、この儘に捨置かばあられもなき事仕出來したまふべし。情氣がましくていふは可厭なれどと火鉢に倚れ目を瞑りてこの思案に屈することやさしけれ。婦人として我夫を取が上に其の胤を宿せし女の、骨を噛むまで憎からぬはあらざるべく、また二心の良人の恨めしさは、男、傾城！人非人！我は玩弄物にされたるよと、一徹の女は心狂はしくなるを、あれは嫉妬まじしやと餘所に笑ふは情知らずなるべし。美代も二人の中を聴きし時はくやし涙を流して、とても露らせぬ此無念に狂ひ死するともと、泣きける心には素より無量の嫉妬充ちたれど、墮胎藥と聞きては流石に女心の感じ易く、餘りに情なき業なり、この藥劑過ちてもしや命に及ぶ大事あらば、良人は名譽上のみならぬ罪人となりて、藤村御夫婦は懸代なき御秘藏を失ひ、三方四方の維義愁歎、其なしに濟むも濟まぬ此身一ツの了簡なりと、此勘辨が石の扉とも鐵の橋ともなりて、暴るべき嫉妬の一念を留めたり。さるなく



しては此道ばかりは誰にしても辛抱なるべきにあらねど、義理に立つべき白又はなしといへり。白又はぢろかな事爆裂たひなまら弾も人情の前には火焰ほのよを吹き難く、其人情が義理には、曲りて折れて溶くらむ。此日の夕暮震策しほく鍾として戻り、羽織袴そとくに脱捨て、火鉢に倚懸り顔に手を當て、吐息の忍びやかなるにも妻の耳は時そはたち、様子を覗へばこの兩三日に幾層増せし苦勞の面色、扱こそと合點しながらそしらぬ風に持なし、好める茶に晩飯ゆふしを薦め、灯ひとも点りて少し経ちし頃、珍菓の砂糖漬を菓子に茶を煎れ、我は機嫌よく浮世話を仕懸けるに、震策はうるさがりて生返事なまへんじの應答うたかたしながら、顔を彼方に向けむとするを美代はひたくと摺寄り、身は愚鈍おろかにして物の數ならねど女房にあらずや。苦勞あらば相談對手にもしてくだされ、及びぬながらない智恵なりと振ふて貸しましよ。命をかけてならば女の念力、世間一道の事は随分さばいて見るべしといへば、徳智恵の賢才かしたて風、何のちのれがと言ねばかりにじろりと美代を見る眼に冷笑れいせうを含みて、直に顔を彼方に向くれば、美代はせまこみたる聲音のせわしく、名譽とやら信用とやらを千萬人に失うても、この女房一人には陰したき思召にや。我何程のぼんやりなりとて、大事の良人を寝取らるるを知らであるべきやと、見事に言放つて横にぐるりと體を轉向むかひすれば、震策電氣を感ぜしごとく、此の一

言にびくとして身を起し、美代の横顔をじつと見詰めたりしが、奥の母に聞かせじと聲を潜めて、これ妄むやみ説なごをいふな一美代は顔を向けて、良人の顔に拘はるを何を榮はなにして無根言むねなしごをまうさうや。二月も前より熟知よくしりたれど、はしたなしと此身を慎み、世間に此沙汰廣まらむことを氣遣ひて、今日が日まで胸に納めし美代の心を、可愛とも不敏とも覺さぬか。露ほども左様覺さば、出來たる事は今さら所爲せむなし。一層じかくなりと所わだかま蟠まなく打明けたまはる、對手は大恩あるお主のお娘子むすめ、格氣も嫉妬も人による。何ほどの子細あるまじきに、非義に眼眩めくらみたるお二人さま、ゆかり様はあれほどの御州ごしゅう問もあり、貴耶あなたは又男といひ格別の智恵あるべきに、揃ひも揃うて無分別なる術計じゆつの果は極悪非道など、一段小聲になり、墮胎薬とはそもく何事ぞや。餘りの無法無慈悲に身の毛が竊立ひそつと、袂たもとよりの薬劑やくざいを取出し、是は何ぞと震策の膝の上に置けば、是をど計り呆れて言句はなかりき。此程の證據ありても美代を日本一の愚鈍おろかと侮あなり、ゆかり様との中を裏みたまはむ御了簡か。震策殿。これまで知りてもつひ一言の厭味はいはぬ美代が心を酌みて、前非を後悔したまひし上、此始末つけよ、頼まむのお心は御座りませぬか。まだく陰やみ立たてなされたまかど遁がさぬ言葉に、震策惣身に冷汗を流して坐にあるべき心地せず、身を縮めて顔も得上げざりし



が、少時ありて、美代濟まぬと絞り出せし一言には、膏も血も混りてその苦痛は何に譬ふべくもあらざりしが、また此懺悔ゆゑに縮たる呼吸を少し吹きけり。  
 よもやと思ひしに正鵠を射貫かれて、震策今は陰すべき様なく、其の上に靦面不義の結果ゆかりの腹に宿り、露頭の端緒に及ばむとすれば、之に心惑ひたる窮策拙なく、墮胎薬とまで煎詰たりける、心は麻のごとく亂れながら、一大事を打明けて智恵を借るべき人なく、持餘せし折からなれば、美代が意外に捌けたる言葉を聞くに、敵ながら頼しく思はれ、なまなか韃まむは美代が折角の志を無にするに似たり。之が情氣に亂れてはしなく吼り懸るものならば、底の底まで見透かされたりと見ても知らぬにて通すべけれど、我名譽を思ひ、藤村の恩を感じて我等二人の爲によかれと計らふての申分は、慚愧に堪へざる貞女、其を不足らしく餘所にして我は榮耀の不義淫行、神は在さざる世か、此身の今に無事なるが不思議なり。冥利を知らざる男、わが女房ながら面目なくて合はすべき顔なしと、俯首きて額の汗を拭ひ、おつくと膝を進め、萎れし調子低に、此度の不量見は今後悔の曉に及びては穴へも入りたきばかりにて左右いふべき様なし。我口から若氣の心得違ともいひ悪し。今よりして思へば、此淫行をどの我が働さけるかと呆るとばかり、天魔ふと魅入り

りての所業かと夢のさめたるごとし。慙入りしは其方が心入なり。そでなき良人に恨めしき顔もせず、ざりとて其を他人にいふにもあらず、胸に深く納め暖氣に包みこみして、不義の二人が身を心底苦勞にして、世間をよきやうに取成し、名譽を傷けじと段々の心配、何と詫びて然るべきや、いかに禮いふてよきやら、震策一期の不面目、一期の歡喜、此通りと疊に兩手をつき、美代ゆるしてくれと頭を下れば、あれまあ、此は何事。貴郎に面目を失はせむとてかうした次第にあらず。わが何よりの歡喜は、是までの心を入替へたまひて、其如く後悔の色見せたまひしなり。只此の上のお願ひは、ゆかり様尋常ならぬお身となりて、かゝる恐ろしき薬を用ひむとまで、絶體絶命の淵に臨みたまひ、數ならぬ我言葉をお聞きなされましたほどの、今の切なさのちともお忘れなく、仕懸らるゝ戀なりともゆめく手出しは慎みたまへ、ゆかり様が御嫁入前の大事のお身なる事は、申さずとも御存じなるべければ、こと新しく繰返すも無益なればくどくは申さじ。たゞたゞ此末を慎むでたまはれ。扱又ゆかり様は最早三月にも及びたまひしやと尋ねれば、震策頭を掻きまてまだ二月と少日なり、さればなほ便宜よし。明日にもゆかり様を何處へなりと賑はしからの温泉場へお連れ申して、其處にやすくと身二ツになどしめたまへといへば、震策合點ゆかぬ顔して、生れし其子は？お氣遣ひな



されますな。私お引取申して我子同様可愛がって御養育いたします。其方が其子をと、後は言葉なくおのづから眼中に涙を浮びける。やゝありて、世に嬉々篤志のほどは未來までも肝に銘じて忘るまじ。さりながら仕官の身は、便々としてゆかり様を介抱して居難し。此分別は、さればお役所の方は所勞届を遊ばし、一週間の休暇を願ひ、明日にも御出立なされて、御介抱の中には三日を出でずして、此方より遠慮なき人を使はずやうに計らへば、其人着次第一先御歸京なされませ。なるほど温泉場にて産せし上、何氣なき顔して歸らば、世間に此事知ずして濟むべし。是は極めて好けれど、われ七日も留守とならば母様不審を起したまふ可し。其上生まれし子を引取らむは、其方が一存にはゆくまじければ、此計の成就覺束なし。其に又藤村様にてもゆかり様無断にて家出したもふを、騒ぎもせずして十月近くも打遣て置く可きや。之に就ては何とか一工夫なくては成るまじと當惑の眉を蹙むれば、美代もやゝ雲時思案せしが、やがて氣力無き聲にて、とても藤村様また母様には陰し終す事かなふまじ。内々に陰立せむとせば、却て世間に裏より機關を見らるゝ理なれば、貴耶の世間に對する名譽、二ノにはゆかり様も、貴耶の形體にならぬ様にせむとには、内々へは始終を明して一同合體するの外に有べからずと言ふに、（以下省略）を流し、不義の段々は我口からは面目な

くて白状しがたし。其は御發足の後私好様にお話いたして丸く拾めて置きますほどに明日はゆかり様をお連れ申して下されど、眞實此事を心に懸けての入智恵、此女の内は大海のごとく底知れず。

## (十七)

美代が差圖のまゝにゆかりを連れて忍ぶ處は伊豆の修禪寺なり。時候は夏季ならざる上に、伊香保熱海杯とは事異りて人氣少なく、多くとも米俵背負うて自炊に宿る田舎人なれば、見苦められて大事に及ばむ心遣いらす。某屋といへる態と中等宿を擇びて其處の奥座敷に閉籠り、餘所目には羨まじき初契月と見ゆれど、震策の胸にはさくら波だつ苦勞の絶間とてなく、一日の勤は樂寢美食の極樂責に苦しみながら、明る日なれば暮ていつか二日を重ねしに、東京より音沙汰なく、三日目の朝にもなりけり。二人ともに苦勞あればおちおちとは寝られず、月外なる泉の湯玉の音に、朝は目醒く起きて連立て一風呂浴びて戻れば朝餉の、並びて待つをそくくに箸を捨て、それから火鉢を堺に浮かぬ顔を見合せ、懸合の溜息に此室の空氣腐敗して氣色悪きこと限りなし。震策着皇として部屋を出入り、椽の欄干に倚りて東京よりの道を眺み、まだ見ぬのは心元なし、察するに美代が目算外れたるかど、障子を立て入ながら獨語けば、ゆかりは男の心弱きにぞれた



る聲暴く、目算外れなば其までの事なり。さなきだに氣のくよくよする折から、其様に思痴ばかりいひ續く  
るゆゑ、いよく心配嵩高になりて壽命縮まることし。葡萄酒なりと取て二人して飲まむと、手を鳴らし  
かくるを押留め、音信聞かぬ内は酒も咽喉を通り難し。お前様好もしくば一人して召上れといひながら、あ  
と太息吐いて其處にころりと仆れ天鵝絨の括枕に手を伸せば、ゆかりは其枕を取つて我後に隠し、お  
前が寝入らば我一人淋しければ起きて居てとの言葉に、震策むくくと起上り、ゆかり様、先日より申すこ  
とく末遂げぬ悪縁に惱まざるゝ此苦痛を見るにつけ、我はふつつと淫行を思ひたちたり。今更卑怯に二足踏  
む水臭き震策なりと、嗚やおさげすみもあらむなれと、お前様にしても今度といふ今度はよからぬ事の結果  
は、如此よからぬに目覚めたまひ、御後悔なされしなるべしといへば、後悔一何を後悔！と冷笑ひ、此道  
には後悔などいへる水臭き事はなき道理なり。後悔といへば他聞よろしけれど、其實は秋風立ちて元木に  
増る末木なしとかや。縦合露顯はされたるにせよ。智慧分別盡きたるにせよ。第一に陰す可き女房に委細を  
打明け子までなしたる密婦に嫉妬せずして、如此までに計らひしは眞實なりと、其れ等しきに心を動か  
され、おめくゝと其指圖に従ひ、萬事をよきやうにと其手に委かす、此始末美代ゆゑに首尾能く附かば、生

涯夫の頭土る瀬なく、またく主筋なる我とても肩身窄る譯にあらずや。いつも賢きお前の處置には、似合  
はしからぬ今度の失策。さほどまで子の出來るが恐ろしきや。情なき人は違ふものかな。我に對して美代  
がこれしきの志は、更に珍らしき事とも思はれず。それを事々しく恩に衣せて賢女立の面憎きに、お前は其  
實意に紳され、大方此身は鼻に附きたる頭といひ、之をよき潮に逃げむとの目的とは遠から見抜けり。さほど  
可厭なものならばさぞ御迷惑其を此方よりたつてと言はねば、今にも出立たまへ、我を振捨て。美代が家に  
て案じ煩らひ首を長くして待つてゐるべし。我親人の勘氣を受けて人も遣はされず、送金さへなくば此の  
身の因果それまでなり。腹のこの子を同伴にして山に分入り、溪に落ちてなりと松に縋れてなりと果つべ  
れば、離別の今日を命日に思ひ出せし日には、菓子なりと花なりと供へてたもれ、飽し女の紀念なむと見る  
も汚はしからむなれと、馴染のむかしを思ひて我ゆゑに果てしか不敏のものと、此を邪魔ながら持つて行  
たもれと、聲を曇らし涙を浮べながら、さふふいあ入の黄金指環を抜かむとすれば、震策其手を抑へ、事を分  
けて昨日一昨日よりあれほどにお頼み申せと、只我を水臭しとのみ言放ちて、果は死ぬ々々と其は我を困ら  
すといふものなり。我には定まる妻あれば、よしや無にもせよ釣合はぬ二人の位置、とても添はれぬ縁なら



すや。其ど知りつゝ如斯中になりしは無論此身の不覺なれど、されば好時分に見切を附ひねば、我は好かれどお前様は一生の不具、いとしければこそ當坐の苦痛を辛抱しても、行末お前様のお爲を思へばなれ。なほ篤と此處を御分別遊ばし、今より改めて骨肉の縁に結び替へ、お腹の子はわが子となして立派に成人さすべし。さればお前様も再生りしゆかり様になりて、磯村様(法學士)へ目出度御與入あり、千秋萬歳お二方御息災のほどを陰ながら祈ります。男女は聖人ならざれば、一ツ二ツの悪事はありうちなれど、好加減に前非を悔ひて悪行を悔むれば、神の罰もなく人目にも觸れず、末吉なり。後悔なくして何時までも夢中に迷ふものは、一人不殘社會の外に放逐され、あるがひなき一生を死ぬこともならで、愧顔かくこそ氣の毒なれ。世間に義理なく徳義なく名譽なくば、この「愛」骨に染みて認むべきにあらねど、世間を思ひてゆかり様今より他人とならむ、骨肉たらむ、磯村夫人たらむとの一言が承はりたいと、疊を叩いて通寄れど返詞はなく、袂の吹綿を摘みては捨て、摘みては捨て、膝に恨の雫をおとして、一向埒明かぬ所へ下女障子を明けて、相州訛の可笑氣に東京より此方へお客様が。

(十八)

急ぎて良人を發足したれば、ゆかりに遇はして談合さする間もなく、有金少許を洗浚ひ路用と二三日の凌ぎに足るばかりを持たしたれば、此方の相談に問取り、宿屋にて難義させむは氣の毒なり。いかにとも早急に形を附むと、其午後姑には、葉書來りたればと詐はりて、暇を乞うて藤村に赴きぬ。主人夫婦折よく打揃ふてありければ少々密談の筋ありとて侍婢を拂はせ、しかくど有りし次第を細やかに語りければ、夫婦は聴くことに顔を見合せ、一々呆るゝばかりなりしが、幼少より早稲なるゆかりの行狀に泣し事のありければ、今かゝる事仕出來して見れば、限りて無き事と圖り難し。磯村と縁組の大略整ひたる筋前に、是ほど當惑一方ならざりけるが、美代が天晴大人しく暴立てざるのみか、袖に藏すまでにお腹太らず、人目にも觸れざりし前に修禪寺へ忍びせしとは、出來たる所置を心中にては拜まぬばかりに思へど、娘がかほどの不品行に一言もいはず、出來たる事は所爲なし、よいわにて甘く濟まし難きは、美代の手前なり。不埒不届、不所存のいたづら女、親の面皮を汚す奴、我等親でなければ、亦彼も子にあらず、了簡せじ、勘辨せじ、家へ出入はさせ難し。我眼目の後はともあれ、さる奴は此後いかな椿事を仕出來し、藤村の家名に泥を塗やも計り難ければ、以後の見せしめ、よき刑罰、更に構ひ附ずして死ぬとも子細あらじ、存分窮命させよと、さす



では心ならぬ立腹の言葉を荒らげでは、美代が美德に對して面目なく、又た其志しに酬ふべき様なしと思はば、父親は烈火の如く滿面に怒氣を顯して、云む様なき人非人！藤村の家名七代の今斷絶すべき時節至れるか。美代がさほどの所はたらき置は嬉しき窮まりて禮を述べべき言葉なし。志は重々難有けれど、彼には必ず構ふてくれな、日頃の恩誼を思ひて身を捨物に骨折りに周旋してくれたとて、我初一念はなかく動く事にあらず。わが娘とは思ふな、わが娘ならねば其方には義理もなし思もなし、赤の他人の、しかも大事の良人を竊みし不義ものに世話は無益にせよ。さりながら美代其方に苦勞を懸て返すくも氣毒なり。濟ぬ事なり。よしも辛抱してくれたるぞ。此情には屹度返報すべし。同じ女にありながら、善惡邪正の相違雪と墨との如し。氏にも育にもよらざるものか。老て苦勞のよき種時し我等は世に稀なる不仕合者。ゆかりの事には構はずと、美代ゆるりと話せ、奥馳走してやれ久しぶりなればと、拾詞しつじを房永は奥にいりぬ。女親は慈愛格別にて、美代の膝に膝摺合ふまで寄添ひ、忍び音ながら精神籠めて、これ美代そのうち其方はいしくも計らうてたもつた。心中には千萬ゆかりの不屈は惜かるべけれど、行末頼みなき一人子ひとこを持ち合せし、不運上なき此母の心を汲みてなるまじき所を量見してくれよ。殿様は知ることく正直正路の御氣質なれば、不善を見ることが醫敵の如く、

我子と他人との用捨も遊されぬ御方なれば、今のやうなる御立腹。さりながら親ごやもの子ごやもの口でおほせらるゝほどのお憎みはよもあるまじ。其方に一方ならぬ難義を懸くるゆかりを、如此いへば辯護かたがひやうにて、一圖に甘き親心、人の憂は微塵も思はずと、其方の思はくも愧かしけれど、他人の思慮かんがひとは格別な親子の情。わが娘一人よくば他人はいかにとも成次第、わが此程實意の萬分一を汲みもせて、わが儘勝手ごんごの言ばかり、情なき我と恨むでたもるなや。磯村との縁談も極りたるに此の事弘まらば、彼が一生の大疵、とても嫁ぐべき所又とはあるまじ。大事の中の大事は今なり。されば此方にてはゆかり病氣と言觸らし、彼所にて平産の上呼戻して、焼杭もいぐひに火移らぬ間に磯村へ遣はさば、我等二人の安心、外には此世の思出なし。早速震策の手代りに氣遣なき人を遣りて、我も其内殿様うちどのに其となく。暇を戴きて修禪寺へ行くべし。孩兒こどもは引取りて成人さしてくれれば、何處まで優しき心やらむ。其手當扶持は我より不足なく仕送り、學問修行さして一人前となるか、女ならば嫁入りさすまでの世話は、皆此方よりまかなふべければ、我子同然可愛がつてたもれ。其につけても、あれほど物堅き震策が……。若きものは油断ならず、何時の間にやらそのかしこと云かけしが、美代と顔を見合せ、親は愚なり、恨は他人にはあらざるものと、其れより手答萬端申合



せ、幽燈ひかりに又其内には是非ゆるりと、美代は暇を告げぬ。此日は奥様支關まで見送りに出たまひ、車まで  
ひけり。これも千ゆゑか、人の親の心は闇にあらねども。

(十九)

まづ一方は首尾よく形附きたり。自宅には夕飯ゆふめし遅なはれるに我は歸らず、何日になく震策とついでも戻らざれば、母  
親お一人にて嘸かし御心配と、魂たましひ 魄身に添はねば章駄天走りの人力車もどかしく、やうやく我家へ着け  
ば、格子を開くる音に案の定待兼ねし姑飛あせで出で、まづ歸宅の遅刻おそに案ぜしぞや。震策が今日に限りて遅  
まは何ぞ用事ありてか。其由言置て出懸けしかと、美代を家内へ入れもせず、支關に立ちながらの尋問たづねに美代  
は揚板たか刎なて駒下駄を仕舞ひながら、されば少々用事ありてなり。其は只今お話し申すべしと、奥にゆきて  
衣物も着替へず、まづ火鉢の前に座りて、過去あつち事なれば必らず叱つて下さりますな。實は二人が密ひそ會あひまの  
始終を播摘あみて語り、ゆかり終つひに身重みぢになりたまひたれば、餘義なく伊豆の修禪寺へ二人を忍しのばせし一條  
より、この始末はつまつつげむ毎ごとに今日藤村へ行きしは、外ほかなる御腹立ごはらなれど、奥様は快よろこく御承知ごうけ  
ばされ、かねての手筈通りに参りまして、ゆかり様にも良人にも疵きずが傷かぞと、うら濟やすむべき手續てづかに至りた

れど、其子を引取らむには、母様の思召聞かでは、私の自由に成難ければ、何卒良人が不量見の段は此度限  
りお容されて、其子を養ひたまひ此身の願、お聞届けあらば難有しといへば、姑仰天の餘り物をも言はず眼を睜  
りて、まよとく痛く心驚おどきながら、半信半疑の風情なり。美代重ねて、吃驚おどろあそばすは御道理なれといひ  
懸しを引取り、其は眞實か。ええ、あの眞實か。現に今日お二人とも伊豆へお發足なされました。やゝ子  
を知ること親に如かずと誰が言初し空言うそなるぞ、三十年來欺あざれたり。犬畜生にも劣りし震策、情や憎や、お  
のれ了聞しるならじ。女もある可きに擇えらむに擇えらむお主様の娘といひ、縁談極まりし大事の女をそのかせし不埒ふち  
の、我殿様奥様に合はすべし顔なし。亡なくなられし良人の木主もくぬしの手前、我不取締の面目おもてなさに、お燈明上げ  
にも佛壇を覗き難し。あの白しろ徒たは親父様遺訓の一通を忘れたるか。「われ十六歳の若年より山海の御高恩  
相受くるのみにて、五十年の長の月日を安樂に、させる忠勤もなき身にて臨終の病床にまで残方なき御手紙  
を給はり、尙又其方官職を辱おとしむるに至りし教育まで、いづれか君公の賜物ならざるはなし。我亡なき後は一  
倍忠義を抽んで、一朝藤村家に事起らば及ぶ程の力を盡して、萬分一の御報恩いたすべきものなり」との御  
遺言は、骨に彫みであるべきに、反對なる不忠不義、恩を仇とは震策おのれの事よと涙に咽なむべき事



存を責立てく、震策其處に在るがごとし。美代は手を附けかねて黙然たりしが、聲を和らげ、其お腹立はざる事ながら、震策殿一人罪あるにもあらず、戀の對手は同罪なり。其ゆかり様をさへ奥様おゆるしなされしからは、母様あなたが震策殿ばかりを責めたまふは苛し、情なし、片手打なり。私可愛と思召さば堪忍して上げて、生まれむ子は引取り、初孫の傳して老を忘れむとの言葉を下さらば、美代が一生の歡喜此上なし。何卒とばかり袂に縋り、顔を覗きこみてあどなげに頼めば、母親立腹涙を呑込み、ようこそ震策を辯護てやつてくれたれ、嬉しいぞや。女猫を抱たりとて格氣の角芽立ちて、つへこへいふやらふてゐるやらは世間女房の風習なるに、我無念をさつぱり捨て、二人の爲に其程までに心勞する其方は、神様佛様の化身か、不埒なる子息の母は面目なく慙かしく、昨夜までも此事夢にだに知らざれば、姑面して腰を按せ肩を叩かせしが、思へば此身體の痲痺せざりしが不思議なり。かほど有難き志しには、畜生の心も流石に感じて、いかばかりか嬉しいかるべけれど、佛様なりとも其方口女房、犬猫なれども震策は真人。真人が女房に頭を下げ手を合はして禮はいひ難かるべけれど、外親にはさして嬉しいらしくは見せざりしなるべし。其は幾重にも私になり代りて禮をいひますと、蒲團をすへり下りむとすれば、あれ勿體ない。さらば差出た

る私の處置を我慢なされて、初孫可愛がりて下さるか。其子の可愛事はさらくなければ、其方の「志」を傳する心にて随分いとしがる可し。過にし事は及ばざれば、あれの不埒は了簡して、お位牌へは内密にして済してやるべけれど、向後の戀惡明日にも歸らばと切齒をなせば、美代は心配顔して、あれお願ひ申すは其事。此度は何もおほせられず、目を瞑りて昨夜の夢と流してたまはれ。あゝ、よし、何もいふまじ。萬事は其方に頼しぞといふ時、鐵瓶の湯烈火に乾きてからからと鳴るに心付き、あら！まだ夕飯前なるべきに氣のつかざりしといへば、この一條に胸は一杯になりて空腹もあらねど、其方は嘸や。いえくあなたこそと、急がしく膳立して箸を取りしが、母親はわづかに一膳。子は樂の種、または苦の種。これと思ふにつけ、不孝は人情出来まじき事なり。

(二十)

藤村より介抱人を遣はしければ、四日目に震策歸京し、美代がくれくの依頼なれば、小言も好加減にて策ひた謝罪に前非を悔ひ、神妙に日々出勤して此事役所に誰知る人なく、従前の品行端正家にて通りぬ。ゆかりの母は臨月まで月の二十日は修禪寺に滞在して、日夜の看護を父親も黙許にて、世間へはゆかり腦病な



りと披露し、月滿れば、美色の同士に出来し子は玉の如く光る女子にて、母の肥立は雖無く、孩兒にも病なく、目出度趣を申越せば、美代はわざ／＼出向きて其嬰を懐きて一足先に歸れば、健康なる乳母の兼て儲置きたるが其日に馳付け、甘露の乳房を含くまする傍より、母親ベツたり附傍ひて和かき頬を撫で、こころんとあやしては、あれ笑ふと他愛はなかりけり。震策は美代の前にては、なるべく其の子に寄らす寄せつけず、陰にまわりてこそ／＼と顔見る遠慮を、美代は氣の毒に思ひ、乳母に含めて震策に突付けて懐かするを、外貌に迷惑がりてうるさしと避ぐるこそ可笑むけれ。ゆかりは二三月経て常時の身體に復れば、美色少しも其光を減せず、男の味知らぬ生娘粧して博覽會に行けば千萬人の首骨を捻りてゆかしがらせけれど、其事知れる眼にてよく／＼視れば、なるほど目淵に極印あれとこれに心付くものなく、兩親口を拭ひて吉日を急ぎ、首尾よく磯村法學士に縁組ませ、見事なる結婚式ありて夫婦萬歳！と、賓客さめめきの中より人力車二輛引き出し、仰げば千點の星影さら／＼愉快の光を放ちて、面を拂ふ夜風爽やかに、木間に入りては奏樂の音あり。初契月七日ばかりを伊香保に樂しく暮しけるが、ある夜ゆかりと先年の修禪寺を思ひ出し、湯玉の響に身毛を彌立て、あの時悪縁と思ひ切さりせば今頃ほど、そらろに物恐ろしく覚えぬ。氣毒なるは學士にて

この二番煎じながらの濃色に魂を打筋み、寝てもゆかり、寤てもゆかりと、良人に惚れらるゝは女房の身にしては、洋装十襲入の長持より重寶にて、二度目と知れての夫婦ならば、その弱點ゆゑに萬事につけて、身を退き心を窄むべきに、ゆかりは世界隨一の幸福者め！勝手氣儘を働けど無理も道理に通りの贅澤三昧、學士二目二目三四目も置いて機嫌を窺ひぬ。世間には幾許もゆかりの如き花嫁ありて、磯村とさき花婿あり、妻を持つべき男は一目の美色に泥まらず、身上よく／＼吟味の上にもせむこと肝要なり。自身知らねばよい氣になりていとしがれど、未破瓜の破毀玩具を一生の持物にして有難がるは可厭な事なり。其後震策は動直にして、美代は貞實にして、不義の娘震子は健康なり。當年十四五歳の男子が嫁ほしき時節にはこの千年頃なれば、迂濶と色に引かれて之を娶りたまふな、不義の土に貞操の花咲かず、震子の性質心元なければ誰も用心あるべし。「士族蓮田震策長女震子」幾度も繰返し肝に銘じて忘れたまふべからず。これは不義の子なり。震子は不義の子なり。



(上)



日光街道栗橋に角屋といふ休茶屋名高く、旅人に憩まぬはなく、憩みては茶だけにて行くはなし。日中は此を日除の、店頭なる合歡木の葉に入日薄らぎ、かなく蟬の聲夕暮をせきて、行人せはしなく腰を懸くるものなれば、床几の筵を巻き、茶道具などとりかたづくる處へ三十未滿の商人草臥足を引ながら、お仕舞ひなせる處をお氣の毒など、挨拶おとなしき江月詠。女房は冠りし手拭をあはてて引とり、何のお構なくさあ此へと筵を巻かへし、なほ熱き茶釜の底を汲んで煮花をさし出すを、やれ旅は夏のものではないと、手甲をこきあげながら茶碗を取らむとして女房の顔を見れば、山路來て何やら幽し藎草、其紫の江月にも二人とあるまじく容色よきに、茶碗に手をかけしき、盆を持つ手のためゆるるまで見惚れ、穴の開くほど凝視らるゝに年増ながら羞かしく、誰も呼ばぬにあいぐと返事して茶を早くとらせ、土壺の蔭にいりて後向になり、小枝をひしく折りて焚つくるを、此男爪立てのまげば、頸足玉をのへ、撫肩しほらしく、細腰袋々としていかにも華車なる後姿、京といふなら京と得心のゆく骨格のやさしさ。お前の生國はと聞けば、此土地のもので御座りますとの言葉は、紛ひなき此



處の誰にて、顔が見たさにもう一杯といへば、會釋して近寄るをなほ熟視るに自尊立よきが上に眉毛の痕  
 青々としたるも好もしく、物いふ時染めたる齒のあらはるゝ口元に愛嬌こぼれて、何とも斯とも言はう様  
 なし。世の中にはこんなのに氣を採せ、情氣とする割あたりもあればあるもの哉。我も年季明けたれば此度  
 本國下野鹿沼に歸り、やがて一軒の主となる身の女房持ねばならぬが、持つならば此程美しく、しかも温  
 柔いのを貰ひ、三度の給仕もこれがするならば、梅千澤庵にて他人よりは甘く喰ひ、榮耀はやめて金を溜め、  
 斯るいやしき業は洒落にもせまじきこと、急にうつくしき女房欲しくなりしが、此程ならでは千兩の持参  
 ありとも、心は勤ます一も二もなし、平たくいへば此女欲しきなり。欲しけれど定まる男あればと、頼みな  
 く心細くなり、腕組して溜息吐くを女房見尤め、御氣分悪しきにや、途中めしあがられし水などに當られて  
 か、其ならば持合せによろしき薬あり進せましやうとは、深切なる言葉、他人の我にさへ其なれば、まして  
 亭主にはこれほど實を盡さるゝ事やら。はいお薬とくれし禮より談話の緒にとりつき、お米といふ名から聞  
 初め、今年二十五にて金性——我とは合性——四年前に亭主を持ち、まだ子供なく——道理こそ若いと喜  
 ばせ——両親なければ舅姑もなく、亭主は木樵と聞けば聞くほど、そんな者にとはいよく口惜く、長居す

るだけが思の種、行かむとするに名殘惜まれ、また二ツ三ツ話す内前面の田甫黒み互りて火影ちらつけば、長  
 坐は氣毒と多分なる茶代を置き、すこく立出る後にて御機嫌ようといふ聲、又何日か逢ふべき此別悲さとい  
 はぬばかりに覺え、進まぬ足を急がせ、半町ばかり行きし後より呼懸る聲あり。いと後心に心遣る耳には、も  
 しや其人かと立留り、振かへりてすかし見れば、女の馳來るに胸跳り、其處に待兼て迎ひに戻れば、果して其  
 女房なり。呼吸をばづませお忘物と笠を出す手を、此場ざりのいたづらと握りしめて一散に遁けり。

(中)

仁助殿内にかと戸口に溢るゝ蚊遣火に、顔を掬めて入來るは、關東屋の親分様、ようお出なされました。お  
 米どの、いつもく美ついな。は、又お弄りなされます。もしくと轉寢の仁助を動起せば、此は親分  
 様お越しなされました、夕飯に一杯ひつかけころりとやりました。暑い事では御座りませぬか。扱仁助どの、  
 今夜参つたは少し無理な頼みで御座るが、日頃貞女の噂高きお米どの、手前話する面目なけれど、言はで協  
 はぬことなれば、無法な男と見下て下されな。お米殿、今日の夕暮お店へ商人風の男が頼まれたか。あ、  
 其お方がどうぞなされましたか。なされた段か、命をかけておつ惚れたわ。そりや誰に？、はて、仁助殿と



關東五郎

いふ歴とした亭主持に。えーと驚くお米の顔を仁助尻眼にかけ、親分様、其がどうぞ致しましたか。無理な頼みとは此處の事。今宵我宿へ泊られしは其旅人衆、坐敷へ通るが否や私を呼れ、關東五郎殿とは此近國に誰ならびなき俠客と見かけ、折入て頼みなきはきつい貞女と聞及べり。指もさされぬは知れし事なれど、いかなる因果にけは亭主持の上になほ頼みなきはきつい貞女と聞及べり。指もさされぬは知れし事なれど、いかなる因果にや更に思ひ切ることなり難し。只一夜の情にあづからば、此一命もなか／＼惜からじ。如是不義に與したまふ御身にはあるまじけれど、切なる我思ひを酌みて此戀取持つてたまはるまじきやと、話の中にお米は五郎にすり寄り、もし親分様、五郎様無理など知りつゝ其戀取持たうとてお出下されましたのか、上下野州に隠れもない關東五郎ともいはるゝ俠客が……。黙れ、黙れ！、亭主の我をさし置き、おのれが今の口上は誰様へいふのだ。五郎様は此驛の守本尊、おのれが去年高崎の虎五郎に引摺はれ、無法をしかけられし時は誰様のお陰で災難を逃れしと思ふぞ。いふ事あればおれがいふ。サツこめときめつければ、いややさういはれては五郎面目がない、俠客風を吹しては言はれぬ口上、お米との立腹はさら／＼無理ではなけれど、命をかけて我も頼まれしからは、出来る出来ぬはともかくも、話しの一通はせぬばならぬ。

關東五郎

かの旅人のいはるゝは、われ江戸は本町某屋と家名いふを耻辱とつゝめど、口裏から見れば、此邊にも知れ渡りし太物屋の手代衆嘉藏とて今年廿九、幼年より何の落度もなく先月にて首尾よく勤めあげ、親の名跡を繼ぐべき金子とて主人より褒美の百兩をもらひ、其上に我貯へし金子三十兩ありとて、胴巻のまゝ我に渡し、願ふは此三十兩を御身に贈り、女房お米とのをたゞ一夜かりうけ申したく、此金子にて不足ならば随分百兩に手を附まじきものなれど、さうしては第一親へ不孝、主人へ不忠、三十兩は我年頃の費を省きて丹精せしものなれば、誰への遠慮もいらす、此だけにて本望遂げさせくれなば、慈悲よ情と手を合はさぬばかりに頼まれたれば、出来るか出来ぬかは請合かぬれど、餘りに切なる熱心の不敏さに、われ一代費なき色とり持、千二千の無頼漢がそぞ竹の鎗襖の中を、懐手して往來するは物の屑とも思はぬ關東五郎、此ばかりには怯氣がきて、いひ出すにもいひ出しかね、背汗が流るゝわと始終を語れば、お米は五郎と夫の顔を相互に見やりて、呼吸を殺し——片唾をのみ、いかなる事に成行くぞ。

仁助暫時思案して、承知致しましたとの返詞に五郎ひたと呆れて、流盼にお米の様子を覗へばさもさうす！かれは涙をばら／＼と流し、仁助殿おまへは三十兩のお金に目が眩れ、女房を他人の玩弄物にして



關東五郎

飲む酒が、おいしく咽喉へ通るのか。つれないといふにも筋はあるもの。わたしは喰る物を減しても、お前の寝酒はかゝした事のないを、何の不足ありて、何の恨ありて、これ喃仁助どの、その様なさもしき事をして私を汚させむとは、よもや本心ではあるまじ。酔が醒めての上御挨拶をして下されと、仁助の膝にとりついて泣入るに、五郎は道理に責められ、何とも口を出しかね、腕を組み下視くのみ。仁助のいふは、お米、時代な事をいふな。今の二人が中に三十兩といふ大金あつて見よ、おぬしとて我とてこれまでのやうに齷齪するにも及ばず。また茶店の道具萬端新らしくして、旅人の足を多分に留るやうにすれば、繁昌はいや増し、またおぬしにもよい衣を着せたいばかり……。あ、わたしはよい衣きたくは御座りませぬ、茶店も奇麗にしたくは御座りませぬ。此が正路に手に入る金子ならば何の申分はなけれど、夫ある身が情を切賣しての富貴は露ばかりも嬉しからず。近處の人に見られても、今の木綿物は苦からねど、明日からの絹物はさもしき心の看板同様、さる不正も思はぬ心あらば、とくにお前にも木樵とさきはやめさせ、蒲手で粟の擷取わるい事を勧めまして、御領守様のやうな暮しをもして見たけれど、喃、身中に生まるゝも前世の約束、たゞ氣安いを樂みに正直正路に働きなば、神様佛様も在す世なり……。え、

關東五郎

御法談聞きたくない。不承知ならば強てとはいはぬ、亭主がいふ事を聞かぬ様な不實な女、添ふとも頼みにはならず、ありがひなき奴に喰はせる飯はなし、今から縁切てくれる。大方は三十兩といふ聲を聞きはばおのれが稼いだものを、われにしてやらるゝを口惜しく思ひ、我氣に逆らふ言を並べてわざと離られ、一人うまうまぬけ賣して其三十兩物せむとの了簡、さる腐つた根性の女なら、なほ以て添ふのはいやなり。早く出てゆけ、三十兩おのれが物にして甘いものを喰ひ、よい衣を被、わが飢死を見物せば、さそや寢醒よかるべし。去つた、出て行けとわめくに、かゝる男に添ひあてしはこの身の不運、わが夫重病にて良薬の代に身を賣ることと諦め、まだしも仁助どの息災なるこそせめてもなれ。言葉に背かば離縁とこのことなれば、今宵はさられし身の定まる夫なきと思ひ、旅人に枕かはすべし。仁助どの得心いたしました。やとと五郎の仰天、仁助の喜悅。今宵旅人に身をまかすは、神ぞ好いてする業ならず、離縁るとが悲しく、つまりはおまへを思ふての淫行なれば、この後とも今宵のことをいひ出してとかういふて下さるな。關東屋の親分様がよい證據人、もしもそのやうなる事あらば、何卒お言葉へられて、仁助どの心を静めたまへ。扱もやさしき心入れ、仁助どの仇や疎そかにお米殿の罰が當るべし。此後はいよくおぬしを大切にすることに相違



關東五郎

なけれど、もしもの事ある時、五郎が身に引請け、元の鞘へきつと納むべし。あゝ、我身こそつらけれ、  
 天晴貞女を畜生道に墮せし應報空しからず、日頃無益の殺生つゞしみたる功德も之ゆるに消えて、  
 今更念佛三昧も成佛の一助にはなり難からむ。お米どのゆるしたまへ、よい女房を持って仕合な仁助  
 どの、いざ参るべし、客人の定めて待つらむ、さらばと立上れば、お米濟ぬとつひになく仁助の頭をさぐる  
 も、三十兩へする禮儀さもしき人の心やと、またはふり落るくやし涙を拭ひて、親分様よろしく、お頼み申し  
 ますると、五郎につれられて戸外へ出れば、何處も火影見とほしに門涼の人々、お米どの今から何處へ  
 ゆかるかと、尋ねらるゝに返事はなけれど、心中聞かば、いやな所へ参ります。

(下)

親分様親分様。あつと五郎目覺し、誰だど起返れば、枕頭の薄闇を徹夜燈の陰にお米手をつかへ、少し  
 顔を背て用ありげなり。お米殿か、此夜深に何用ありて。されば折入てのお願ひ、明朝が待たれず、ようお休  
 みなされての處を。其は兎も角も、明朝が待れぬとは氣遣ひなりと居直れば、お米もちくと言出し乘るを、  
 五郎早く推し顔に、なるほど、仁助殿の手前無理に得心はなされたものゝ、扱どうあつても心は染まじ、

關東五郎

こんな淫行は我から勸めては申さじ、無理なる御亭の言葉に違ふとも違ふおぬしの心意氣こそ眞實貞女な  
 れ。よしさらば次の間にてゆるく寝たまへ、寝道具は其處の戸棚に許多もあれば勝手に取出されよ。  
 明日は明日の事、何んとか分別して仁助殿には我よりよきに言ふ可し。斷るの去るのと背かぬときは、我當  
 分引受け及ばずながらお世話申す内には、原來此方に科のあるでなければ、仁助殿から詫入らるゝは案の  
 定、かならず心にかげ給ふな。少しの間なりといやな思をさせしも皆我から、其代にはおぬしのたつ様にも  
 我計らふべし。去るにても器量よく生れついたばかりにおぬしも迷惑、われらも迷惑、この後の世には五郎  
 が宿の噂のやうに生れて御座れ、構ひてがないだけに氣安いといふ。五郎の言葉の中にもお米は唯はいく  
 とばかり、男の顔に上目づかひのさもく恨めしく、言はるゝ一々思ふ事と背中合せになりて、さもなく  
 る言出しかぬる事が、一倍羞かしく、とつおひつ當惑の胸逼り、所在なき手に崩れもせぬ襟を掻き、いつ  
 そ思ひ切ると顔をあくれば、生憎五郎が此方を見る目と見合ひ、横顔になりてためらふこそ女なれ。返事  
 を待つになければ五郎重ねて、用事はそれと思へど外にありや。あらば遠慮には及ばぬ。はい申しにけれと  
 ……いたづら者とおさげすみ下さりますな。今宵はお蔭にて二階のお方と圖らぬ契を簡めまして。やーか



るべしとは覺悟の前ながら、其と聞てはまた今更のやうにお米の顔を見詰め、ヒリ／＼と詰寄れば、火影風に煽られてはつと赤くなるに、女はなほ顔を背け、契を籠めました。あやし／＼も不思議の縁、賣りて、此人の情身にしみ／＼と忘れ難く、二世までと頼むは此人の外なくと思ひこみ、今までは長い夢、ふつり仁助殿と縁断りたき願、添ひたき二人の望かなへて下さらばと聞くに五郎殿を消し、是はとうぞ、何事ぞ、行懸りの旅人にまで知られた、此驛の名物、貞女のおぬしが、十年來可愛がられた仁助殿を棄て、唯一夜の他人とればど好かは知らねど、浮氣も主ない中の花。もはや世話のやける物持つ可き年して、ちと了簡が若すぎやう。本性ではあるまいがお米殿、何ぞ仁助殿のと一處にならぬ前の夢でも見られしか。よしや現の寢言にも、さうした事は滅多には言ぬもの。壁に耳あらば今まで立通した貞女が體無にならう。其お言葉もあるべしと、羞かしさに申かねたる私の心中、今迄の貞女を無にいたすは、よく／＼の事と思召されて、……。いッかなならぬと、お米が言葉を引たくりて、五郎兩手を張、臂に構へ、腐つた根、性の女いらぬ捨ると、仁助殿無念の上の承知ありとも、世話した此五郎が金輪奈落の底まで承知する事ではない。一夜たりともぬしある身を汚さしたばかりでも、此しやツ面へ大きな疵なり。天魔であれ、鬼神であれ、公方様

でも、御領主でも、金づく腕づくでの依頼なら、此方も意地づく誓文合點する段ではなけれど、かの客人が仇ならぬ心中、命かけてとは肝玉に答へていぢらし、扱はいたづらの手引はしたれど、上州の俠客は随分頼み次第、密、夫の世話もするなど聞こえなば江戸の奴等の思はくも羞かし。いかにしても本性とは思ひ難し。これ容易ならぬ一大事、重ねて思案あるべしといへば、我身にもなつて下されまし。つく／＼思ひ廻らすに仁助殿の此度の無情、何と申さう様なし。明日のお舍利を今宵買ふとまでにはなきに——女房可愛くは思はぬか——金子ゆゑに肌身を汚させ、いやさうな顔一ツしてくれぬ志、なか夫とは思はれませぬ。他人でも我身になりて見ば、かゝる事をよいとは思ふまじ。外に分別ないまでも分別せよといふても、くれうものを、女房といへば亭主のもの、身體こそ二ツなれ、何方の耻辱にても耻辱は同じく二人の耻辱。餘儀なき事に責められ、外に思案のなきまゝ私からさもしき事をいひ出で、たつてするごあらば離縁ともあるべきに、せねば離縁とはいひ甲斐なき根性、仁助殿は我より金子がいとしいので御座りませよ。これ此身の情を賣らす事、さつと今度には限るまじく、また五十兩といふ人あらば、夫にも身を委せよ。百兩やるといふたなら、恐らく穢多にでも枕替はさせむは今宵で知れました。今が今まではかうじ



關東五郎

た人とは知らざりしが、もはや仁助殿の女房は米ではなく、金子といふ増花ありてこれに見替へられし上は、行末どのやうな目を見るも知れず。今日が日まで立てました貞女をやぶりますも此處の事。旅人の富裕なるに迷ひしの、わかき男に心を移せしのと御疑念もあるべけれど、今までの日頃をよく御存じの親分様御推量あれかし。仁助どのとさもしく、つれなきに引替へ、二階のお客様の眞實。一目見ればかりにて心底から深々と思ひこまれ、江戸に馴れたるお目には、梅櫻見てからの大根菜の花、風情なき田舎ものをどうお思しつかれてか、大枚三十兩の金子それとて仇や疎かならぬ長年御丹精の身の音、ある方の千兩萬兩にもましたる大金を、只一夜の情にとは冥加に餘りて恐ろしく、此方こそ金子を捨てよの私なれば、夫仁助殿とは雪と墨との心入。此方が金持たる身ゆゑ、今添ふとあらばあなたにも嘘や金ゆゑの心中と思召すかはしらねど、夫婦の樂みには金も財も物の屑ならず。此人もし零落の曉——それを願ふではなげれど金ゆゑでない私心中の清きことを御覽にいれむは、其やうな事あらむ日の私を、長き眼にて見て給はれ。命かけても此人に添ひたき願、親分様、お頼み申しますは貴下の外なし。米が益なき貞女を壊らして下されと思入ての所望に五郎首肯き、なるほど聞けば味ある言分。飲みこむた四の五いふに及ばず、客人諸ども

關東五郎

……お寢てか。御一處にと申せしが、重ねて蓋かしきお願い、面目なしとて寢床に吉左右待れて御座ります。さらばと呼寄せ二人並べて、此處はわれ引受けたり。今宵の内に二人とも立退きたまへ、夜明けなば面倒なり、早くと急がせば、いそぐと支度しながら、されど心掛りなは後の始末。いかなる御分別ありてかど、嘉藏さすがに我ゆゑに難義を大恩人にかへむことを氣遣うて尋ねれば、分別は許多もあること、まづ此處を立退くとも近邊には長く足を留めむこと無用たるべし。夫婦となりし今宵の始末を行末忘れず、かりにも喧嘩がましき事せず、玉椿の八千代までもかはらす契りたまへ。縁もあらば重ねて遇ふべし。今宵は此方の客、今朝までは知らぬ他人にこれほどの御世話、生々世々の御恩いつかは御禮申すべき。今宵江戸へまかり越し、一軒の小店なりとも持つことならば……。五郎頭を掉り、禮うけたくする世話ならねば、それに望みは微塵なけれど、喧嘩出入絶えせぬ身の上、もしもの事いつありとも圖り難し。我なくなりしと聞きたまはば、折々は思ひ出せし日を……。あどは言はず大口開いて笑ひ、一番鶏が、あれ、今鳴く。猶豫はなり難し、随分氣をつけて行きたまへ。御機嫌よう五郎様、親分様と諸聲に訣別を告げ、今出る後妻やうやく残月の影に消え、馬の鈴ちやらくと微けく、はや曉近き空を仰ぎ、また二人の先



關東五郎

途を見て心よく打笑み、再び月をさしこも、懸床へ遷りてかの三十兩を封じ、別に一通を認め、其朝仁助が行く  
見ての語に、見事にこれと、拳で腹に二文字。惜しや上州の名物一度にニツなくなしけり。(丁)

(一)

紅葉集



またしても女物語。語。京は女蔭の名所、とりわけ祇園島原は其の粹を萃め、  
二十四番の風吹絶えずして、千紫萬紅の亂咲には、東夷もおのづから其色に浮  
れの一節、骨太の手に扇拍子を留ひ、魂忽然とろくろと鴨川の水には双金の鈍る  
こと奇妙なり、延鏡借りて見よ、小腰に愧かしき年齢してしげくなる揚屋通ひ  
これも交際と、名はいかにも附けらるるものなり、と同役の陰言も聞流して、浮  
世はとかく酔醒の水野石見守といふは、江戸麹町半藏門外に人の知る旗本なりけ  
るが、此地には在動中祇園町東井筒抱えの壽子小鶴を我物にして、淺からぬ馴染に綺情は更に盡きぬと、役  
目の年果て近々の別離といふに、杯の数はおのづと減りて、歌へと弾と樂まざれば、小鶴いぶかしみて子  
細を問と語す、其様に水臭さお心とは知で、京女は馬鹿律義、我に比較べて誰もかうぞと、くやしや仇  
なる心中立して見給へ、此お腹を、これが假初にも旦那様情でなりますものぞと、老人の行届ける情  
に、小鶴も戀の外なる戀にはづみて、眞實いとしければこそ、石見が今宵に限りてそでなき隠蔽を源  
りに恨めば、たゞ溜息吐くを愈々口惜がりて、日頃のお言葉は皆反古か空言かと石見の膝を噛み、我も武士に  
國風枕



伽羅枕

り、二言はなけれど、役目済みて此月半には江戸へ歸へるなり。さればこそ此頃の物思ひ。いと捨て難きに我胤をさへ宿したれば、馬も輿もなかく、此心を送離くて、と凋れて二人ともに無言の中に、燈火の小暗き影に小鶴が泣顔は、露けき小萩が夕月の下に枝を垂れたることし。石見物思ひの眼にも少時は美色に見惚れ、これを置去にして再會望なきかと、自失して夢見ることし。小鶴聲を盛らせ、我はもとより卑賤河竹の流の身、旦那様は奥様おはす御身なれば、行末添途む心など、有りても所爲なき事、其には露ばかりの希望なく、うかくと今の歡樂は花の七日、いつかは血に泣く思ひと、糺森に先達而杜宇聽にお同伴申せし折の言葉が、我ながら何となく思まはしく覺えたりしは、まことに今宵の辻占なりけり、此身はともかくも、愁きは胎内の孩子にお顔を見せず、知らするよしなく、人恥かしき父なし子に生れて、篋虫の仇に啼くこそ、とさめくと涙を流せば、石見は故意と笑ひて、これが死別離といふにはあらず、來年は御用にてまた上るほどに、随分身を大切に勤めよ、その時壯健なる孩兒の笑顔をも見むと、この度は其を樂みに其を力に一先立歸れば、其方も快心別れてくれ。老父のやうなる我に可厭な顔せず、これまで盡しくれし情の程は、忘れおかし嬉れしく思ふぞ、我も此年しての浮氣見ともなければ、止めむ今日は明日はと

伽羅枕

思はぬにはあらねど、其方がやさしき世話を受るにつけ、娘のやうに思はるれば、懐かしさの忍ばれずしてつひ無勘辨なる深陥。人の誹譏を聞くにつけ、年効なき老人と其方も愛想の盡る事あるべし。我思ふまゝ自由にして、纏て手を断り投出す今に及びて、かういはず身勝手とも思はむが、其方の爲悪かれといふにあらねば、老父が置土産と思つて辛抱して聞てくれよ。およそ勤めの身の女は、年若く色盛りの引手数多なるまゝにおのづと心騒り、相應の客つきて根引せむ、妻にせむと言寄るものありても、上が上にも上を望みて慾には際限なく、男のさほどなる眞實を塵ほども思はず、容姿身代に出来かせの不足をいひ立て、冥利といふ事を知らねば、其罰にて良縁數有りながら、慢心に血迷ひて悉く取外し、此方より結婚を急ぐ頃には、男みな背後を向け後退する理、白粉も小皺は紛らせず、酒毒に髪薄くなりて色蒼ざめ、青年の淫行報ひて、悪疾に玉の肌も腐れば、犬も喰ふまじき姿。これがむかし何屋の誰かと驚かざるものなし。これといふも淺ましき女の了簡より、短かき色盛の姿を頼みて、法外の吾儘いひ散らせし應報ならざるはなし。其方は今年十九、今を眞盛の花の色、移はぬ間に眞實男見出しなば、金銀姿色に目をくれず、早く見断りてさる男に添ふべきぞ、島原の遣手與丁の女房などに大夫の果ありとかや、随分見苦じき事なり、其方がいとさ



に行末まで氣遣はれての意見、仇に聞かば恨なるべし、と益になる事の數々をいひ合ひ、肴を新ため燗を熱くして、三ツ四ツ對酌して別れけるが、數日の後、主かみに二百兩とらせ、小鶴と手切の相談調ひて石見は江戸へ歸りぬ。

## (二)

小鶴月つき盈ちて生落せしは玉を欺く女子なり。初産といひ、石見の紀念といひ、身に世に替へていとしけれど、我を省れば、淺ましや、色商賣の身は、年齢一ツを百金にも買うてなりと、生涯十九廿歳に依然たき心願なるに、色香はよしや認めぬにしても、子持なりとの名立たは忽ちに客落ちて、往時の小鶴にては通るまじ。さりながら、子の顔視れど何も忘れて、只道理もなく可愛けれど、思へば愁さやら悲しきやら、その子抱いては置き、置いては抱き、産後の床に居ながら苦勞の種にして持扱ひけるに、四條柳馬場なる米相場師西岡屋の内儀祝儀にて見えたり。この女も主人は同じ東井筒の右龍とて、一時は賣りに賣りたるものなるが、西岡屋の重次郎に馴染め、仕盡せし浮氣を括めて、今は世帯持の可なりなる榮耀はしながら、何處にもありと見る苦勞に面影垂れ、さりながら歴としたるお内儀姿。折々は東井筒にも來て、むかし馴染の

今も勤めの女に取巻かれて羨まるゝ身上なり。小鶴は別て親しく、姉と頼みし右龍を見るより幼子を突付け、これ見て下さんせ、水野様に生寫いさうしとれくと抱取りて、なるほど争はれぬもの、口頭から頭あたまのあたりはお前を其儘。今も床間の人形抱どこのまいて、世話焼けぬかはりに樂みなき此身こそ恨めしけれといへば、わが胸の中はそれならで、勤の中の赤子は荷物と、今も今とて其を案じて氣の結ばるゝ折から。……何にしても苦勞の絶えぬが浮世。姉様、重様から音信おたよりがありましたか。されば、今月で八月餘りといふに、わづか二通の手紙、いろ／＼家にも用事溜りたれば、我ながらうるさきほど状を出せど、いつも／＼片音信かたよりほのかに聞けば、大阪表に遣されぬ博巨利はくこの商賣口、眼前にぶら下りて手の放されぬやうにといひ立て、實の所は一時新町しんまちに入浸りての場句は、藝子とやら素人とやらを圍うて、爪弾つめひきの膝枕ひざまくらに馴てより、淀夜船よどよふねの乗心が可厭いやになりて、いつ歸るやら知ざる身持と、其に格氣するにあらねど、此地は本宅、それを餘所にしての悪性を、いれわざ捨てば、お前も知つてのめればどの苦勞の報酬なく、いかにも口惜しければ、今一度重様に逢て、少しいひ度事あれど、尋常ひんじょうの状や使にてはなるまじき氣色なれば、其子を我貰うて生の子にして知せてやらば、鬼でもなき重様も屹度一度は歸るべし。此前の状にも、呼戻すべき拵事の種盡きければ、身重にな



りたりとまで、言遣りし事あれば、此子を貰へば好仕合。お前は年も若く年季もまだありて、身體丈夫になり次第花を咲かす身の足手纏。又親方でもお前の傍には置かせじ。到底知らぬ仙人の手に渡さうよりは西岡屋の子に下さらば、ゆめく／＼鹿略なく養育み、眞實の娘にして未々悪きやうには計らうまじ。我手元にあるれば毎日この子の顔見にも来られ、我はまた知る通りの子煩悩、必ず案じたまふに及ばず。今日わざわざ其話に來ましたといへば、小鶴は手を合せて、願うてもなき此方の幸福。わが子なれば氣性我に肖る所ありて、短慮、不愛想も知れねど、其所は我と思つてゆるして、いとしかつてやつてたまはれ。お前にさへ頼めばいさ／＼かゝも氣に懸る事なく、快、心動も成るべしと歎けば、右龍はなほ歎び、さらば今から此子は連れて行くほどに、少時惜別の乳をど小鶴に抱かすれば、乳房を含ませながら、しげく／＼と子の横顔を視むる眼中に涙を浮べ、放しともなき風情は道理と思へど、右龍はわざと氣剛く、孩子を引取りて立上れば、片手に其袖、片手に乳房を掴みて、せめてはも一口。乳もよけれど過ては其もお腹を損ぜむ。扱も頑是なき母親かな、この子さへ泣かぬものを。明日また伴れて來るほどに、其様に未練は出さぬもの。おさらばく。

## (三)

幼名は仙よくと、西岡夫婦に手中の玉と大事がられぬれば、この外に眞實の兩親あることを想はず、七歳八歳から女子のすなる遊藝の数を盡して、其々の師匠取して稽古を勵みぬ。餘所行の服裝には、舞子の姿を寫して往來の足を止め、魂入たる京人形と譽めぬ者はなかりき。是皆女親の指圖にして、其身のむかしをよき事と心得、今は町家のお内儀様になりても其心失せず、如是躡ること大事の子に自墮落を教ふるごとし。重次郎も華美好の男なれば、財寶あるにまかせておせんが身の皮を飾りて惜む色なし。京は流石にやさしき所とて、世間を見まねに物識らぬ輩まで、和歌よ蹴鞠よ香道茶湯と持雑す地なれば、是を知らずは上流の交際なり難く、第一人間下司になりて、匂はざる花はさもしかる可しと、風雅の道一通は學ばせけり。和歌の師と頼みしは、當時に聞えし鴨某とて、重次郎が入魂なりければ、某亦おせんを可憐嬢に思ひ、才能は有一節體、容色は拉鬼體と、酔うても譽ることを忘れず。おせん十一歳の秋の暮、重次郎心算齧齧の買置が破産の初手にて、其よりけちが附きたるかして、手を出せばいつも仕損じ、内證空虚になりて外見に知られぬ逼迫、おせんが常綺羅にも肩張るほどの左衽。これではならぬ今度といふ今度は、市場中の銀を掻浚ひて、一日なりとも持〇と唱はれ、男一代の名聞には、伽羅のわり木を薪にして珠



玉を蒸して喰では死なす。大願成就なさしめたまへ、石の大鳥居を寄進すべし、と祇園社へ夫婦代るく日夜の参詣。さて資本というても無ければ、鴨某に事を分けて頼みぬれど、親しき中にも金銭は他人行儀、かた 抵當なくては土蔵の錠、ちゆうあ 開き難しとの挨拶。西岡夫婦當惑して、よちすから 通背の不睦物語、あれか此かと好分別も出ざりけるに、おせんの 部屋にて琴の音、夜深に調子済わたりて聞えぬ。今頃何と想うてかと重次郎いぶかしめば、せんは此頃夜眠られぬ癖つきて、それゆゑの排悶たぐさみ なるべし。それよくよ思ひつきたり。あの琴音のぬしを一時の抵當に鴨様より銀借りたまはど如何にといへば、十七八といふならばともかくも、乳の臭失せやらぬ仙が何の益にか立つ可き。いえくまつと抵當に不承なき理由は、我鴨様へ参る度に、先生のおほせらるゝは、せん容色といひ、才といひ、藝といひ、いづれにも微いひ 儀なき子なり。われ不幸にも今にして老後の樂なきを常に憂く思ひて、養子養女を頼みおきたるが、心に合ふもの今に一人とてなし。さるに欲しきはせんばかりなり。外に子持の西岡殿ならば無理にもあの女は貰ひうけたまものなれど、心儀欲しさうな 口上なれば、明日行て、抵當にとて此方よりまうし出て差上ぐ可き物もなければ、今は瓦解の姿なる我家に何もなければ、此ならばと、お望の品もしあらばとほのめかして見たまへ。彼方にてはかねての希

願がひこの時と、必らずせんの 事をいひたまふ可し。これは身賣といふにはあらで、一時凌ぎの方便なれば、氣遣ひたまはずとも其れにて首尾よく銀を借り、美々しく儲けてむかしの西岡屋に復れば、せんの 身も無事無事 戻る道理との女房の了簡に委かせ、苦しき時は鼻もそぐなり、鴨に行て抵當に望みくれとの趣を語れば、果して！期限に返濟ならずば、娘せんは此方の養女たるべしとの一札を認め、所望の銀を引換に請取りけり。後ともいはず其日より、せんは鴨へ引取られ娘分になりて、願はざる榮耀までさせられ、鴨の鍾愛は昔日に倍せど、血脈の情は風にも破れず雨も碎かず里方榮枯の形勢に餘所ながら心を配りて、芝居遊山にも勸むれば、我一人の保養は天罰のほど恐ろしくと、さりながら神社佛閣に物語を喜ぶこと西岡屋が利運祈念の心なるべし。落懸る軒は蛛の糸にて繋ぐも所爲なし。その年の内は、西岡屋の身代有明の燈のときと、あやふげに幽けく持ち答へ、春も見すばらしげに越して二月の初旬、庭に愛樹の紅梅昨日あたりより綻び初めて、例年よりも輪りんの見事なるに、縮まりたる我等が身の置所。主家退轉の春に匂ふも憎しと、よしなきものに重次郎愚痴をいひかけて立出れば、女房は其木の下に立寄りて離別を惜みけるが、不圖春やむかしのと、せんが常々好ぬる古歌を思ひ出してそゞろ涙を催せしが、せめては此家の記念、あの子への土産、と一枝手折りて裏口に



待ちたる重次郎に之を見すれば、一雫ほろりと落して、世は秋なるに。

(四)

おせん只管西岡夫婦を慕ひて鴨には馴ます、其は當座、今にと捨置くほどに、この一念逐日熱して焰を立つれど、胸のみ騒がして微塵も口外せざること、世話してくれるに何不足なき養家を嫌ふことを、氣の毒に思ひての遠慮なるべし。里方のかくまで懐しきは何事ぞと、自心にもその理由は解らず、只戀ひしく〜に憐れ氣分勝れず、顔色悪しく、進退物憂氣なるを鴨は其ぞと推して、此家に居馴染ますべき工夫を案らせしに、好事あり。せんは藁の上より西岡屋に貫はれ、實母は東井筒の小鶴といふ事を知ず、彼が産後の肥立悪くて、ぶらぶらと二月経て死せし事は尙知らず、兩親を眞實生の親と心得たればこそかほどには慕ふなれ。實母はかれが當歳に逝去り、實父は江戸の某といふまで實事の始末を物語らば、西岡夫婦に愛慕の念認め、終には此方に懐くべしと、或日おせんを一間に呼寄せ、此段々を語れど少しも信ぜず。憎き人かな、我懐かざるを恨みたまひて、よしなき空言して幼稚きものを欺むき、親子の中に水注して氣不味させ、果は我を引寄せむ心算と見えたり。さる根性の親は持まじきぞ、とてんから之を根無草に極めて更に疑ふ色なければ、鴨は

進 膝聲を潜めて、天地の照覽を誓うて明すまじき密事なれど、其方が疑念を露さむばかりに語るなり。我言もし無根と思はば、此後家へ行かむ時、母親の篋笥か、手文函か、大事の品を入たりと思ふ所を竊に探して見よ。朱總つけたる古錦欄の袋入なる、九寸五分の護身刀あるべし。總黒漆に雪折差の金時繪、目貫は金銀二羽の結雁、接葉繩は銀造にして、作はいふとも解るまじけれど、祐定といへる名人の業物なり。錦欄の模様は龜甲の中に牡丹花ありと精細に教へて、其こそは實父水野石見守が歸國の節、汝が實母小鶴に置記念とて與へし品なるを、今は養母が所持すること我能く知れり。されど西岡夫婦が只管の歎願なれば、我も裏みて誰にも語らず、よしまた語るも益なき事と、今までは慎しみたれど、其方がさる事とも知らず、西岡夫婦を此の上なく懐かしがり、養家の我を厭ふゆゑに、物語りて聞かするも、惡意ありて彼等と無理に縁切らせ、これまで養育の恩誼を忘れよと教ふるにはあらざるぞ。實母は遠のむかしに冥土の鬼となり、實父石見守は其折五十路に餘れる老體なれば、今は生死の程も知れず、幸ひに命壽くて存命し給ふとも、江戸には立派なる女房子あり、まして旗下といへば輕からざる身柄なれば、藝子風情に馴染めたりなど、公養へ聞えなば罪科あるべきを怖れて、邂逅ふとも名乗はしたまふまじければ、之も亡人に異らず。さるから



は生の兩親揃うて亡き身は、西岡夫婦とて我等とて、二度目の親といふに何の相違かあるべき。西岡不運にして瓦解に及び、今は見る影もなくなりて眞葛原の寂寥多かりに引籠、今日を暮らしかねたる難遊の始末。まことに氣毒ながら榮枯は天なり、是非なき世の成行とはいひながら、我もむかしを思へば折々に寸志の驗を見すれど、焼石の水一滴及ぶ可くもあらず。其方もし我が養女とならで里方に居たらむには、賤手業はまだなる事なり。煎じ詰めなげ随分祇園島原の苦海に落ちむも測り難く、親の爲なれば、其とても可厭はいへまじ。我方にあればこそ、西岡榮華を極めし時のおせんにて、木綿の肌觸を知らず、わが家櫻の名木と眺められて、末々は公家高家より好婿取すべき世間の取沙汰、われ等の心願。また西岡夫婦を大事に思はゞ、其方が養女の縁に繋がりて、我も少しは合力となるべき今日の状況いづれにしても我を捨てては、自他の損といふものならずや。其方を引取てより以後、一度なりとも機嫌をそこねし事なく、いふまゝに舉動はせて、何一つ不足のあるべしとも思はれず、慈愛の上に慈愛を重ね、大事の上にも大事がりて、我子とてもあれほどにはならぬものを、あまやかしが過ぎて狗兒可愛がりて、世間の口もあるよしに聞くまでの、我が情は性一杯、此上はなきつもりなれど、心に合はぬ事あるにや、一向我に馴染まぬこそ愁けれ。不足あらば遠慮はい

らぬ事なり、いうて聞かせよ、思ふ通りにして得さすべければ、百年の後は鴨家代々の墓に入るべき覺悟にて、わが死水をも取つてくれよ、と身に餘る果報の言葉に、おせん十二歳の兒心にも冥加おそろしくおぼえて、はつと兩手をつき、勿體なきお言葉かな、日頃の御慈愛は眞葛原の父母もなかく及ばず、御恩のほどは身に染みて寢覺に忘るゝ暇なけれど、唯戀ひしく暮はしきは兩親にて、此頃の淺ましき身の成果を見るにつけて、いよゝゝ此處と彼處に離れゝの住居悲しく、道理もなく涙、飛れて袖の濡れぬ日もなし。容したまへ、此家を可厭とも思はず、また嫌ふにもあらざれど、鴨が怨言に怖て、聲、慄き、眼、涙み、幾度か頭を下ぐるにいちぢくなりて、何の詰るごがあるものぞ、よゝゝ彼方へ行て遊べといへば、しくく噉りあげて立ちけり。

(五)

京の町にて奇妙たる建築見たくば、西岡屋が仕舞屋造と、意氣過ぎの江戸男にも二言といはせりしほどの家宅を、やみゝく人手に渡し、眞葛原の蓬生の宿を借りて、格子戸開閉賑はしきに馴れたる耳に、百鳥の啼音は哀に物寂しく、榮枯轉變の迅速なるは、夢か現か、我身上とも思はれず、奈良見物の客舎に



伽羅枕

降籠られし徒然の如し。湯盪て手を鳴らせど誰應ふるものなく、借はと心附て米をも磨ぎ、釜下をも燻て、何爲るにも先立つは涙なり。重次郎不興にて、愚痴は見苦しきぞ、我も顔を賣りたる男一匹！此まゝに日陰ものとなり放しに果つ可きか、開運一瞬時、と剛情の男なれば身の膏血を絞りに再擧の工夫に凝り、拱く腕は縛れる如く一日解くることなく、夜は轉輾に枕の軋音休みなし。命は堪らず、精根かくてはいつまで續くべきと、女房案じての意見にも耳を潰して、この事にも思凝れば、いつともなく血色蒼ざめ、頰瘰、眼落入り、月代苔深く、髭髯生て草を亂し、さながら齧ける燈臺鬼の面影。見るに女房悲しく心細く、箸の轉けるまで氣に懸け、三夜續けての夢に、左の大指入墨せしあたりより腐りて落ちしは、病人の身に凶事疑ひなしと、神佛に禁物して全快を禱りけれど、納受なきは數多の男をたらしせし罪の弱身に崇りけるか、假初の風邪の心地と重次郎横に仆れし夕より、大熱發して身中焚ゆることと、頭蓋今にも裂けなむと、呻聲凄じく、うつらうつらと眠るかと思れば、無念の齒切をして、今一度むかしの西岡屋にと、譚語にまで我家の破滅をぞ苦しける。枕元に女房唯一人途方に暮れ、此上はと鴨へ人を走らしければ、程なく息杖の音暴かに聞こゆるを、待かねしぞと迎ひに出れば、前なる駕籠よりおせん轉び出で、母様！父様は。

伽羅枕

懐かしや仙かど母は泣聲なり。後の駕籠には護衛の侍女、目錄包に見舞物を取添へ、主人代普通の口上述て立歸りぬ。お仙枕頭に坐りて父の癡顔を覗き、母と顔見合せ、母様、是程の御大病を、何故早くは知らせて下さりませぬ。もし父様と呼ぶにふと目覺せば女房進寄り、おせんが逢ひに見えました、よう顔見てやつて下されといへば、おせんといふ聲を力にむくと身を起し、臍を定めて、やれ！仙か、懐かしかりしぞ、と枕紙にはらくと愛着の雫を落せば、おせんは父親の肩にしがみ付き、涙に呼吸つまりて物も得言はず。父親其手を取り、苦痛の聲かれぐて、鴨の父親は不便がツて下さるか。あい、其はく勿體ないほど不便がりたまへど、此家の父親母親の事は片時忘るゝ間もなし。鴨の家は可厭なれば早う呼戻して、ヤッぱり此家の子にして下されや。我は最早今日から歸らぬ心、と聞くに夫婦不覺の涙に沈み、貧の憂愁は何所までと極度なく、いろく人に憫ますものかな。家分散の無念、瘦世帯は明日の苦勞、大病に届かぬ醫藥の魚蔵、是ばかりにても命は短るに澤山なるに、可愛く一人女が身上のいぢらしさに、瘡の種を一ツ殖やしたりと女房啣てば、いへばいふものゝ、われには仙の看病、其方には仙の手助、千兩貰うたよりは數等力になりて、此上の歡喜はなしと、久しぶりの機嫌に女房も勇氣加きて、せん同心介抱に疎忽はなかりし



が、定業一四日目の夜の拂曉、知恩院の鐘を聞きながら往生清しく、南無阿彌陀佛、やがて鳥邊山の煙となりける。されば四五日の暇もらひし仙なれど、この始末ゆるに初七日を濟ませとて、初七日過ぐれば又二七日と、おせんは歸る氣なく、母も放し難く、鴨へはよき様に事實をいひ遣はし、一日二日と長引くほどに家郷心づきて、おせんは再び歸宅へき丁簡なくなりぬ。一日佛事の用ありて母親の留守の間に、時めまし時節の紀念にと、是のみ残したる重ね箆の扉を開き、抽斗中を見れば果して鴨が言葉通りなる古錦襦の袋に入れたる護身刀あり。取出して見るに、裝飾も一々聞きしに違はず、是ぞ實父の魂と押載き、可恐れれば鞘は拂はず、舊の如くにして舊の所に納めけるが、扱は我は西岡夫婦の實子にあらず、母は祇園の藝子にてもはや逝去、父は江戸の旗下なりけるか、我生れし時五十路ばかりといへば、我は今年十二歳、其人は六十餘まだ死たまふべき歳にもあらず。亡母はよしなし、せめては眞實の父を尋當て、知らぬにいよく戀ひしきお顔を見れば、江戸は此所より百里餘、飛立つ思ひはやる瀬なれど、行くに行かれず、幼稚女こどもなをんなの身にして。旗下といへば立派なるお武家なり。我はその立派なる武士の娘なるよな。慕はしき父様はいかなるお方なるかと、鴨に出入て我見知れる武士の、年寄りたる人々の顔容を、彼よ此よと思ひ出して、水野

の人品を想像し、西岡の母の懐かしからぬにあらねど、之も忘れ難く、事止言語の鄙びて疎暴しきに、今までは厭忌なりし江戸の人が急に好になり、とりわけお侍が好きや〜。

(六)

三七日を過ぐれどお仙戻らざれば、鴨よりは毎日の迎ひを、いつも空駕籠にて返しければ、なぐめならず立腹して、借銀は戻さず抵當は奪取り、世間の義理が其にて立つと思ふか。なるほど祇園氣質の薄情もの、人物取る往時の癖が今に失せず、理非を辨ぜぬ無法の所爲と、小才覚ある辯口者を頼みて、手厳しき談判に及べど、夫者あがりの西岡屋の後家は、風を柳の浮波と受けて、強き事は少しも言はず、義理知らずとの御立腹はさる事ながら、我身にもなりて見たまは少しはお心を解く可し。折檻せぬばかり毎日に歸れ戻れと言聞かすれど假初にもあいと申さばこそ、只いやとばかりに道理をいはず、強く申せば泣出して、今も持餘しの最中。なほ一應意見の上、肯かす肯かぬにて、明朝は引ずりてなりと私が連ますほどに、旦那様へは今日の所よきやうにお傳へ下されといふ。腕力にもならざる事と、その男はしぶしぶ歸へりて約束の今日となれど音沙汰なし。其夕暮また行けば同じ様なる挨拶に、鴨は業を沸やし、一條繩ではゆくまじき、あは



ずれ女め、此上は心好き對談にては埒明くべき様なし。之に物を言はせてくれむと、證文握つて立上りしが、待てよ少時、我も代々名家の末流に在りながら、賤しき商人輩のする公事沙汰に濁れる心やと世間に唱はわれも辱かし。ましてや幼女を抵當の貸銀とは、他聞よろしからぬ事なり。取るに足らざる無法者を對手にせむは、我と我品格を下ぐる道理。何よりも吾身が大事と、無念ながら災難と諦らめ、此處は胸を撫るこそ大人しけれ。不義の子なればせんも不義不實を享けつぎ、恩といふ事を知らず。あれ程にわれをばふりつけて馴染まぬものを、無理おしつけに養ふは野禽を籠にいれたることし、間隙を見れば、餌器を蹴かへし脱出すべき了簡、さるものは何程いつくしむも甲斐なし。かへつて未々今にましたる無念の思ひすべしと、流石に書を讀み理に聴き鴨なれば、賢く鷹鷲に分別して、二言とは仙の事をいはず、證文にのしを添へて淡白に宿元へ歸しぬ。氣味悪きほど大人しき鴨の所置に、母子今更のやうに氣毒がり、母親不面目の面押拭うてと、鴨の高き岡を跨ぎ、謝罪やら禮やら兼て行き、期限は何日と定めかねれど、蟻が塔積むやうにしても、借銀は御返済申さねば、今日の天道様、死でからの後世も恐しくと洩れたる言葉に鴨も不便を催し、垢染みたる布子に百結の木綿帶、柳卷亂れて髪燧毛のごとく、貧と苦勞に身を裂なまれて、面影無残に糞れ、榮華の時

よりは老女になりけり。吁！是が西岡屋の内儀かと可哀身に染み、重次郎と、酒飲みあひし事など憶ひ出し、手を引籠めて取らぬといふを、無理に袂の中へ心附の金子を押し込み、嬉し泣に泣かせて戻しけるは、和歌詠むほどの人の心は格別、世の哀れを知りてゆかしきものかなと、此女後までも人に語りき。女子の手に穢ぎの業なく、なげなしの道具は五六日の米の錢に沽却して、これが盡くれれば母子枕を並べて、餓死の外なき境界成下がれば成下がる人の行末かな。此上はと母親お仙に因果を含めけるは、世間は見るごとく廣きやうなれど、金銀には人間蠅のごとく聚り、無くなれば散りて唾だに吐懸るものなし。我等母子が今の身上これなり。むかし助けてやりし人はあれど、今助けてくるものなく、さればとて營業は知らず金銭はなし、とても二人は世間の疎まれ物、佛神も見放したまひけるよ。我は餘生短かき身の、此處に死ぬるともたとへば花開きて散るに異ならねば、もはや此世の思出もなく、何時なりと此世を去り易けれど、無残なは仙其方ぞや、人貧に生れて榮華に果つるは、榮華に生れて榮華に果てなむより數等ましなる幸福、いぢらしきは、榮華に生れて貧に果つるなり。亡き父様の木主に對しても、また母の心の我にしても、其方が出精ばかりを旦夕の心願なるに、所詮希望なき今日の形勢。これまで丹精して、やがて色香深かるべき其方を、苔にて腐らすこと



かと思へば、この母は身も世もあられず、今となりて考ふれば、よしなき事をしてけり。鴨家と縁切らせしはわが一世の過失にて、これが爲に目に見えし其方が立身を碍さまたげ、大よ畜生よと我は思はぬ薄情を疎まれ、かさねく不覺の仕損じゆるしてたもや。父様聽かれなば御立腹かは知らねど、暖室ぬるむろにいれてなりと苔を開かせたき一圖の親心より、其方が了簡聽きたき事あり、後々の出精を預ひて、其身は此處に干死せしとの覺悟にて、島原の太夫様になる氣はなきか、少時は禿かぶにてつらき目は見るべけれど、二年そこくの辛抱にてやがて太夫となれば、御大身出入の麻、間もなくよきお客様に請出され、樂なる身となりて出世の頂上。もしまた此儘まづに決か心こころわろく、白粉油氣なき貧乏女に生長ちなば、誰回みなかへる願人なく、精々よくて、小商人づれの媒け女房にて果てなむこと、いかにも口惜しからずや。苦界といはば苦界、玉輿への踏臺、簡ひ切りて、禿かぶになりて島原へ行てたもらぬか。明日のお米にも事缺き、餓死の其方も其ゆるに助かり、また此母をも助けて孝行したもれ、知る如く、其方を抵當に鴨よりの借銀も今に借りたまふの不義理を、少しは其にて回復さば、西岡屋の汚名をも雪ぐ可し。其方一人の行はたら爲は、父様、母様、其方と三人が浮むほどの手柄なるぞや。必ず苛こき母とな恨みそ。合點が存たら得心して。あいというて聞かせよ。可愛や、東西わかぬ幼稚見

を捕へての往生すくめ。其方も悲しかるべきが、母は胸を裂かれて、この言葉に血も交るべき思ひと、手も合はさぬばかりの哀願に、此母は義理ある母様、實母様へよりは一倍の孝行せねばならぬ道理と、けなげにも泣顔せず、勤奉公せばおまへの顔が毎日見られまじと、其ばかりが悲しければ、朝夕尋ねて来て下され。親の言葉に子の背くべきやうなしと、此時おせん十二歳の五月、島原の「わちがひ」といへる「おまや」に賣られ、身代聞けば二十七歳まで十五年を金十五兩。實生の櫻は無代たにて贈る者もあれど、花の一枝に指一本は、名木になりての相場此處なるべし。

(七)

雑かむろの務は、夜よる太夫の揚屋入に附添ひ、圍房ねやにまで連れられて湯茶煙草火の小事こまご使ひ、將往ゆきに夜具の裾を叩くまで遣る方なく心得、やがて揚屋を出で路々夢の二ふた場も見て、尾を覆む犬の聲に驚き、おまやへ走歸りて横に仆ると間もなく、襟えり執て引起され、朝迎として昨夜ゆふの揚屋へ太夫を迎ひに行くなり。夜更しの口舌に疲れて太夫目覺ゆぬ少時の間に、島邊山の妙見へ、開運出世を希願の朝參詣を慣例とせしが、雑かむろ養育は帯に小巾着をも附けさせられず、其もさもしき買喰などの用ならば知らず、殊勝なる神詣にも、半錢の影だに



き身の悲しさは、賽銭にあぐへきものなければ、無心なる稚兒の了簡は可笑や、心願一進口の中にて申せし後、お賽銭を上げましたま心は山々なれど、今の身上はお鳥目てうめくなくして其事協はねば、自由さくまで何卒貸したまへ、と懐中なる延紙を取出し、其ばかりを拵りて賽銭箱に投入し、せめてもの心を濟ませしが、幾人の参詣人を見れど、貧富それくくの身分に應じ、多なにかし少の賽銭あげざるはなきにおせん、氣を揉み、我かく日参忘らずといへど、一文もあげざれば、神様心願を成就なせしめたまはざる事もやと、一日之を苦勞にして、毎日の朝詣に馴染たる堂守の和尚に、いかなるものならむかと尋ねれば、おせんが尋常ならぬ心懸を感じ、神は非禮を享すとて、小判を賽銭箱の口切に詰めたりとも、信心にゆるみある男女に利益は與へたまはざるなり。今の内は紙のみのお拵ひねりにても苦しからず、程なく金銀自由ならむ時一度に奉納せよとの和尚の言葉に、おせん安心していよく日参を勵みぬ。十三の歳七月の十一日、参詣果て下向の折から、日出前朝霧立籠めて、四方なほ小闇きに、馴れたる道ながら足下危く、來懸る爪頭下りの左右を、縁取の小笹の茂生しげみにがさがと動くものあり。わつと驚きて二三歩飛退き、足わなわな腰を屈め、首を延ばして熱視あつみれば、五尺餘りの縞蛇笹の中を横に縫うてのたりゆくなり。鎌首此方に向かねば、此所に人ありと知らで過ぐるなるべきに、

噛みはずまじと爪立て、呼吸を殺しながらたしかに後影を見送りけるが、蛇は妙見の神つかはしめ使なり、我之を見しこと凶か吉かと、其場より引還してかの和尚に糺せば、和尚手を拍つて吉なり大吉なり。これ皆其方が年端ゆかぬ身にして、怠りなき信心を神偏へに感應ましまして、今にも利福を授けたまふ前徴に疑ひなければ、ゆめく此事人に沙汰すべからず。早く蛇塚を造りて祭れとの指圖に、おせん勇みに勇みて立歸り、人に知らせじとて我手一ツに成り難き事なれば、此趣を宿の女房に打開けらるに、其方が出世は家の繁昌、日出度事なりと、おせんが見しまゝに蛇を繪かせ、紙表具の小形幅物ちひさなかげものに仕立て興へければ、間がな隙がな之に祈念の外はなかりき。

## (八)

雪は白くして墨の黒きを疾めど、墨はなほ其黒からむを願ひて、臭き物身を知らず。淫覩色鬼の邪氣に觸れて、お仙やうやく根性を腐らせ、雜髮かむろの身にしては松の位羨ましく、廓を出て素人に歸り、母親に奉行して好婿取らむ心は、何時やら何所へか遺し、太夫になりて八文字踏むの外は、天下に何の希望もなく、丹精を抽んで妙見への祈念も、此事と聞ては興覺めぬれど、此廓を苦界くがいと言はで玉輿への踏臺と、よき教訓せしは



誰ぞ、無教育の母は持つまじき事なり。雛養の内は「苦海の磯傳ひ」、寄する仇波に指頭わづかに汚れしばかり、鹽氣は鴨川に滌きても去るべきに、四圍を見やう見真似に心おのづと其に移り、淺ましくも太夫を帝王ほどに思ひ込めて、漆のときき泥水へ眞逆倒、落ちて歎び、悲む色なし。其境界墨なれば、雪とは相違の了簡、是非なきにあらねどまづは是非なし。

おせん十四歳の霜月九日、この日が一代の大邪淫、大妄語、大殺生、大貪婪、世間にあらゆる悪業仕盡しの發端。かねての大願成就、里花太夫と名乗りて突出しの全盛言葉に盡されず。其も道理と京中に知らぬものなき。大阪隨一の持○鳥水の隠居が梳櫛客なれば萬事の華美に盡さぬ限なく、開闢以來とさめき素見まで上の空になりて喜ぶこと限なし。或は全盛の評判に見ぬ戀にあるがれ、或は道中の姿に魂魄を打込み、浮れ来る客晝夜の別なけれど、梳櫛客の隠居が當座の揚請に、一同川越の花を眺むる心地して、懷中に小判の封を切りながら金でもゆかぬと、世の中の自由ならぬに呆れ、足擦して歸りぬ。この全盛にてはまだく苦界の味は飲込めず、只おもしろく可笑しく、華美に賑やかに、うかくと二年過ぎて十六歳の初春、二度めでたしと祝はれて身請は鳥水の隠居、此金千五百五十兩なり。

里花女子一人前にやうやく昨日今日成りて、戀は此からといふ時、苦勞せぬかほりには此道にありといふおもしろ味も知らず、飽氣なく根引されしは——よけれど——當年六十餘の圓頂光る君と朋輩に笑はれしが、なるほど我とは年齢を字に書き、逆に讀みて似合しき夫婦。妻と名がつけば老父様とも呼ばれず、病人の看護するやうに册き、嫉妬もなく苦勞もなく、夜風にこぼくと苦しげなる咳氣にする苦勞は、黴もなければ、香もなし。思へば、先月二日の夕べ、後にも前にも初會一度限のお侍は、年も十八九玉の様なお方なりしが、同じ添ふならばさるる人に添ひはせで、これが夫かとおもへば、見るもいまはしき骨と皮男、われを湯暖婆代、と身請の夕べ宿の亭主に物語られしを思ふにつけ、もとより此契の真情からあらざるは知れし事なれば、いとゞ「咳氣」の傍が可厭でたまらず。金銀貴けれど情の補缺にはならず、賣色には苦しきとも、賊に此色香を受づる粹を見立、戀ひ戀はれ、誰し誰され、怨み怨まれ、泣き泣かれなば、いかなるものかと其を考ふるほど隠居は袖になれど、また冥加をも思へば、邪見もならず。内心はともかくも表面はあいぐと柔和册くほどに、隠居は孫のごとく可愛物に思ひ、京で出来るほどの贅澤させて、此上は我もあの世へ土産がてら、諸國の名所見物させむと、繪本にては見し墨摺の神社佛閣山河の風景を、極彩色にして數多く見ながら、



足結せる草履の裏に沙もつけず、遠く長崎の果まで行き行きて、和蘭陀船といふものまで見て、所々の名物は欲しといふにまかせ、土産に買ふたは駕籠に六挺。歴々のお大名方もなるまじき寛潤を、陪従の率頭、路々の田圃に黄金の種時と富意の秀句は、實に此折の入費を算用したり。京へ歸れば一門親類喧ましく、有金終なればとて費ふには道あり、近頃年功なき不所存不所業と、本家の手前不首尾になりければ、此の女を隠宅へ連込まむも無遠慮なり。別宅を造るにしても人目なき里あらねばと、しばらく家郷預けにして兩三度も尋ねしが、外形しやんとしても心朽木は脆く、未と思ひし隠居、これぞといふ病氣もなくばつくりと往生しければ、烏水の本家より里花には暇を出しぬ。

## (九)

十二にして雛鬘に賣られ、十四は太夫の突出し、十五は全盛の根引。かゝる事なれば我娘をも一時凌ぎにと、世の不了簡なる親心を騒がせて、その身の好運を羨まれけるが、烏水の隠居此世をさらばにして、老木ながら頼む蔭を失ひ、宿元に還されて、氣儘といへば氣儘なる母子生活。持歸りの衣裝道具、日毎に數減りて残り少くなるほどに、母親またく心細がり、それといはねどお花(落籍の後名を改め)疾に合點して、身の始末

を思ひ廻ぐらすに、今の身上のしがなや、裏に針はあれど禰禰の着心、馴るればまた其中に歡樂といふこともあれど、かく何といふ事なく、人氣なき所に物寂しく一日座りて、朝夕の思出なきよりは、われながら島原にての全盛を見れば、日本色町の何所へ行くとも恐る事なし。かほどの玉を冥加なや草深きに投込み、露に見まがはれて消ゆるも惜ければと、「自貢」悪念を濁る時節に母も同じ心なるを見て、われ一度泥に染みし身の、生娘に回るべき希望果てぬれば、また色を賣りてなりと母様にも安堵させ、我も浮む瀬に遇ひたしといへば、なるほど、折角の落籍も何の益たらず、又候の賤業は榮にもあらねど、往時にかはらぬ世帯の有様。母子鼻突合せて居る處へ小判も降るまじければ、其方の分別に従ひ、やがて好賽自出で、お位牌にお説申すべき月日もあるべければと内談整ひ、扱祇園か、それとも馴染あれば島原か、此土地に引眉毛を愧かしく思はば、大阪へ行て新町なり島の内なり、了簡次第とあるにお花迷ひて心定まらぬ折から、木屋町の壽美とて、家は逢引に貸宿、其身は色の取持、妾月、備の世話する老女尋ね來りて、此方のお花様を或御身分のお侍、衆見染めたまひて、お召仕ひになされ度、私橋掛を頼まれましたと語れば、母親よりお花が耳を傾け、お侍衆とか。其は何國のお方と尋ねれば、江戸といふに胸跳りて、聽けば身柄に申分なけれ



と、五十餘歳の事にまたしても、少し力落ちながら、「江戸」侍の二言にお花の内心は定まりたれど、母親に一應の相談せよはと、老女には挨拶をにぞし、「二三日うちに此方より、いづれともお返事を、とかへせじあるに母親にむかひ、遊女とおなじ賤業ながら、孝奉公は旦那一人の機嫌とり。名こそ下婢なれ女房と異ることなく、我身をだに大人しく嗜めば、苦勞なしにらくなる世渡、その上野飼の鳥のごとく身體自由にして、孝行を思ひのたけ孝行出来るが川竹の身のならぬところ、當座の入銀は少くとも、月々細くながく貰がるべけれど、ことを分けたる言葉に母親も納得して、やがて老女に頼めば、かゝることは猫子を貰ふより易し。

(十)

お花が旦那といへるは、淺野家の前田新右衛門とて京在勤の奥御用人なり。此年齢しての色里通ひは他人の耳目に憚あり、且は場所がらとていらざる虚飾張りで、おのづから散財の多分なるを喜ばず、華美なる戀は過ぎにし青年の事なり。唯一時の假妻、勤番中のかげながしなればと、少しも手輕なるを好みて、お花をその儘家郷に圍ひ、月の給銀に折々の心附して、何時なりと行ねば行ぬざりに縁は隨意に切れ、後腹痛めぬや

うに初手から、仕組みてつれづれを慰めの道具にしけるが、男女の間は巧に和ぎ、馴染むにつれてさほどに然りとは憎からず、新右も流石に捨て難く泥みぬ。この道貴賤に不同なきはいふもさなり、老若の差別も添うて見れば融けて、お花が容姿、心意氣、身の上、いづれか新右の情絆ならざるはなく、欄糸の改巻を控へても、お花の欲しき物は「お、それ」になりぬ。ある夜の寝物語にお花新右が言語の尾に付き、私可愛と思召さば舌頭でばかりいふて下さらずとも、一所に江戸へ連れて行て下されまじと言へば、新右首肯ささほと執心ならば此度の下向に連るもよけれど、何がよくて左程に江戸くといふぞ。見ると聞くとは大相違、むごき國ゆへむごきといふなどこの悪口もありて、江戸一面が葎屋町堺町淺草の觀音様にはあらず、眼につくものは伊勢屋稻荷に大、葦一度見れば此京や戀ひしからむ。尙又十五六の女の身にして、知音縁類なき遠國へ行きたきなどは膽太過さずや。それとも島原に勤めの頃の「様」が只今江戸住居、約束ありて其を追懸ける心算かと弄れば、測れて言葉なし。いよく其に極まつたり。この老父の律義なるに道中に無事を見込みて、ぬれ物用心の重荷に戀飛脚を勤めさせむ了簡か。いやくと頭を掉ればお花當惑して、金輪奈落！裏むへき一事なれど、その狐疑ありてはかねての心盡しも水になるが可愁に、打開けますほどにかならず



連て行て下されや。一度は遊女の賤業、今も異らぬ營業の淺ましさに、申すは耻かしき事ながら、我生れからの下司婢女にもあらず。母は祇園の藝子でこそあれ、父親は江戸の何の某とて歴とせし旗本なれど、我胎内に在る時御下向なされてお顔を知るよしなく姓名を申上げたけれど、父親の耻辱暴と此ばかりは裏まして下され。葉上より今の家に買はれ、十二の歳まで此事を知らざりしかど。有し段々を逐一語りて、其故是非ともつれて行て下されまし。今生の希望はその眞實の父様に遇うて、娘かどのお聲が聞きたいばかり、と思ひ入りての言葉に、新右衛門老年の情脆く、そらろに心根を不便がりて、お花が縁金百圓にて母親を納得させ、やがて手を引かれて下向りけるが、新右江戸には初老の妻あり。いづれ葛藤は眼に見えたるに、愛はなるほど六着心中の粘物！

(十一)

旅は無事江戸に着せしが、女房の嬉しがらぬ土産なれば、新右お花を連れて、家へは入り難く、四五日の約束にて竊に知音の町人に預け、其身は知らぬ顔にて歸宅し、やがて女房の手前を拵へ、七日目に首尾よく連込みしが、女房は四十六といふ老女にて家中に名高き氣むづかしやの上に、お花は從來の自墮落奉公に筋骨弛

みたれば、居づらきこと板掃の中に強て眠ることし。やかましくとも火車鑼手は金幣を食まするに悍馬あることなし。新右の女房はお花の年少きに附入り、主の権柄づくに首頸を捉みて、我小事使のこととく逐ひ使ふを、お花年こそ行かね、一度は島原の大夫、男女數百人に様付けにして敬はれ、心に染まねば大身も長者もふりぢぢり、子飼より意氣地を習ひし身の勘辨しきれずして、しきりに此事を新右に嘆けば、勿體なや其人も妾ある以來女房に一目置けば、それ故募る吾儘に虫を殺したまふ、近頃の御様子と心底傷はしき新右が、言葉を盡して我に免じて了簡せよとあるに、往時は往時今は今、人は其時々、氣の持ち方と、覺悟の上は何事も逆はず、女房のむづかしき機嫌取を義務にして、其身半分は新右、半分は妻女の奉公人、天に二日なきに、主二人持ちて忠義に不権衡なくは勤め難し。男ならば慳食、武骨、邪智、執拗、何なりとも手中に轉こむ手管あれど、女子はなかく迷はずべきにあらず。これ先方に愛情といへる弱點なければ、十分せし事五分は利かず。其上に嫉妬ありて、女房にはお花のいふ事なす事第一から氣に喰はねば、よしや普門品を誦したりとも、此口頭からにては女房聞て墮地獄の想をすべし。最初口をこしたりとも思はざりし情氣の一日々々と募りて目に見え、火手熾になりて新右にも怪しからずあたれど、響むべきにあらぬ其身の行



状を知れば、何事にも目を瞑り耳を潰し、世間を憚りて安穩に濟すべき心を見貫きて増長甚しく、お花もいよく居愁けれど、新右がこめられて手出しならざるを見るに、外を見て涙拭く事あり。一時此趣を新右に語りて、此家の奉公はなかく苦界も及ばぬ所あり。其は此身の可愁と、二ツには奥様の悋氣強く、此方様の御迷惑。私参りてよりそよとの風なかりし此家に波立ち、世間に見る目もよろしからず、其罪は免れぬ所皆此身に在り。我一人居すば家内安穩ならむは知たる事なれば、お暇を下されて此身の苦艱をも助け、第一は此方様をむかしの旦那様にしたまき心願と涙を離せば、新右領き、よくも申したり。我だに我家のいふせく、外家の却へて心安ければ、宅に居るを好まざれど、我留守ともならば其方一人前後はみな敵、袖の干る間はあるまじくと、其のみ心に懸れば、我顔だに見れば、奥奴が人の妻たるものゝすまじき舉動、あるまじき雜言、忍ばれぬを忍て家に在も、可愛き其方を保護むばかりなり。其にしても夫を夫とも思はざる奥の不禮、おのれ！と一徹短慮の起らむとせしは、これまで幾度かなれど、噫、原因を糺せば皆我が過失と、無念の胸を擦りて、事なく今日まで過ごせしは格別なる我了簡、女房に怖るゝ意氣地なしと、心中我を晒ひなば其方を恨むぞよ。勘辨なるまじき恥辱を忍ぶこと誰ゆるぞ、唯其方一人が身に替へていとしければなり。

かほどなる我心中立も仇となりて辛抱しきれず、此家を出んとまでの其方が胸中は察したれど、此所を出て便るべき目的あるにや。かねて物語の實父尋ね當りて、其所へ引取らるべき相談はしつゝしか。さる事ならば我には異議なし、喜びて今其方に暇をやるべけれど、さうした目的もなく、唯この家に居愁きまゝ馳出して、其方は何所へ行く心ぞ。いはれて見れば然矣！故郷は山城此處は武藏。お暇願ひて参る所とてはなけれど、餘りに此處の可愁と、此身ゆゑに此方様御難儀の見るに見られずといへば、其事ならば心配は無用にせよ。我はまた其方のいぢらしさが見る眼を刺す如く、不幸もの！年齢ゆかぬに古郷にては散々の苦勞、他國へ来てまでもいびり散され、いとゞしく不便増して捨て難きぞ。其氣ゆるか知らねど此ごろの面妻れ、色も悪く頼も少し瘦けたるやうなり。顔を見せよと引寄せて願に手を懸け、行燈の火口さし向けて新右つづく視め、苦勞はすまじきものかな。

難有き實意の言葉に、お花も此所までといふ所まで辛抱する氣となりしが、とてよく、小刀針は透るまじき心を傷むる老女の邪慳に、飯も小砂利を噛む想なり。果は女房の姿を見るだに怖しくなりて、物を言はるれば聲も出ず、邪も正、是も非、無理を道理に枉げられて返す言葉なけれど、夜間枕につきて晝間の事と



もを思へば、無念口惜さに髪毛ぞつと立ち、肉顔へ血鳴り、寢衣の袂を喰裂き、蒲團のどち糸を引ちざり、ぼろくくと玉なす涙頬に熱く、此上は旦那様何とおほせらることも、また此身乞食となりて行倒れにならばなれ、明日は必らずこの家を出つべきぞと、一夜は無念に明くれば新右に子細を語りて、何はともあれお暇を下されと無體にせがめば、新右も禁めかねて此上はと、外部だけ長の暇を出し、敷ふれば九月に來りてその年の霜、月十二日この家を出でけるが、其實は簀輪に小家を借りて住はせ、律義らしき老女を附置き、新右足近く通ひて邪冤なき戀を此陰、里に樂みぬ。

(十二)

當時和蘭船來の色硝子を紫水晶と稱へて、世人大方ならず珍重せり。新右衛門元來武よりは文、文よりは理に長け、發明氣ある男なれば、之を見るより不圖思ひつきたる所ありとて、おもはくの藥品少量を用て試みしに、結果案のごとく面白く、今一度の工夫あらば、ともかくも紫水晶成るべしと大勇みに勇みて、それより製造用の器具を造らせ、藥品は極めて高料なりけるを、所持の金銀惜氣なく擲みて十分に買入れ、其身非番の日は一室に閉籠り、其所を細工場に定めて、深夜に「吹具」の呼吸荒まじく、大石榴の裂れたるご

とく炭火を泥爐に溢らせ、塙の中よりは五色の烟たち昇り、鼻をもぐばかり得ならぬ惡臭充滿たる中に、新右赤裸になりて大胡座を組み、熱汗瀧を流し、湯氣雲を起し、温氣に惣身充血して薄血を塗るがごとし。女房見るに淺ましく思ひ、我、夫近頃天寃に見入られけるよ。京よりは女子を伴ひて、年齢にも愧ぢぬ好色の不所業、其が駄むかと思へば今度は此始末。同僚の見る目、殿様への聞達を氣遣ひ、仕事の最中は夢中なる耳へ何も入まじと、食事の折から女房言出しけるは、此度紫水晶御工夫とはいかなる御量見知らねど、頂戴の御扶持に今日の不足といふ事を覺えざるに、何を苦みての細工三昧、武士たるものゝ假、初にもすまじき業ならずや。それも一興なむとといふならば、随分苦しかるまじけれど、兩刀をも佩むお身にして下司のまね事、仲間どもが草鞋造るを、かれも武士の一片なるに、あのやうなるさもしき手業させては、その心までがおのつとさもうなれば、外に美しくしき内職のありたさものと、日常のお言葉にも似合はざる御自身おこなひの行狀、脇指も衣物もかなぐり捨て、丸裸となりたる容、體は、見苦しとも淺まじとも申すべし様なし。些細の利慾に性根を亂し、作法も身分も忘れたる昨日今日、いかなる御所存か聞きたさものなり。いつか近所へ此一條知れ渡りて、胸苦しき評判耳に入る度に、もしや此の不埒殿様の御耳に觸れなば、さつとお厭



刑あるへしと心も心ならず。餅屋は餅屋とやらにて、千飼よりのその道のものだに、工夫ならざる紫水晶が、不寐ながら竹刀磨の手業にて、参るるへまや。よしなき事に金銀を費せし揚句、御勘氣など蒙りなば内外の難達、其時の苦銀を思ひたまはら、此志を立所に翻へしたまふべき方法となるへし、と顔を赧め、疊を拍て詰寄れば、新右立腹して食半ながらからりと箸を投出し、二度言はば離縁と言捨てぞ細工場に入りける。かほどの執心おそろしく、女房も我と手摺して胸のみ傷けるが、新右の一念募りに募れば、十金二十金といへる高料の薬品を一滴の液半縷の烟となして少しも悔める色なく、この事もし成就せずば一命不用の覺悟。ましてや一握の扶持米が何程のものぞと、果は病氣をいひ立にして参勤を怠り、日夜かの一室に入浸り「心」を堀の中に打込みて千萬苦慮すれど、最初の試験我を欺き、更に思はじき物成らむともせざれば、今は死物狂になりて、百金二百金と有金を盡し、これと思ふ薬品の數を取寄せ、忽ち火上に載すれば、何の驗もなくとろくと皆無になりけり。此條藩主に聞へたるよしなれば、今にして悔悟せずば好事あるまじ、と上役など深切に言へと新右取合はず。扱は此家達からず断絶と、女房獨り氣を揉むのみ、意見はいうても聽かれず、さればとて女の手に濟ふべき力はなし。思ひ詰め、案じ詰め、苦勞に苦勞を重ね、心配に心配積

みて、可愛や精神亂れ、泥爐の前に手を拱きて眉を聳むる新右の傍に、女房一日二夜泣き続け、遺書もなく裏なる井水に身を投げて淺ましく果てけり。かくても新右ひるまず、さりとて到今小判の封紙だに残らざれば、近所の目を忍びくりに衣裳道具を賣拂ひ、これも亦火上の烟となしぬ。武士にあるまじき不埒の段お咎となりて、終に扶持離れの素浪人、賣餘しの家財を皮財布に小さくするみ、箕輪のお花が家に一所になりける時に、一車に「がらくた」を積みたり。何ぞと知る者に尋ねれば、あれが水晶細工の道具一また思ひ切れぬかしてあの始末、いづれ紫水晶は前田氏の死神。

## (十三)

新右衛門落魂して箕輪に轉込みしは、お花二十の歳暮なり。僅小なれど餘財のあるに任せて、以前ほどの大懸にはあらねど、なほ紫水晶に断念しかねて、一日一度は炭火に面を炙らねば心濟まず。目に見えて小判焚えて形なきにお花も心を傷め、此様子にては多くもあらぬ身代、今にも灰となりて我等路頭にうろつくべければ、是ばかりは思ひ留りたまひて、そのやうに捨る錢の十分一なりとも、奥様の佛事に喜捨したまへと折々口説きけるに、新右も長の月日、莫大の金銀双ながら徒事に費えて、今に露ばかりの驗なきにあぐめど、



又思ひかへして薬翫弄は歌まざりき。かくては所詮覺束なき夫婦の行末、分別しやうなら少しなりと餘裕ある今の間と、お花がしきりなる取越苦勞を、さらば休て遣むと、吉原の廓内に、中萬字半藏松葉二間の家主の株を買て、お花が安心の種にぞしける。此歳暮れてお花二十一の夏、一人の男子を設けしが、新右此時六十二歳の老翁なり、かくてお花の心落付きたるを見るより、新右またく泥爐の中に、なけなしの金子をばたき込み始めしに、此度は少し見所ある結果にはづみて、此期を外さじと心のみは逸れど、薬品といふものなく、賣る可き品とても残らざるに、新右の悶ゆること、此處に二三十金もあらば、大願成就せむする想にて、千日の茅をこの一日に焼くことを悲しみ、ええ一物はなし、引取人だにあらば此命を賣てなりとて、窮せしが、月の末とて地借の金子手元に取りけるを、此許あらば事足る可きかと、抽斗より取出せしが、いやくこれ我物ならず、今は廓の家主なれど、舊を糺せば淺野家の前田新右衛門、武士ならど、其金子紙に引包て投込み、外に分別はとつくく思案するに、我此金を盗むといふにはあらで、時借するなり紫水晶だに我手に成らば、十千萬兩にしても返濟すべし。唐に尾生といへる男、女との逢引を、ある橋杭の下に約して其所に待ちけるに、女子來ぬ間に汐満ちて身體を浸せど、杭に縋りて動かず、一旦此處と約せ

し所は變へ難しとて其まゝ溺れぬとぞ云る。これを尾生の信とて臨機りんきの所置はからひを知らざるものと、後々までの笑草としけり。我此金を盗むとにはあらで、君子も貧しうしてはすべからざるにあらぬ時借なり。不正中の正、憚る所なしとその金にて薬品を調へ、また見事に仕損じけるより、千挫不撓せんさふじやうの新右もこれには精神せいじんばつきと折れ、その失望の一瞬後より、心急に弱くなりて、まことに六十二歳、さもあるべき老人氣となれば、今までの所業を省みるにつけ、四五年來の後悔波の寄することく一度に胸に逼りて、前田家の没落、女房の枉死わうじ、大金の消耗、今は身代の不如意、地借金ぢきんの消費つひひこみ、幼子あり少妻あり、我は老體の不自由なるにと行末の配慮きりかひなど、無い物のやうに忘れ果てたりと萬感湧上りて身の所措おきごころなく、これを氣病にぶらくと煩ひつき、其冬の初はつち級あられ笹葉ささはに玉走たまはしる夕ゆづ、此まゝ一人寝るも年齢なれば惜しまねど、わが一旦の不了簡より二人のものを乞巧こせま兒こにさすか。其ばかりが冥土よみぢの障さわりと呻うめきて、歸らぬ所へ赴むかひぬれば、お花は泣く可き力だになく、野邊のべの葬禮おくりも貧の身は式ばかりの哀れなることいふべくもあらず。家財は賣盡して空家あきやのごとき座敷に、只残るは戸棚一杯の薬袋くすりぶくろ、榻とと泥爐どろとの遺物かたみに無念と追憶の涙やまず。

(十四)



お花江戸に出し登殿、父子の名乗すべき心にて水野の邸を尋ねたりしが、九千九百石の構造 殿齋なるに怯え、且は其身尋常なる町人娘の風體にて、此所の殿様は實父よといはむも心幅たく、其人の耻辱にもなるべきかと、幾度か門前を往來して本意なく戻りしが、思切れずして其後二三度行きたれど、行きしばかりにて門内へは入らず、唯うろくして歸りぬ。新右死亡なりて一人に残され、地を匄ふ朝顔の何にもあれ、蔓の所倚を求むる折からなれば、いまはいつまでか遠慮すべき、今日ほど決心してすつと通用門を入れれば、門番の老人希有なる眼をして視るに小腰を屈め、子細なく通りて玄關に着けば、其處に肩衣突張らせて幾人も詰めたる若侍、一齊にお花の姿に衆目を注ぎ、怪がりて希らしがりて好もしがりて見えけり、京のものにて殿様に御謁見を願ひたく、御苦勞ながらお取次を頼みまするといへば、侍衆いよく驚き、目授して相囁ふは、胡亂 亂心、の二者にお花を疑うてなり。取次役威儀を繕ひ、たゞ京のものとはばかりにては取次なり難し、姓名住所はいふに及ばず、御謁見願ひたき用事まで明瞭に申せど、肩臂怒かせて切口上の子細らしく述る。後には剛らしき武士ども顔を集め、お花の顔を見ては否味たらしき微笑の目元。婦女と侮りて不禮なる侍衆かな。此家の御息女様と知るかと、心中勃然とせしが色にも出ださず、一言毎に恭々しく頭を下げ、

京は下加茂中澤十兵衛の娘鶴と申す女なりと、母小鶴の實家はもと伊丹に名だたる造酒家なりければ、其主人——小鶴の父——の名をいひ、又鶴といはゞ御合點と機轉の挨拶。して用事は？ 二十餘年前此方の殿様御在京の砌、親父十兵衛圍碁のお敵手を申上げるより、格別に難有き御言葉を戴きけるが、家に秘藏の短刀ありけるを、特別 御懇望遊ばしたれど、重代の寶とて此ばかりは御断り申し上げるが、先年臨終の際に、かねぐの御執心なれば御手許に獻ぜよとの遺言により、私ばるぐ持参いたしましたと、袋入の護身刀を注意がしに持替ふれば、少し控へよと奥へ入りて、やがて出で來りて此方へと書院に案内しけり。前裁の築山、泉水、立木、町家の造法とは姿かはりて、何所やらか殿齋にして幽遠しく、閑寂なる間々に鳥の音聞え、氣澄みて水を打つが如し。座敷の結構はいかさま御宅なり。お花微賤の身にあらねば、幼少の折には高家の館へも出入し、成長りては揚屋の大座敷に、随分善美の造作は目馴たれど、江戸の武家造の館の様はまた格別と、京の太夫も此所に來ては田舎女なり。登音しづく響き、襖開くと見れば願はれたる白髪交りの上品なる武士は用人なり。挨拶高ぶらず大様にして威あり。取次より聞及ぶ條いかにも殊勝なりとの言葉に、お花此武士の風采を見るに、悪人とも思はれざりければ、懇懇に會釋して、只今お取次を以て



申上げましたは、他聞を憚りての空言にて、かゝる事を申上げなば、殿様のお身に拘らむかと差控ゆべきなれど、つい直々に御謁見もかない難ければ、其方様まで申上ぐべし。私今の名は花坊名仙とて、殿様御在京の折お情を蒙りし、祇園の藝子東井筒の小鶴と申すものゝ一女と、子細を洩なく語りて、其時たまはりたる御記念はこれにと、護身刀を出して見すれば、用人首肯ながら照検め、お花を視ていかにも氣毒なる面色。京の藝子に一子を宿せしよしは、内密にお物語りもありてかねて承知せるが、扱は此方様にてありけるかと、坐を進めてお花の顔をなほつれぐと見護り、御懐かしや！大殿の御面影、そのまゝ眼邊額邊に残れるは、争はれざる證據。さりながら聞かせともなき凶報、はるぐ尋ねられたる効もなや……、大殿には十七年前に御逝去なしたまひしぞ！あつとお花は膝なる手をすべり落し、見開く眼に用人の顔を凝視て、少時は瞬なかりき。驚駭はさる事なり。愁傷の種はさぞやと察し入れど、とさまぐ丁寧にお花を慰め、當代の殿に此の次第を言上すれば、本意なかる可し不便の事なりとて、私に御謁見を許され、数々の下賜物もありて、此事は家臣の手前あれば表沙汰にはしがたし。我とは同胞に相違なければ、其地にて縁切りたるからは他人と思へ、此後は音信不通たるべし。我に一人の姉あり、今は柳生某守に縁組みたるが、其方の事を詳知りて、

女子の同胞なき身は其子懐かし、一度は名乗りあひたきものと日常おはせ給へば、姉君喜びたまふべきに内密に對面せよかし。我より添手紙せむとの御意をかの人取次ぎたれど、お花は思ひに思ひし實父亡なりたるに氣脱して、もはや窮屈なる思ひして、姉などに遣はでもと思ひけれど、頼なき身の杖になる事もやと、雖有く御禮申して、御手紙をど下賜物を戴きて歸りぬ。四五日経ちて柳生の邸を尋ね、水野よりの手紙を奥様の御手許へと差出せしに、返事早速に、なつかしく逢たかりし思をくりかへせし文言は、やさしき言葉を直々に聞くがごとし。この二十一日は上野へ佛參の例日なれば、其日他事ながら對面の首尾すべし。三枚橋の左に立ちて待つならば、此方は駕籠の窓を開きて、通らん折の一目を見外さしたまふな、時刻は何時と書たり。

## (十五)

其日約束の刻限早めに、三枚橋指命の所に佇みて待間程なく、上野山より行列見えて美々しき事なり。真中なる紙打の乗物此中にこそと、お花首を延べて覗へど、駕籠脇には徒士女中附添ひ、其影を月に障りの雲と怨めば、同じ思ひなる柳生の奥方、駕籠の中より女中に聲を掛け、見る物ありとて片寄せ、窓近く顔を現



伽羅枕

し、橋の上なるお花を見て目禮したまふ、毛髪は黒漆のごとく艶かにして束あるを片はづしに梳げ、年齢三十路に及ばざれば、花枝頭に在りて風に一ツ一ツ散初むる色姿。面細にして色白く、髪際火塔口に揃ひ、肩痕骨々として遠山を横へ、眼は凜として涼しく、才氣其中に溢れたり。丹花の唇に烏羽玉の染齒少し見せたる、得なむいふべくもあらざりける。金銀色まぜに結模様せる衿裾の肩頭窓より見えて、胸のあたり銀地の扇を半開きにあてがひ、おつとりとしたる體度、持て生れたる上品はわざとにあらで、花の香、玉の温にや似たる可き。お花我にもあらで體搖き足進み、するくくと乗物脇に近寄れば、奥方扇を擧げて忍びやかに制したまふに心注ぎ、身を退かむとする時遅し、徒士の叱る聲に驚かされながら、見飽かぬ慕はしさに行列を離れ難くて、二町餘も駕籠に添ひて、せわしく本意なき對面なりけり。奥方もお花に目を離さず、もの言ひたげに顔を傾むけ、はふり落つる涙に目瞬などして、心に無量の思ひあるを知らしむ。何所まで追ふとも際限なしと、好程にして立留まり、小腰を屈めて袂別の會釋すれば、彼方にも頭を下けたまふ間に、乗物は行過ぎぬ。お花なほ立留りて目送れど、女中駕籠に遮られて物足らざる心地なり。お花思ひけるは、此身は運か不運か、あのやうなる姉を持ちて、……持ちながら妹はこの有様。彼方は乗物にて三四十人の同

伽羅枕

勢。此方は隨行にも旦那にも只一人、小紋の重に煤竹茶の帯して、塵埃の中にしよんぼり立てる姿の、姉様のお目にはさぞや淺ましく見えしなるべし。胤はかはらぬ石見守の女ながら、彼方は玉簾の御息女に生れ、我はかくし子の日蔭のものとて、下賤の土に根を持てば、そのまゝ草花と開ける此身上！羨まじきは姉様なり。婦人の身にして、兩刀横へていかめし造りの胸毛男を、幾人も隨行に引連れて凄まじき勢力。其も一ツ血系にあらざりせば、よき月日の下に生れたる女と眺めて、さまで羨望も起るまじけれど、我も石見守の娘ならずや。姉様も石見守の娘ならずや。然に我は町外れの茅屋に、乳臭兒を抱えて木綿布子の胸をはだけ、亂髪に埃を沐びて白く、新脂を爪紅にして勝手業に手足見ともなく太り、煤けに煤けて苦勞に苦勞し、この後に是と頼もしき希望もなく、男女明日のお米を氣遣ふやうになりては末なり。苦界ながら里花と言離されし頃は、後々かくぞとは思ひも懸けず、鳥水の隱居に連れられ、名所見物に贅澤いひ盡くせし駕籠の中にては、旅百般の可哀を芝居狂言のごとくに見過し、此分にては綾錦の手玉をとり、伽羅の羽子板に眞珠の羽子をつき、珊瑚のきしやと弾も飽きて、長き一日の樂に苦しみ、貧富平等娛樂といふ戀は、對手老父にしてをかしからず。其人に嫉妬だにならば、業平の様なる男に添してもさらひ度を、只一ツの不足にして、此身獨



伽羅枕

立にならむ日の来るを思はざりしが、尾羽枯せば枯るゝものかなど、姉といふ石見の長女が容體を見じより、お花いと世のはかなき恨骨に染みわたり、齶々として我家に戻れば、隣家に預けし幼児餓えきりて、乳房にしがみつきて離れず。折から米屋の手代來りて、聞もくさくする例の催促、小癩に障りてけんもほろほろなる挨拶すれば、立腹して歸りぬ。其翌日姉よりの使者反物五六匹に目録を添へ、われ如きをも妹と思せばこそ、難有き事と涙ながらに請取りけるが、また思へば、人は恵みを受けむよりは、我から人を恵むべき身上にならむこそと、これも亦世を恨み身を致果なみの種となりて、とかく涙雨は人の身の秋にふるものなりけり。

お花 糊口の道を知らず、また活計を助くる人としてなければ、一日一日と貧は身に迫るばかりなれば、さるにても情深き柳生の姉より、月に必らず一度の心添はありながら、其にては淺くべくもあらず。淺がるゝにしても意地強きお花なれば、姉の世話にわが身を疎み、かくては何の思出ありて長命ふにや、心に問はれて愧かしき事なり。我二十二歳これよりを盛ともいふべき身にしてと、百計盡くれば、まよと女子の分別はいつも是に極まれる分別して、花が咲くか、果はならぬか、其は急場の今にしていふ所にあらずと、どうありても其事に臍を固めぬ。

(十六)

亡父新右園基を好みて初段を打ちければ、箕輪の浪宅に基友三四人入魂に出入ける中に、源七といへる女衞あり。新右も日常褒めける如く、此男業體に似合ぬ善玉にて賢意人なるけるが、新右死亡なりし時も縁者同様に世話して、其後も折々訪問れ、心細きお花を慰めて、及ばぬながらお力にもなるべしとの言葉を憶ひ、ある夕暮幼兒を抱えて源七の住居を尋ねぬ。土手ちかき山谷の裏借屋に獨身のいぶせく、今夕飯とて鍋皿小鉢を散亂し、ぐびくぐと獨酌の門戸を叩けば、誰だく。あの子の母親か、其様に心配せずともといひながら破れ月を引開け、此は思懸けなき前田の奥様、お珍らしや、まづく膳枕を無雜作に片寄せ、御覽の如き汚穢家へようこそといへば、御飯中にいかい失禮、お相談は後にてゆるくすべきに、さあ遠慮なくといへば、否丁度只今濟みました處、坊様は早お寝か、さぞや重かるべきに少時此へなりとお横になされませと、我坐蒲團の埃を拂ひて其所に直し、お枕にと有し風呂敷包を出せば、お花會釋して幼兒を臥し、はだけたる襟を掻合せ、扱源七殿といひ懸けしが、此の男は夫の顔も知り、我も心易くし、この子ある事も知り

伽羅枕



たるに、我身を賣りたしとは流石に愧かし、さればとて言はでは濟まぬ事なれば、勿論言出すべけれど、羞しからぬやう其となくほのめかして、先方の合點ゆくやうにと思ひつくまゝ、淨瑠璃の累が身賣をその儘と、後にて思へば、馬鹿らしくも愧しかりし。其時はさる氣もなく、源七心中に嘸かし笑ひたるべし。今夜参りし用事といふは、外ならぬ人の頼まれ事、女を一人吉原へ動に出したまひとの事なるが、今というて今相談のなるものによ、明日明後日に金子入用なればといへば、なるほど、此方は商賣なれば、何時なりとも御相談なるべし。して其女といふは。年齢少し更けたれど……まづ我に似たものと思ひたまへ。姿色優れたるにあらねど、色白なるは百人の中に入れて際立つ可し。夫もなく其外の縁者もなければ、年長くとも仔細あらじといふなり、此はいかにといへば、其女人は生娘か但しは女房上りか。御近所の人か。直近所のものにて生娘……女房縁付きし事もあれど、今は娘なり。なるほど、姿色優れたるにあらざれば、多分の身代金は出し難けれど、色の滅法白きと云は相場ねばりのし所なり。惣じて遊女の身は、數百人の數の中なれば、姿色の好は至極なるに相違なければ、第一は目立て見えねば客を引悪し。されば色白といふがまづ頂上なり。其は耳よりの事なるが、年齢は廿一二、姿色は十人並、色は其やうに白きとして、八十兩ほど借りたしといふに

年季は何年なるべきやと尋ねれば、源七類に手を當て、様子の大略は其にて知れたれど、代物を見ぬ内に相場は定め難し。速急との事ならば、今宵此より御同道申して、その女を見し上即座の御相談すべく、今宵に限らずとあれば、明早朝、お宅まで伺ふべければ、其旨を先様へお知らせ下され。いづれとも御都合次第といふ。お花行詰まりて無言なりしが、かくては當人我といふ事を曉られむ、曉られじと、推して何氣なき體を見せむとて、俯うつむけし顔を擧ぐれば、源七の眼の中に笑ふ色浮かむ如く、南無三と思へば汗滴きて頬を流れ、頬熱して胸騒ぎ、いよく仕損じたりと思ふほど平氣を粧ほひ難くて、わくつく中にも思案すれば、明日に延ばしたりとて、いつまで我といふ事を裏むべき。明日になればとて不能言事はいひ難ければ、端緒の解け序に今こそと、此一時を一生懸命、其人は我と言放てば、源七大方はかくぞと、前に察したれど、わざと驚き、其は奥様の。淺まじや何故にさまでの御分別はしたまひしぞ。我其道にしていふは可笑けれど、遊女の身は地獄の苛責、鬼の心になりて、罪業を作らねば立行かざる渡世。願はくばその御分別を仕替へまたへ。尙又このお世話申しては、亡くなられし新右衛門様へ源七が一分立ちませぬと辭めど、最早此所までに乗懸けてはお花の氣強く、遊女の身の苦艱は我とても知れば、酔興遊戯の身賣にはあらず、了簡も分別も仕盡し



ての上なり。新右殿亡くなられてより一倍の不如意に苦しみ、諸方に借財出来て足掻ならざる始末。其も好  
 けれどこの兒を抱えて女人の身は稼ぎの業なければ、眞實の話は、いふもさもしけれど明日の食事も覺束な  
 く、とても饑ゑて果つ可き身の、世間に何の耻辱あるべきや。新右殿が遺記わすれがたみ念の此子を千死にせむは、我萬  
 人に情を汚されんより、數十倍も亡夫に謝罪なき仕誼なれば、我奉公して此子は里に遣り、見事に成人さ  
 せて細くとも前田の家名を繼がせたき了簡なれば、偏にこの世話を頼み入ります。斷然亡夫に義理立して否  
 みたまはば、外の手懸りて身を賣らむに、賣れまじき事はあらじ。知らぬものゝ惡黨によい事されて、不  
 便の目にもし遣ば、新右殿は其時誰を恨むと思ひたもふぞ。とても賣る身なり、源七どの骨折て下されど、  
 お花の決心動かざるに所爲なく、新右衛門様には相濟まされど、奥様のお言葉にも一理あれば、源七お世話を  
 申すべし。さしあたりでは絶和泉といへる樓に口あれば、此に話を附く可けれど、吁！身を賣らむといふ女  
 にいづれ可哀ならぬはなけれど、以前を知りて今を存じたる此方様のお身上、餘りのお可傷に何とも申上  
 ぐべき言葉なし。只此上は情ある大身に根引かれたまひ、御全盛に廓を出たまふ、お見送りの同勢の尾につ  
 いて、我も皺枯ながら性一杯わめきて、御祝儀申上ぐ可き御運のほどを待ちます。錦の裏なる廓の内幕、

血池 鍼山地 獄道の苦艱に、お身體を損はぬやう随分お大事に遊ばしませと、實意より滴る言葉に、覺  
 悟の上なるお花も女氣の脆く、翫るゝ涙を亡夫の位牌に、名残の水盃と手向けて、いよく奉公の年季三年  
 八月の證文にて金八十兩。

## (十七)

廓奉公の身に用なしと、錢高のものとしてあらざれど、賣餘しの家具なきにあらねば、見倒屋を呼びて骨折障  
 子、破壊火鉢、夜衣蒲團、破襖、鍋、釜、膳、椀、鼠不入、火消壺、一ツ籠、洗濯盤、手水鉢まで、座敷口  
 に押並べて價値をさせけるに、呆るゝばかり無情なる事をいひて、強ては引取りたくもあらねど、折角此ま  
 で参りたるものなればと、足下を見てぞ二束三文の相場を附ける。此方にてはこの雜物不用なれば賣もす  
 べきに、鑷一文にも引取人なくば其までの事なり。邪寃臭ければ頼むでも持て行て欲きほどなるに、とかく  
 女子心は未練にして、法外なる見倒しを口惜しく、其ならば賣るまでもなし、合壁へ紀念分配にせんが優  
 しなりとも思へど、此貧の中なれば多少かの補缺にはなるべきと、しぶくながらいふなりの價値にて得心  
 すれば、見倒屋の老人麻財布の中より緋錢を四ツ五ツ取出し、たしかにお改め下されど其所に列べて、小跨



走はしりに門口へ出て荷車置つて待てる男を連つれ入り、攫つかうて行かるとものは、箸一筋も馴染の品なれば、其物に心なきも、名残は惜まれて快心地よきこころはせず。男が引擔ひきかぐ四布蒲團は、垢あせに汚れ肌はだに擦れ、亡夫の温氣ぬくみ冷ひやわたれる夕より、夜毎に泣明なみせし中形の磯千鳥も臆氣おそにて、今は聲をも得立てぬ想なり。襖障子あはせがたひじと持出す所へ、かねて頼たのみたれば隣家の女房、三河島の小百姓ながら困らぬ家と推擧おしして、其里親を同道して、御新造様このかた此女このかたがと紹介ひきかすに、其女人は三十一二の見かけから土氣女房、可笑き圓髻まるげに黄楊わづらの木櫛くしを挿さて、色黒々こころはとまよろり眼、唇厚く鐵漿てつじやうの際立て濃きは、今日江戸行との修飾たしななるべし。律義りつぎらしき顔色にその心こころ情も頼たのみしく思はれ、これはお世話様な。其方も御苦勞で御座りました。見らるゝ通りの混雜まじにてお茶も上られませす。お頼たのみ申ましまするは此子の事、何分面倒見まわりてやつて下され。さして虫氣むしはなけれど、咳氣せきが持病なれば寢冷ねひやを氣きを注つけて、すこし強く咳せきいたる時などは、お醫者に見せてやつて下されや。其始末は此方こゝにいたします。此二三日乳ちを吐はすやうなれば、その妙藥二三貼は此子の懐ふちに入れたれば、日に三度に一包を飲のましたまへと幼兒を手渡たし、帶の間より財布さいふを取出し、小判一枚紙しに拾ひろひて、これほど里扶持りさに渡しておまします。追おつつかかは新らしく拵おけて此方より届とりますまで、少しなれども小包を出し、襦袢じゆばんを四ツ五ツ、持

馴れし玩具も此中に入れたり、と又若干か捨りて、輕少なれど家へ土産を買かうて行いて下され。外にはいふべき事ことも頼たのむべき事こともなし。唯東西知らぬ乳臭兒ちのちを手放はなす親の心にもなりたまひ、其も不便べん此子はなほ不便べんと、くれぐれもいとしがつて面倒見まわりて下され。この身上の敢果あなさは、隣家のお萬殿まんよりも聞きかれてならむが、可憂うが上に可憂う重おもなりて、いとし子こに別わかるゝ此心こゝろはいかばかりぞと聲こゑ懸かれば、里親りしん欲眠よくみる子こを揺ゆりながら、私わたしとても子を亡なくせしにてよく知れり。其子こ生替なまはりての此子こと思おもひ、假初かりにも疎略そりやくにはすまじければ、安心あんしんしたまひて御奉公大事ごほうこうだいじに遊あそびませ。凡そ里子取るといふは、なか／＼慾徳よくとくづくくにてなるまじき事ことにて、夫おとこは非なま凡たふの子煩惱こぼれ、育てむといふ私わたしはいふにも及およばず……吁あ！江戸生えどなまは格別かくべつの御容姿ごようさ、早く歸かへつて夫おとこにも見みせて喜よろこびしたさに心急こゝろいそげば、早はやお暇ひまを申ましまするといへば、お花はな急いそ速すみ涙なみだを拭ぬぎ、少時せうじ待まちて！今一度篤あつと顔見かほみての上うへとまた抱取かからむとすれば、幼兒夢動こどもゆめうごきて少し聲こゑを立て、さし延のび紅葉こうえのことき手てをお花口はなぐちに含くみ、頬ほに頬ほを押お付け、見る目は鬼おにも數瞬かずしゆんかや。時刻じこく／＼と源七迎駕籠げんしちむかひかごを釣つらせて來り、落着おちましたらば參まゐるべし。餘り遅おそはりてはよろしからずと急いそ立つるに、此名殘このなごり盡じんきと、そつと懐ふちの子こを里親りしんに渡わたして、睜くいほど頼たのみましたを繰返くりかし、やうやう駕籠かごに乗のれば、源七外げんしちより垂障たれを下くだろし、それと昇出かきたす時とき、中にわ



フといふ聲に里親唇を噛み、源七眼を塞ぐに、勇ましきは昇夫の懸聲。

(十八)

歸咲のお花麗はしく、店名を佐太夫と呼びてその突出しの道中姿は、萬客の心を一攫に撈りしと聞こゆ。然もある可し、此女には着眼ありとて、樓主大奮發に奮發み、此一夜を女一代の大事と、入費の莫大なるは此樓前後に又なき例なり。お花はまた思ひけるは、姉は大名の奥方とて、見たりや、行列の威勢は飛鳥も翼を斂めむに、我その妹として味噌瀧携て腐らむは、神ぞ、神ぞ、神ぞ口惜からずや。さりながら運拙くして夫を持てば皆死なれ、これまでの萬事末凶ならざるはなく、末々の辻占悪ければ、正路の立身出世は覺束なき事なり。凡そ人間に生れながら、良かれ悪かれ其名を唱はれずして土に返るは、蠅の夏に生れて秋果つるがごとし。芳名を傳へずばあられぬ名にてもあれ世に知られ、其れにて姉に楯つかむも面白かるべし。われ最初の一步を踏違ひ、女人は貞操にてあるべきものを、白銀に甜められ黄金に抱かれ、大事のく懸と情を散々に玩弄ばれ、砂糖の甘味なく、茶の香氣なく、魚にしては脂膏ぬけたる三月比目魚、形はあれど其性なきは、其物にして其物ならず。女にして女にあらず、女ならざれど男にもあらず、外貌全備の不具なる

こそ淺ましけれ。いでや！不治の不具とされるからは、大不具となりて世間を氣味悪がらすべきぞ。江戸の傾城がどれほどの事あらむ。島原に難巖から仕立られ、やがて里花と全盛極し京女郎が手管と色姿に見よや、この吉原の天を地にし、何百人の女郎があり來りの古手練を生なしにして、小山ほどなる大茶臼を磗かせ、揚句は江戸中の、藁高なる家宅土藏を一揉に推潰し、勘當帳に反古の價を下げばや。その着手の今宵なればと、思ひを凝らし、心を籠めての色粧、鏡に我と微笑をくれて思はず願視りぬ。五月半の夕暮やとおもしろく、嫖客一時出盛る五丁町一圓は人波打て、とろくと待合辻に馳集る大勢の足音に、何かと見れば、突出し佐太夫が道中！白絹の目を一面銀糸にて拾ひ、背筋は四寸幅に紅糸にて拾ひ、此に遠藤羽の定紋を金糸に盛上にしたるは、御簾に見立の極襦なり。領には小形銀鉤を附け、五色の下糸は地を曳くばかりなる眞薬玉を釣下げたれば、八文字の高足のツしりと踏下さ毎に、此玉背に揺めければ、中に仕込みたる關聯四方に蒸するやうに巧みぬ。突出しには垂結帯ならざる制なれば、目も練なる大和錦を總角に引結び、その餘れるを兩肩にはねかけたり。前驅には花新造二人、いづれも愛々しき美色を撰び、薬玉を色染にせる白絹の對衣裳、後に引添ひては小才



覺あるらしき壯伎、花には露をいとふさしかけ傘、その後、薬玉の對衣裳なる二人禿、太夫の左右には番新  
 佐山春日野おのく姿を粧りて据腰に練行く。後詰は遣手若者、その後は魂魂脱殻の士農工商ぞろくど  
 群集して解けず。醫護の鐵杖清爽に霞み、箱提灯の火影美麗に輝りて、遠く之れを眺むに下界の仙女天上  
 夜遊の宴に赴く風情あり。にエー金が欲しいと喚くは誰ぢや。

(十九)

大盡といふほどの男金銀の崇か醜男ならざるは寡く、今宵突出しの初客といふは、年齢五十四五なる大男、  
 色黒からず目鼻立尋常なれど、唯一目に氣の弱き女人はわつと絶叫て氣絶すべし。顔手足の嫌ひなく大小の  
 疣透間なく取附けるは、餅殻を貼けたることく、最初は酔興に假面など被りて人を氣味悪がらすにやと思ひ、  
 佐太夫熱視れば確乎に正眞の疣なり。出産はまさしく下賤からずと見えて舉動言語大様なれど、江戸に馴れ  
 ては可笑げなる大阪訛、原籍を糺せば其地の名物なる袋物店の旦那なりといふ。  
 年に一度は仕入をかねて色遊の江戸下向。其度此麻を旅宿にして入浸り、随分見事なる散財に、疣大盡と  
 いへば裏田圃の蛙も鳴音を止むるほどの全盛。此春よりの流連なるが、其折の風俗は黒縮緬の羽織小袖に緋

裏をちらつかせ、緋頭巾、緋縮子足袋、緋天鷲絨緋の塗下駄。夏季は墨齋牡丹の白絹に緋博多の帯して朋黃  
 紗の投頭巾。何たる事ぞやと、纏頭もらはぬ人は淺ましがりけり。  
 色麻は男好くても持てず、黄金ありても持てず、自由めきて不自由なる場所なるに、此不具が何とする氣ぞ、  
 掩すべき耻辱を外飾の場所に曝らしに、其もはるく江戶三界までと、佐太夫心中に笑止がりぬ。  
 賣る身、買はるゝ身の疎ましさは、この疣にも好きな事を言はれ自由になりて、苦界は此所かとも思ひしが、  
 佐太夫すこし癖ありて、他人の可厭といふ事を強て好めば、馴染重らぬ添臥に、大盡が満身の疣を撫でなが  
 ら、此男富貴の家に生れながら、いかなる業因か如此被厭の疵物に出來て、世に不足といふ事を知らぬほど、  
 此不具を朝暮の惱として、天地を怨み父母を怨み、其身を怨み、嗚や世中の敢果なかる可し。商賈我儘なる  
 色里などにては、全備の人一兩にて濟む所を、十兩遣うてもさほどは利す、身の弱點あれば萬事に控へて可  
 愁思ひ絶えまじければ、飲懸し酒も傾に味の變る事あるべく。此容貌にては誰もく厭ひて、何處に行けば  
 とて戀めける所には、穢多非人のやうなる心扱ひせらるべく、自身にもざりと大概は知りながら、なほ煩懣  
 已み難くて通ひたまふ、心中の可哀さ可憐と徐ろに不便を催しければ、佐太夫凡人の精神を入替へ、心を露



して大壺を持成しけるに、果してこの眞實疣殿の骨髄に徹し、寢覺に佐太夫を忘れず、五十年來の喜悅娛樂、今は死ぬるとも露ばかりも遺る恨みなしと、折々太夫だけに語りて喜びぬ。されば所望せぬ金銀の貫串笥の小抽斗に溢れ、物日の仕舞、仕着、配物、衣裳手道具、櫛簪其他萬端の注意神樂のごとく、疣大壺が手一ツにならずといふことなし。

## (二十)

むかしは數十軒の土手の編笠茶屋今十軒と成て、葦簀、床几、懸行燈に外面の手輕なることは、道中の茶店に異ならねど、土手下には小奇麗なる居宅を構へ、之も待合人の所望にまかせて貸し、此家より遊女屋へ案内すること自在なり。廊内の引手茶屋は、揚錢の立替何やかや遊客に重寶なる事あれど、此家にては其なく唯送込むのみなれば、萬事に不自由なる上幅利かずとて行かぬ人多けれど、人目を忍ぶものは華美ならぬを喜びて、大身などの行くもありて相應の繁昌なり。此頃山谷堀にも同様なる引手茶屋ありて、これは船宿といふ事、本業を其まゝに呼慣はせしなり。

九月朔日の夕暮土手の往來絶間なく、帯屋の床几に三人連の勤番士、いづれも面體はいかめしけれど、この

道には弱卒と見えて、その話となれば呂律亂れ、鬼をも挫ぐべき此方なれど、彼奴と組むではとてもく、濫川流の手練が物の用に立つべきでないと言へば、その對坐の武人後反に左手を突き、右手の扇にて太刀の櫛を敲きながら、いや松木氏の弱い事かな。そもく武士たるべき身が人を斬ること本懐なれ、女ごときに殺さるるとは近頃笑止の至りなり。殿今にも御成人なされ、伽羅の下駄など穿かせたまふほどの御寛潤を好ませたまふに於ては、さしづめ此大峰が色道の御指南番とありて、たしかに八百石がものはあるべきも、世に伯樂なければ千里の馬を知る人なく、これ程の器量人にお長家住居さすなど、はてさて無念の次第など、多愛なき事をいひ散らし立ちぬ。店口小影き片隅に身を寄せたりし五十一二の男、白痘痕にて髪毛薄く、古渡唐棧の綿入に、縹柄少し違ひたる同じ品の羽織を着たるは、有財商人の風俗。客の居らすなりたるを覗ひ、しづくと奥の床几に席を移して、今夜いづれにてか遊びたきものなれど、この廓に度胸よき女郎ありや。臆太くして男氣あるものなれば容色には望なし、さるものはあるまじきやと尋ねけるに、女房小首を傾け、格別此女が度胸よしといふ遊女はなけれど、といひ懸けてはたと小膝を拍ち、それ、それ、龜和泉の佐太夫といふがこの五月の突出し、さしたる容色にはあらねど、氣性を買ひにとて夜毎の繁昌。是はいか



がといふに其男打笑み、御苦勞ながら其へ案内頼む。

(二十一)

此男深くは酒を飲まず、少しも戯言いはず、藝者の絃音も蕭條なるを誦へ、座敷しつそりとして好節に切上げて閨房に入れば、佐大夫も續いて添臥の夏夜は熱苦きに、厭はせたまはぬ御心の忝なさと、團扇の風を配けて送るに、衣より肌より得ならず異香蕪すれば、いもせの山や無名たつらむと吟じて佐大夫が手を捉るを、商人にはしほらしき人と感じて、敷妙の手枕野の梅の花、と捉らるるまゝに玉の様な細腕をさし出せば、客は首を擡げながら、さりとも見えぬと恐ろしや、城を覆滅す力あるものかと、對話少し解懸る折から、佐山の連りに喚立つる聲すれば、佐大夫起出で何事ぞといへば、佐山手を擧げて秘密にと制し、小手招きするを訝かしみて其所へ行けば、耳に口を寄せ、あの客人は尋常人ならずと目色を變へていふ。何故にと聞けば、さき程あの客これを冷き所にそつとして置いてくれとて、重き小包を渡したまひけるを、何とも心注かず請取りて、この下戸棚に入れ置しが、今出するものありて之れを見るに、頼まれし言葉の思出されて、中は何ぞと開きけるに、これを見たまへ、恐しや身毛も彌立つと、棚の中に行燈をさし向たるに、覗へば包

裏は六連發の短銃なり。佐大夫屹と閨房の方を流盼に見やりて、顔き、其品は元のごとくに裏みて、人目の觸れぬ所に藏し、佐山には口外すなど口留して、閨にもどりても此事を言はず、只管容貌舉動に注目すれば、是ぞと變りて見ゆる所なし。飛道具などを所持すればと思ふ眼にして見れば、さもあらざる事にも扱はと不審起るものながら、風俗に見せかけたる商人にては確にあらじ、之に就て思へば度胸よき女とどの客と帯屋のいひしは、一定子細ある事なり。何にもせよおもしろき事なりと、心を盡くして取成しながら、百方に言懸け仕向けて正體を顯はさんとしたれど、別に怪しと見るべきほどの事はなかりき。朝になれば寢亂姿を見せじと、客の起きぬ間に佐大夫髪を撫付け、薄化粧して再び閨房に行けば、漸く目覺ませし所なり、煙草を吸付け、時刻尙早きに今一睡したまへといへば、紫縮緬の胸巻小袋の如く腹膨れたるを、づしりと大夫の膝下に置き、此にてよきやうに計らひたまへ、四五日の居纏には足るべし、夏夜の短かに寝む事ほど、夜衣に包まりて後向になりぬ。大氣なる此舉動といひ、帯屋が言葉といひ、短銃といひ、この男いよく尋常人ならずと思へど、扱何者といふに答ふべき言葉なし。この四五日の中には素性を我から名乗せて見るべしと、佐大夫佐山を呼びて迎酒の仕度を命ずれば、怖れて流連かと尋ねる顔は！



## (二十二)

初會數日の流連に預けたりし黄金皆無となりたれば、また近き内にとて此男歸りけるが、中一日置きて來りぬ。胴巻は例のごとく佐太夫に渡して、外に我衣類五重ばかりを衣更なればと預置きて、此所を居室の棧心よごに歸ることを想はず。黄金あれど引摺むで擲るやうなる事はなけれど、新造、禿、鐘手、若者までも懐かれて、佐太夫の坐敷は市を爲して賑はしく、十日餘かく遊び續けて、家の飯の戀しくなりたる頃と、夕暮よりふらりと出掛け、明れば午後また小判を抱いて來たりしが、これも十日不足に烟となして、堀れば歸り、來れば持ち、持てば堀くして大凡五六度も運びけれど、無盡蔵の底見えずして、入用とあらばまた何時をも恐れざる氣色なり。かくまでの馴染に何時まで裏みたまふやらむ、お宅は何處ぞ聞かせ給へといへば、人生朝露の如し、草の葉末を轉廻りて、何所を家此所と定むべき、唯我いとしと思ふ方こそ其なれ。お尋ねにも及ばぬこと、龜和泉の佐太夫方なり。あの邊御通行の折からは、ちとお立寄りなされなば、漆茶がはりの冷爛し、有合にて一盃などちやかし、いつもく其やうに家暮らし原籍詮義、さればこそ捕吏なむどに情夫あらめと、我が疑ふに無理はあるまいがといふ。佐太夫男の背を敲きて、人もあらふに捕吏づれを

情夫とは何の恨みありてか。餘人ならば乞食にても、疾癩者にても、折助にても、願人にても、兇狀持にても盗人にても、世に日蔭なる亡命人<sup>おたづねもの</sup>にても、我を戀ひたまふものは我れも亦憎くからず、其の人が情夫なり。捕吏と水臭き男は、器量ようでも黄金ありても、外面實意や外見心切、ええ！否々身懐がすると、立上らんとすれば男佐太夫の襦を捉へ、國法を犯かせしおたづねものの中に、下賤下司は一人もなし。それを乞食折助、非義なる盗人<sup>ぬすびと</sup>、天刑の病者と一口にいひはむは非禮なるべきぞ。佐太夫につと笑ひて、只今此身に捕吏の間夫ありとおほせられしが、さまでにおたづねものを辯護ひたまふ此方様は、大罪犯したる日蔭ものの中に、深しき御契約の御兄弟を持たせたまふにや。思ひ淺からぬ此方様の弟御様とあらば、蔭にも他人ならで見ぬ前より懐かしければ、連れ參らせてひそかに逢はしたまはれ。世間にてはよしや日蔭ものにおほさむとも、女人の魂といふ佐太夫が鏡は一昨日磨きあがりて、其光日輪様には及ばずとも、人一人ばかりを聞き身には致すまじ。廓何百人の遊女、誰か胎内より八文字踏むで生れ出たるものあるべき。今賣色の畜生がましき營業の身上を省み、某の子かにかしの女とは、流石に親の耻辱を思ひて迂濶に名乗りこそせぬ、其往時を糺さば、指切れ髪切れ、やれ血起請との無理難題は、恐多き客衆も妙からざるべし。



## (二十三)

なるほど我も賣色の身なれば、一圖にすれからしの薄情ものとお思召さむは、多くの遊女がうたてき所業に目馴れたまひつればなるべし。唯此佐太夫は子細あつて黄金を好まず、好男子を好まず、一癖ものとの名は廓中に隠れもなし。情意氣張づくにしては随分此命を吝ます、見事立派といはるゝほどの事をしてのけ、死後末代まで吉原の佐太夫はと、黄金一式の遊女を男の怨言の中に引かれたま身の本願。此所に賣色の日なほ凄けれど、四五百人の客の數に逢ひて、一々其氣象を見るに、まことや大門を潜る程の男に魂の脱殻ならざるはなく、利口らしき愚鈍、剛らしき弱助、楊枝一本たしかに削るべき技倆あるものなし。この廓に足踏入れぬ男をこそ粹とはいはれど、われ等が先達の言葉もおもひ出されて、かゝる身とならざりし以前は、世間に腐るほど技倆人ありけりと見たりしが、此廓に來て弗と見ぬものは、それとなつかしき姉の顔なり。申すは追従に似て可笑しけれど、不思議の御縁にて此方様に逢ひ参らせ、妻ひたまふ御身分より御姓名より、何より先に觀察参らせしは、その非凡なる御氣性なり。もとより、御年齢を召し給ひつれば、申すまではなけれど、色酒に蕩けて性根を亂し、遊女のたらしに現となりて、家を忘るゝ輩に似るべくもあらず。戯れの

御一言、假初の御所爲の中にも非凡個所の見ゆれば、五月晦に月影を拜む思ひして、羞かしながら佐太夫其處に迷ひました。さりながら此方様は、此部屋を御本宅のやうにかく寢食したまふとはいへ、外々の客衆のごとく、見所なき此身の色を愛でたまふにあらず、……いえく何とおほせらるゝともそれに相違なし、男らしくなき世詞愛嬌は慎みたまへ。誰を戀ふにもあらず、誰に迷ふにもあらず、この色里に入浸りたまふは、何にもせよ御所存なくてかなはぬ事なり。言語に舉動に心の色を見せ参らせ、その御所存を今日御口外なさるか、明日か明後日かと心待にしたれど、さるべき氣色もなければ、堪へかねて此方より折々誘ひ申せば、外してあらぬ事に談話を移したまふこそ恨めしけれ。かく打妻ひたまふほどならば、何心ありて剛膽不敵女をと帶屋へは尋ねたまひしで。尙又妻むべき御所存もなく、唯色を愛で情を買ひたまふばかりならば、好容色をこそ好みたまふべきに、剛膽不敵が添寝の友の何ならむ、御返事はいかにや。その御所存を打明けたまはむには、善かれ悪かれ其には論なし、佐太夫が一命捨て、露ほども御用に立つならば、後ともいはず即座に相果て御覽に入れ参らすべし。熊野の午王を誓に立て、行末渝らじとの血起請書くは、賣色の花とて遊女にある慣例の空言妄語。其と此とは事違ひて、死ぬとならば今が今死ぬ誓言、血路はなき脇指



一衝を距離の對座苦しめ給ふな此處を刺したまへ、と膝の突合ふまで進寄りて襟を掻開け、玉を延たる咽喉を曝らしていざといへど、男は首を垂れ手を組みて應ぜざれば、佐大夫袂を振り、煙管を把つて丁と座を拍ち、未練なり、我一命を絶ちたまはでは、大事のお身上が危いぞえーやあー不覺なり、油断なり！此方は一人、政府は多人數。秘したまふ事の露顯せで何時まであるべき。見たまへ是と、袖の内より四折の紙を出して燈火の前に披けば、この男が武士風俗の繪姿！や、や、や！

## (二十四)

男は太呆れに呆れて、眼光鋭くじつと佐大夫を凝視れば、佐大夫片頬に笑みて男の膝に繪姿を投げやり、町人が百姓か武士か職人か、この眼が曇らぬ鏡面。また出入の度に放したまはぬ袋戸棚の中なる、大事のお袱包の品は何といふものによ。指頭懸れば即席の雷霆、臭煙と人命の消ゆるといふ可恐怖物を、町人風情が何用ありて所持せむや。よしや要領深かるべき武士なりとも、兩刀の外に卑怯なる飛道具を懐にしたまふは、まさしく世間に怖るる物あればなるべし。此の一々にても此方様の素性は大概知れたる上に、世をたばかりの名は宗兵衛様、實名田島……。叱！宗様この繪姿は此方様によう背てとはいはないかと、輪に吐く煙を

其顔に吹懸くれば、宗兵衛領き、扱は段々の言葉に相違なく、その一命を此方所望なるが。言分なきか。何よりも易き事、用捨はいらぬほどに欲しき時分に取りたまへど、微塵動する色なく、愛々しき眼中に微笑を浮べての挨拶。しほらしき不敵女と宗兵衛居直りて膝を正せば、暫時と佐大夫立上りて座敷の裏表を覗ひ、人氣なきを見濟して立戻り、枕頭にしやんと座せば、宗兵衛額を差寄せ忍聲して、女子ながらも氣丈の魂ありと見込み、その命を質物にして今や明す此身の一大事。繪姿既に回るほどなれば概略は知りつらむ。我將軍の直參として鎗術の御指南役たりしが、水戸侯の御懸望斜ならざるに因て、改めてその家臣の列に入りて御採用淺からざる、田島弦左衛門といへば武士の數の中に素にも容さるゝ身なりかし。君公に頼まれ奉る一大事は、水藩の興亡にも關らむほどなれば、我と見懸けて御腹中御口外の重きに、理まさに辭すべきなれど我として辭し難く、御領承は申しあげたれどもと成し得べき事にあらず。成したりとて成途ぐべきにあらずれば、其後折々の御諫言も御耳にいらで、切にと逼らせたまふなれば、事露顯の曉は罪をわれ一身に浴びて、首一ツ落なば濟むべしとの覺悟を極め、企圖に手も着かざる間に、弦左衛門徳川家に私怨を含み、大望を思立つ旨其筋に聞えけると知りて、逸早く身を懸し世を忍ぶといへども、この本懐の遂られ難きは事



の非理不義なるによりて自ら知れり。さりながら一旦君の御依囑を承引からは、事成ざるまでも努力せざるは士の道にあらざれど、天下の大患はわが大望成就と一時に起らむは眼前なるに、心兩岐に迷へば死せむにも死しがたく、うかくと長らふ身の厳しき逮捕を遁れ、此廓に立入て氣象ある遊女の袖の陰に身を忍ばむとは、天低く地高くこの世界に居所なき弦左衛門が、身の行末を佐太夫心あらは憐れと思へど、老松霜に凋れて鶴夜鳴の聲細し。わが繪姿の其方が手に渡るほどなれば、此所の主人奴婢まで今は此身上を知らざるものあらじ。いかにと問へば、なるほど主人は知れど、先頃裏座敷普請の節は此方様三百兩を惠みたまひ、其外萬事此身に花美を飾らせたまふ恩誼を感じてや、我にも窃かに申含め、力の及ぶほどはお潜懸申上げよとの事なり。奴婢なむとは誰知るものなれば御心を煩はしたまふべきにあらざれど、此所は安心の隠家にあらねば、心當りの賣家の根津にあるを、明日にも見せに遣りて便宜の場所なれば買取りたまへ。ともかくも我計らうて有るほどの力は竭し参らすべけれど、此方様にもお身に一寸の油断も見せたまふな。假初ならず馴染参らせしかひもなう、明日を知らぬ御身上に眞實を見すべき時なぐ、逢ふたびの樂み少なく、離別はかくていと涙の多からんこそ、世に淺ましきわれらが契約なれ。それにも優て此方様のお心の中はいか

があらん。武士ともいふべき身は、城に岩に立籠りて、寄手の軍勢を花々しく引受けんぞ本意なるべきに、遊女風情に大事を語りて、一身を頼みたまふ御運の末のいたはしきといへば、弦左衛門切齒に音たて、熱涙膝に落て霞のごとし。あゝ、今日此頃の腹の切りたさ！

(二十五)

明日は歸らむとて宗兵衛出て行きしに、三日待てど音沙汰なければ、もしやと胸騒ぎて、五度六度續け様の疊算のみなるに氣を變へて、机上なる書物を抜き、一行目の頭字を見れば涙といふ字なり。其書を投棄て、かゝるべしと思へばこそ、晝間は止めて外出は夜ばかりと心を注げしに、うかうかと追遙ひたまふかに憂目には遇ひたまひつれ。口惜しき男の舉動かなと一度は恨みけれど、また思へば、かの男とて其企圖を打棄て給ひたるにあらねば、用事あらむは尋常ならざるべく、三日が四日五日が十日、折には一月とも二月ともなるべきに、我流石は女人なりけりと、心を取直しても忽ちに亂れて、いや／＼繪姿まはりて詮議手配嚴重なる中なればと、疑念に胸煙る切なさ、部屋を出つ入りつ、居つ立つ、えとばかり湯呑に二三杯牛飲け、脇枕に仆れて浮世の外は此間なりけり。夕暮に近づけば、華清に玉を磨き、名花雨を帯びて化粧



を急ぐ頃かど、人に驚かされて寝眼ませば、頬を撫づるものあり。食睡眼をやうやう開きて見れば、天から降りたるか誰が捨てたるか、愛々しき男兒唯一人枕頭に在り。これはと飛起ながらなほ夢心地して更に合點ゆかず、兒の泣出す儘に抱上ぐれば、懷中に手をいれ胸に顔を當つるは乳を索すよと、出ぬながら襤褸分けて乳房を含ますれば、血の出るほどに吸へと思ふもの出ねば、なほ大聲に泣くにあぐみて新造を呼立れば、次間に居ると覺ゆる物音のするに、誰も出で來ざれば何をしておか、と立上る間も兒のむづかるに、其背をばたくと敲きて小聲に子守唄を誦へば、屏風の後より宗兵衛ぬつと現はれて、古今未曾有の聞物大夫様の子守唄、節濃かにして色ある聲には鬼も蛇も睡るべきぞといへば、襖の後にどつと笑ふ聲して、春日野佐山禿戀路待夜崩るゝととく亂入し、我に貸たまへ抱かしてと奪合うて、戀路兒の足を引けば、待夜手を執てやらじと争ふに、兒はまた泣出す。佐太夫二人を叱りて、そのやうに無謀なる事せば泥で造れる人形にても壞るべし、嗜まぬかといふ聲の下より、お山を越えて里に行たと我身を揺りながらの一節、春日野呆れて、何所にてその語は習ひたまひしぞ。子を持たぬ女にはならぬ事なりと、何氣なく尤めけるに佐太夫ぞよつとして、末々人の女房たるべき身の嗜に、京にて豫て習ひしと笑へば、京といふ所には香花茶湯のお師匠

様のやうに、お乳母様のお師匠様ありやと、佐山と二人して手を拍つて笑ひぬ。

## (二十六)

宗様ぬしの御秘藏かえといへば、如言、よう顔を見やれ、生寫ならむといふ。大勢も圍繞て視れど更に似たる箇所なし。佐太夫つれづれと兒の顔を視めたりしが、つと面を上げて宗兵衛と眼を見合せ、あつと思立てし聲を咳に紛らせ、おほせらるれば眼元などに肖たる所なきにあらず、ようこそ伴れたまひたれ、今宵は我と寝かしたまへ、せめてはこのお子を大事にして、奥様の御格氣を息めむものといふ。兒は乳房を求めてまた泣立つれば、これくと宗兵衛の呼聲に、乳母會釋しながら座敷に入るを、佐太夫見てこれはとまた驚きぬ。乳母は何氣なき様子にて、お坊様お乳々と兩手を出せば、兒は雀躍して其の膝に移り、やがて音高く乳を吸ふを、佐太夫乳母の傍に附纏ひ、左右前後を廻りて兒に目を放さず、無心に見惚ると顔に心底の歡喜溢れて見えけり。乳母の懷に手をさし入れながらすやくと兒は眠りぬれば、奥の間なる三蒲團の上に臥かし、今宵は情夫の來たりたるに粹なる宗様見免したまへと、佐太夫いそいと添寝の床にいれば、宗兵衛乳母に食事を薦め、今宵は泊るに極りたれば、風呂へなりと行て遠慮なく寝よ。乳に泣く事もあらば起



すべし。明日も家に用事なくばゆるりとして行く可し。兒は我と佐大夫が今宵確に預りたりとて、乳母は近き名代部屋に案内させて、後には春日野通路を對手に、宗兵衛樂飲らくいんに夜更ることを覚えざりしが、禿どろしが行燈の影に坐睡るを見て、其方等も寝め、我も川といふ字にと蚊帳に入れば、佐大夫なほ眠らで、團扇つかひ絶間なく兒を扇ぎけるが、宗兵衛を見るより身を起して、今宵の嬉しさはと小聲にいふ。三河島に一子を預けたる由豫ての話にて知れば、來る度の土産に種の盡さけるよりこの兒の事を思ひ出し、是に優す其方への土産はあらじと、今朝三河島へ尋ね行きて、わざ／＼調へたる一品、此外にも所望のぞみありやといへば、子にます寶の何かあるべき。お志の忝なきやら嬉しきやらにて、今も今とて涙の留め難くさへあるに、この兒の顔を見るにつけて、箕輪に在りし往時の事ども、一々眼に見るやうに心に浮び、蓑席こもを被てなりと素人しらうとの身にあらましものを、貧よりの不了簡より此有様、母様と喚ばるる身にしてあるべき事か、この兒には茜木あかね綿めんを被せながら、躬らは緋縮緬の花衣、氣羞かしき事なりと、佐大夫の丈夫むすこ膽も親子の愛には落けて襦袢の袖口を沾らせば、宗兵衛眠る兒の頭を撫で、身を果敢なめば世に誰一人として不足なきものあらじ。我ある間は折々此兒の顔を見せて進すべければ、其をせめてもの消愁しょうしゆにして身の繁昌を勉め給へ。我も本國

但馬には十三なる男子あれど、五歳の時別ればなしにしたれば、今はいかに成人せしやらむ。見世物玩弄屋の前など過るたびに、不覺の涙を催さることなし。嚴しき逮捕を忍ぶ身は網中の魚に異ならねば、思出す日を名残としてまた遇ふ事を思はず。さほどの我身に比へては其方はまだ／＼苦勞が足らざるぞ。その詮議嚴しきに、三日といふもの歸りたまはざりしゆゑ、萬一の事もやと案じましたに、御無事のお姿と懐しき兒の顔と、一度に見る今宵はそもやいかなる日ぞ。

## (二十七)

宗兵衛千兩箱を幾個持ちしか知らねど、其上の入路なくして劇しく出る一方なれば、二月餘の後は景氣寂れて秋風立てることし。冷熱に移り易き此廓の人心とて、鎗手若者の顔色まづ悪くなれば、樓なにしやう主の機嫌も宜しからず。無念に思ひて、宗兵衛瘦我慢に綺羅を張り華美を見すれば、陰言は聞くに聞かれず、あれを見よ、長くもあらぬ壽命をいと々縮むる了簡の笑止とて、雙敵を譏るかなんぞのやうに、昨日まで此家の福神と追従いひし舌の、動けばとて色々に動くものかな、と佐大夫も衆ひびの無情に切齒はがみをすれど、此廓を人の棲む世界と思うては一日の營業もならず。又腹を立て通しにせねばなら所と宗兵衛を宥めて、とかくは此所に長居せぬ



が上分別なり。此方有福の間は樓主も神のごとく敬へど、黄金の光明失せて身の赤錆を見る時は、反對に廻るが人心、今宵を此廓此家の見納にして、かの三浦坂の別宅に引籠たまへ。身の膏血絞餘の此方なれば、もはや打つとも撫づるとも黄なるものは、出まじければ樓主はさる者に何時まで關繫ふべき。まして犯せる大罪科に世を忍ぶ身といへば、事露頭の上の連累を怖れ、手の入らぬ中に此方より訴人せむこと下司根性の常なり。今は一刻の猶豫も大事の基なれば、此より直に三浦坂へ落ちたまへ。其家は買しまゝにて疊建具はあれど、人の棲むべき用意なければ、此宵明日明後日の不自由を忍びたまふ内にいかにも計ふべし。奴婢などは、使ひたまふな、只寂々と一人暮をしたまへ。日々の食事は此方より運ぶべければ、いざ疾と手づから宗兵衛が腰衣の帶を解けば、噫天なりと立あがり、此上は佐大夫其方一人を頼みぞや。今事新しくいふまでもなければ、是までの焦慮は永年添ひし女房も及ぶべきにあらず、過分といはむか勿體なしといはむか、其方が赤心、弦左衛門死後までも忘れはおかぬぞ。女々しきお言葉かな。さる些細のことは忘れたまふとも何かあらむ、暮々もお身御要慎を忘れたまふな。此後はかまへてこの廓に足踏御無用ぞや。用事あらば何なりと言ひ越したまへ。仕度よくばささ早くくと急くほどに、宗兵衛づかくと圍房を立出で、中

問にて願視り、佐大夫！我も武運拙くして今宵を名残のと其手を執れば、振拂ひて、見苦しき事したまふな。此世はともかくも未來にて逢瀬はあるべきにといへば、善智識！見事に果てむぞ。此上のお願ひ、さらば。おさらばと佐大夫前に立て廊下に出づれば、あら、來懸る巡邏の捕吏。南無三！と襦袢の裾に屈む宗兵衛を包み、懸路や！

## (二十八)

根津三浦浦坂なる宗兵衛が隠家へ、朝々人を頼みて一日中の食物を餉るに、この入費と手数の懸ること言語に絶えたり。廓の習慣とて臺屋物といへば、廓外に二三錢のもの十錢餘ならでは調ひ難く、煮炊不自由なる部屋住居は、飯も菜も臺屋より取よする外なく、其を餉らむとて人を頼むにも法外の賃錢を與へ、其心を悦ばして口を塞ぐなり。凡そ此處に一日の食料は廓外に十日を送らるべし。佐大夫居常寛潤を好み、名を賣ることを専らにしければ、内證の逼迫なることは、我ながら色氣も興も醒むるほどの始末と常に笑へり。

去ども此辭は已まず。七月土用干といふに、座敷には銀金具綺羅美やかなる蒔繪の重簾笥もありながら、冬



物などはいふにも及ばず、季物にだに用意なきほどなるに、其時面白し、目覺しき遊戯して廊中の新障子を一潰にして保養にせむと、表座敷の青簾を高く捲上げ、本間次間居間の障屏を拂ひて三間一ツに打抜き、通路に臨める櫓前に透間もなく桐襦袢單衣の敷々を釣りたるにぞ、此二階下に人の山を築きける。流石は龜和泉の佐大夫なり、負ける嫌ひの華美を仕續けの内證は、牛が曳ほどの火車と想ひしに、これを見るから恐ろしき手練ものと一人がいへば、かゝる女の腕に黒々と命と點させ、これほどの衣類を始め雜物まで、一つ残らぬまで居續せむほどならば、死しては土手に通神と祀られなむこそ此身の本望、といひたまふを言ひて此の下を去らざ。樓々の太夫どもこの評判を聞くより、斥候の新造を走らすなど大方ならざる珍事なり。其明日はまた同じほどの衣類の敷を曝せしに、一々前日は品を變へて、大名などの召物とも見ゆる男物なども取り交せて釣りければ、人々唯呆れて、怖れて、怪みて、とても人間業のなるまじき事なり、とこの噂高く廓外までも聞えて、見物に來たるものあり。その次日はいかにと廓中朝より目を時て、よもやと思ひけるにまたく懸列ねたるを見れば、前日に似たる品としては只一つもなかりき。佐大夫この三日は前面の茶屋に在りて、見物の品評を聞き廓の雜聞を見て心中可笑しく、世中は馬鹿の多きよ、誑しよきこの馬

鹿殿の絶えぬ中は、吉原日々繁昌に趨く可し。凡そ女郎に賣らるゝほどの身が、持參の大金あるべき様なく、また鹽を甜めても半年一年にしてかゝる物持になるべきや。枕さがしなどしても敷の知れたる事ならむにと鐘手に語りて笑ひぬ。由干せし衣裳は淺草邊の損料屋より、一日借をして我物顔にひけらかせしなり。此事後に知れて天晴楠太夫と言囃しぬ。

## (二十九)

子供だましのかゝる遊戯も賣色の花なれば、苦しき中の算段は愁けれど是非なく、其や此やの雜費に逐はれて、日々の切なさに血の出る身錢にて宗兵衛へ仕送ること、意地一ツの所業なり。二人が豫想に違はず、宗兵衛榮華の脂盡きて今は佐大夫が血を吸ふと見るより、樓主は忽ちに寢返打て、この腐縁斷れと息をも次せぬ意見の揚句は、乞食油虫と口穢く宗兵衛を罵りけるに、佐大夫勃然として、此方とても一度は死なるる身の、少しは後世の程も思ひたまへ。散々に引剥ぎ身の皮一枚に成果て、いかに撈る物無くなりたればとて昨日の恩は今も形に残るあれなる新座敷。随分此樓の潤澤に、なりがらしとて蟲乞食とは近頃情なきお言葉かな。その御了簡にては、大が首に財布下けて來たらば客にじたまふべしといへば、樓主烈火のごと



く怒りて、黙らぬか！彼奴を何者と思うての辯護だて、罪は果首の亡命人。今までの義理もあれば知らぬ顔に持てなし、首と胴とに膠をつけしはみな我慈悲にあらずや。我家に潜みたりし事お役人の耳に入りて此間より嚴密の詮義、まづと尋ね出せどのお觸なり。其方がいらざる心中立して何所にか忍ばせ、萬事を賄ふ始末は我よく知れり。陳ずるともはや免れぬぞ、如實に白状せよ。言はずば辛き目見せても泥を吐かせんと嗟れば、佐大夫片頬に笑み、乞食は此月の上旬より來ずなりて、今は何所の小屋住居か。佐大夫とも云ふべき吉原の大夫が乞食輩の番をすべきや。ちと尋ね所が違ふやうに覺えますと、立上る裾を掴んで怒氣に任せてぐつと引けば、女の力の障へ難く樓主の膝に控と仆るゝを、其儘組敷き兩手を振上げ、それ！といふを相圖に若者水を張りたる盥を中庭の椽に運び、二尺餘の繩束の棒をそれに浸して差出せば、樓主把て一ふり揮り、佐大夫を引起して坐れる後に廻り、臀を目懸けて一打二打三打、水氣無くなれば沾らして四打五打、あとは數を知らず無二無三に打つ程に、肉の響凄しく見る間に皮赤刺けて血染出れば、佐大夫此所ぞ唇の裂るばかり喰緊めて苦痛を忍ばんとすれど、肉の離るゝばかりなる想に、我にもあらず悲鳴して聲細る頃は息も絶々なり、男に昇がれて部屋に戻れば、其まゝ仆れて身動きもならざる程なるに、其夜客あれば

變らず勤めて惱める色を見せざれば、樓主は舌を捲きて恐れぬ。二日三日休みてまた樓主に招かれ、いつも最初は溫和に利害を説きて宗兵衛の住所を言へどあれば、剛情一徹に知らぬとばかり言張り、果ては惡口交りに辱しむれば、かの繩束の亂打に死ぬべく惱まされて、折檻の日數重れば樓主の拷問に馴れていさゝかも物を言はず、其前に行けばつツと身を投伏して足を揃へ、臀を上向にして打擲を促しけり。これ坐れる所を打たるれば、肉硬くして苦痛おのつから劇きゆる、俯視に臥して肉を浮かせ、軽く繩束を受けむとの意なり。さる事と知らねば樓主はこの不敵なる舉動にあぐみて、此女一命を捨物にしての秘胸中、とても我手に合ふものならずとて、折檻は五六度にして廢めけり。この疵苦惱の眞最中といへども一夜も賣色を缺さず、朋輩の女郎この剛情我慢に感じて男子も及ばざる事といへば、カづくならば鉛の熱湯切身に鹽、何にもあれ此意地を挫ぐに足らねど、義理と情には脆くして人一倍の泣蟲と應へぬ。

## (三十)

三浦坂の隠家の事沸々其筋へ聞えたりと曉れる節のありければ、即刻文して其由を知らせ、三河島の里子を預けし方は、人里遠き百姓の一軒家なれば、宗兵衛が身上を詐りて此處に同居を頼みけるが、都風俗の食客



は人の目棲に懸り易く、嫌疑の端にもと其日より宗兵衛つぎく襖の筒袖を纏ひ、膝に色紙布しよしつぎの當りたる猿股引を穿き、鞆を手にして裏畑に菜作と身を寝し、夫婦の手助に日々を離醒と稼を暮し、埋木に花咲事のなかりしにと、音信の筆の序にしるして佐大夫の許へ送りければ、淺ましやとばかり涙を流して世間は廣く人の數も多ければ、此身ばかりにもあらで傷はしき弦左衛門様のお身の成なれのはて果と、巻返して見る文に我兒の事を目に見ること細密こまやかに認め、今は我にも懐きて老命々々と呼び、抱かれて寝る夜もありとあるに、此男の陰なりとも邪見にせぬ赤心こころまじも知れて頼もしく、其嬉しさは血に和し身體を浸せば、いよく命に替へても世話すべき念慮は鞏固かたまりけり。

この音信ありて五六日後、晝より雨そぼふりて物寂しき夜なるに、珍らしく客なくて物足す。まだ宵ながら家内静まりて、何日になく絃聲いとねも響かず。廊下をばたくと睡氣なる上草履の音、時々近く或は霞み、樓外には素見すけんのそり節犬の鳴立に途切れ、按摩筋あな々と毛孔けあなに染み、物思ひなき身にも哀れなる夕とて、三河島の事を案出し、行末無覺束ゆくすえおぼつかなきに思惱れて、覺束なき其また先を想へば、弦左衛門が血双下どりてげて捕吏とらひを通る景況、獄屋に繋がれて瘦さらばへる姿、白洲に石を抱き吾血に坐したる體てしなご等、有もせぬ可思いままじき事の數々、心

に浮びて逐へどもく去す。手に觸るゝ煙管を把て、味はぬ煙草を續吸に三四服吸ひて、火鉢の縁にて丁ど打つ音に、座睡りたる離寝かむろの待宵まつよひふつと目覺し、我側なる壁をじつと視て立起り、茶棚なる湯呑を取來りて、鐵架てつかくの上の急須の茶を注ぎて、はいと人も居ぬ方に薦めければ、寝ぼけたるかど煙管にて肩を衝けば、きよろりと四邊あたひを顧盼し、宗様そうさまは何所へといふ。何ぞ宗様が。今まで大夫様の傍に居たまひたるにといふに、佐大夫ぞつとして惣身に霜を浴びたるごとく、思はず身を慄はし、えと宗様が何しに來たまはむや。佐山春日野は何所へ行きしぞ、迎ひに行けと出遣りて、妙見うつけんに燈明みづかしを供へ、專念せんねんに其人の無事を禱りぬ。

(三十一)

この片田舎に潜みしより、日毎の背汗あせに垢は溜まれど、肩までの湯に入ることなければ、溢るゝほどの朝湯に馴れし身體はむづがゆくして辛抱なるべきにあらず。少し遠けれど町まで行けば、江戸らしき風呂ありと聞くに彌肌いよこ膚痒いたくして堪へがたきまゝ、宗兵衛一日の夕暮其風呂に行けるに、なるほど江戸にて文身くりにからの背湯せなかゆ、膨の端唄はつたなど見聞くもの一々、久しき籠居の心を動かさずといふ事なし。町の景色を珍らしく覺えて行くに、ある門を過るに幼女こや彈ひくらむ、拙き豊後節の音への聞ゆるに不思議を止めて、在りし世の廓の榮華



も坐るに懐かしく、時刻も折からなれば其所は極めて賑はしかるべし、佐太夫はいかに暮すやらむと駄菓子店を過ぎければ家の子を思ひ出し、一袋の菓子を買ひて、笑顔を見るを樂みに少し足を早むるほどに、漸く町は外れて田畝路に懸りぬ。

九月十六夜の月清みて磨きたることし。風爽かに度りて今新結の髪に吹入り、湯あがりの温肌を拭へる餘は、來過し群立の梢に鳴るなり。踏分る小徑の八重葎には、月影を宿せる露のさらさらくと亂れたるが指頭に冷つき、蟲の千萬聲前後に音を争ふなど秋節の骨髓といふ處を我一人が物にして閑行のおもしろき。一直線に見通しの木立一簇叠れる中に、一點星の燈火の影を我宿と眺めて、一屈曲雜木山の下なる細道を傳ひ行けば、月の位置變りて今まで見ぬ遠景色を展べたる如し。酒一滴なしに之を見免す不風雅を我と無念がるばかり、世の氣樂なる人心になりて、幽憂も犯罪も忘れ果てて心意清しく進行くに、我履む下駄の音より外は爰に塵界の響なきに、後に當りて山の腹に落葉を拔足に履む音、其か！と身構へて怪しと思ふ方に瞳を定むれば物の影なし。怯心の迷と心を息めて二足三足行きしが、また物音するやうに聞えければ立留り、少時四邊を見廻はせど目に入るものなし、されど胸騒ぎ出して月も蟲も遠里の景色もはや目には入らずなり

て、直急ぎに足を早めて曲道の角、御用！と耳を貫ぬく聲に、骨散り肉飛ぶばかりなる不意の驚駭、衝れし如くたじくと二三尺身を退さり、體を構ふる間もなく、大石の轉けるがごとく凄じき地響して山より飛來る大勢、物をも言はず前後を圍みて、眼前に鐵砲の銃口を揃へ、身動きもせば只一射にせんする有様なり。宗兵衛左右を轉睨はして突立てば、捕吏の一人聲高く、御用なるぞ、抵抗ふか。火遁陰形の術なくしては此中を脱るべきやうなしとや、宗兵衛覺悟したりけむ、躬ら手を回はして繩を懸けたまへといへば、二人の捕吏銃を棄てて取附き難なく捕縛してけり。危き器具や所持せむと懷中を調べ、袂を探るに菓子袋出ければ、捕吏輩思ひも懸けずこれは何事と呆るゝに、宗兵衛は見てほろくと涙を流しぬ。この一滴に佐太夫は身を浮かすべし。

## (三十二)

佐太夫の座敷には藝者牽頭まじりに客なきまゝの雑談、姦ましく相罵ひて興する所に、佐山顔色を變へてあふたと闖入り、今太夫様へ南の番所から差紙がと喚けば、衆人聲を斂め、出懸し戯話も引籠み一座しらけてぞ見えける。佐太夫佐山を睨みて、噪がしや、遊女の身に連累はあり勝の事なり。其に物怖れして取亂す



やうなる魂にて、何屋の誰とは全盛を叫ばれ難し。其方も還からず太夫とならむものを、我爲す所を一々見  
 覺えて手本ともせよと言ひも果てざるに、樓主より人來りて樓下までと佐太夫を伴ひ行けば、残れる衆人は  
 興覺めながらつおとも立かね、一團になりて連累の次第を推量問答の末、佐山にその子細はと聞けど一  
 向知らぬことといふ。程なく佐太夫戻りければ、どうなされた始末と口を揃へて尋ねれば、一同もかねく  
 虫眞になりし宗兵衛様、謀叛の大望ありけるよしにて、此度其事露顯に及び、就縛になりけるより、馴染  
 なれば此身にも嫌疑懸りての御詮議なり。明日は南の番所に出づべければ佐山春日野その用意せよと事も無  
 氣にいへば、あるまじき不敵の言葉に皆呆れて聲も立てざりしが、一人の牽頭忠義顔に進み出で、太夫様  
 とも覺え難きお言葉かな。火坑海底より人の怖る番所へ、好むで引出されうとはいかなる御分別違ひ  
 ぞや、一度其所へ行く時は生涯其不淨に穢る事とて、誰しも行かぬ算段する所なるを、縁起を祝ふ商賣柄  
 にて、鶴龜々々金輪奈落の底まで行くまじき場所なり。其も政府の御威光にて理が非でも出ねば置かれぬと  
 いふならばいざ知らず、眞當人ならざる連累なれば、探偵吏に一兩擱ませなば一も二もなく唯々で埒の  
 明くものを、御自身出たまふとなりては、第一に不淨の氣を受けて御全盛の光が錆び、第二にはいらざる事

に莫大の御散財、往來の入費、借衣裳から總雜用とつと算用りて三十兩、これより内にてはむづかし。御粹  
 興にも節はあるもの、このお催しはお廢止になされまし。大勢の料見はと回顧れば、其言葉に無理なし、此處  
 は我等の言葉に従ひて思留まりたまへ。お聞の通り一同もあのやうに申せば、是非にお出掛は御無用になさ  
 れませといへば、佐太夫首を掉て、皆が深切を無にするにはあらねど、思ふ子細もあれば、此心を  
 唯この上の頼みは、繁昌中を氣毒なれど、皆打揃うて美しく我番所への送迎をして下され。身の  
 不淨は其景氣にて拂はるべし。志は嬉しく受けましたれど言葉にはとても従はじといふ。一旦かうと言出し  
 たまひては、引かぬ氣性の太夫様なれば、此上の御意見は無益として、さらば不淨除の隨行を華美にするが  
 せめてもの寸志と一同は坐を立ちけり。

(三十三)

さしては修飾はぬ風俗にて駕籠に乗り、休憩所は常盤橋外の柳屋なれば其所にて衣裳を更め、番所まで八  
 文字の道中、席の内を行くに異なる事なし。褌衣より帯、袴襦、履物に至るまで、何にもあれ自身の物を用ひ  
 ず、一切これを借て濟ますは、番所の不淨氣を帯びて歸へるを思めばなり。簪は紋付の平打見る眼には立派



なれど、廓の制規にては琴柱の簪を上格とすれど、素人を威さむにはと、此日は紋付の平打を光明のごとく挿簪たり。この一式の貸商は淺草三軒町にありて、品を借入るゝ時には附人柳屋までも出張り、此方にて衣裳明次第其を身ぎて歸ること、當世の狂言の衣裳屋が素人に貸がごとし。衣裳一式の借賃最上等の品にて金六兩餘、頭上の飾金二兩二分より三兩までなり。茶屋にて時刻の來るを待ち、やがて打出でむとする頃には遊客の連、累にて佐太夫南の番所へ召喚さるゝといふ事、江戸中に沙汰ひろまりければ、傾城の道中といふを見ぬもの、噂高き佐太夫の姿を見むといふもの、麗はしき夜の花を晝見て笑はばやといふもの、十人十色の思ひくにて、四方より集れる老弱男女數を知らず。柳屋の門より番所際まで二重三重に列なりて見物す。待設けたるは此處ぞと、佐太夫悠然として立出で、据腰強く身を反らせ、朋黃縷子に金銀の放駒の縫模様せる衾襦の裾を見事に誂き、きつと前向を凝視て瞬たさもせず、威を見せて自若として行く様には、十分太夫の見識備りて見えけり。見物の中に、商人にまれ武士にまれ、衣裝賤しからざるもの二人三人に、佐太夫道中の間に心ありげなる「流盼」をやれば、其夜客となりて來るか、少し日を置きて來るか、十人の内七人まではこの「一睨」に魂を蕩さずといふものなく、取止めて利潤になる客もあれば、この一日の入費

三十兩は直に埋りて、其上わが顔は世間にいよく賣るゝ便宜となるに、多數の女郎目前の散財と度胸の少量とに身を縮め、番所に出ることを厭ふはいかなる愚物と佐太夫心に嘲りぬ。前路に塞がる人數を搦分け搦分け、至短の道ながら時刻どり、身も疲れて大汗を流してやうく番所に着けば、吟味役は池田播磨守、奥まりたる上座に威儀を正して席に即ける左右には、下役の面々おそろしげなる顔して居列び、白洲には貴道具を眼前に飾立て、兩側には人鬼とも見ゆる男四五人、袴の股立高く鐵造の毛脛を押し曲けて控へたり。剛氣の佐太夫もはじめの場所なれば、怯ぢて胸騒ぐを此所に弱身を見せてはと押し鎮め、白洲に座を取らむとして、胸より長やかに結下げたる蝦夷錦の帶の端を、右手に丁と敲きて片膝に敷き、右膝を反らせ、小役人には目も懸ず、播磨守の顔を流盼りて會釋も挨拶もせざりき。吟味の次第は弦左衛門と關繫の紛糾たる子細にはあらで、唯金子を貰ひたらむ、其は若干なるや、いかなる節に貰ひたるやなどの事なれば、佐太夫思ひけるは、弦左衛門我に難義の罹らむことを氣遣ひ、實事を白状せずして、此身とは尋常の客と女郎の間のやうにいひなしたるならむを、我より罪を求めて何をか白はむ。金錢などに於ても、貰ひし事ありといはば面倒なるべしと、何を訊問られても知らぬ覺えぬとばかりに多言せざれば、無罪放免。



## (三十四)

霜月二十九日、但馬屋宗兵衛事田島左衛門は、無殘、無殘、無殘小塚原の霜と消えにき。力には剛くとも情には弱しと、躬らも云へりし佐太夫は、之を聞くと等しく槍刺骨を刺し、悲嘆、胸を撈れば、咲誇りし花忽ち凋れて色香を失ふこと限なし。晝は人目を憚り、想に堪へかねての未練なる舉動を慎めど、夜は氣に染まぬ客と添臥の夢驚き易く、覺れば懐舊の落涙やみがたなきに幾度か枕紙を仕替へ、晝忍ぶ悲嘆を此時に放恣にして亡人を傷み、我身を悲み、世を侘び、天を怨み、百愁胸に沸騰りて一愁として慰むべきよしなきまゝ、ぢれて夜衣の衿に噛みつき、身を悶へて枕を投げ、果は聲を立て啼くに客の安眠を覺まし、何事と問はれて、羞かしや語るべきにあらねど、晝朋輩と口論して我に理あるものを、偏頗なる榎主口を添へて我を非理に陥したるが、一生の口惜さどさらぬ事に言紛らせば、客は子細を知らねば、可笑しくもどやかくと慰め、何事も勤と辛抱したまへといふを會機に涙を拭ひ、あとは恨もなき千話をしかくすること、商賣とて草葉の陰なる人も見免るしたまふべけれど、一七日の中をもこの精進がならぬといふは、よくく音生に出來たるものよと彌果敢なし。

此までは兎毛ばかりもなかりし事ながら、此日頃の賣色の可厭さ。人に物言ふも憂き身にして、日毎夜毎の客の數、この一々の機嫌を外さじと勉めむは、大石を賣うて波に浮ばむとするにも似たり。されどこの一時の悲嘆に行末の全盛を替へじと、思ひは思へど身は思ひのまゝには動かずして、數の客なれば随分不動もありけれど、宗兵衛の事より佐太夫は氣丈よ俠氣よとの名立ち、其に牽かれて來る客も多ければ、さしてはこの舉動を尤めざれば、新造鑓手が心遣ひ程の不察昌はなかりき。凋れたる花の流石に散りもやらで二七日まで過ぎぬ。人目なき所に白木の位牌を飾り、床間の花を摘みては手向るなど、飯事のやうなる佛いぢりに暮らして十六日目の夕暮、店口に佐太夫を尋ねて見えしは、年齢四十恰好の上品なる武家粧の女房鼠小紋の下着に蒲色縮緬の小袖を重ね、紺のころぶくの帯して、手を引ける十二三の男子の兄弟には、一樣に黒の紋付の羽織、仙臺平の袴、大小差させて、伴には下郎一人を連れたり。何處如何なる御方と尋ねさせけるに、直直にお目に懸らでは名乗り難しといふ。心當りはなきに怪しき事と思ひながら、名指にて來りしからは我に用ある女ならむ。まづ此方へと申せと新造を遣はしけるに、案内して座敷に伴ひしに、その二人の男子の見れば、心の迷ひか宗兵衛の幼稚を見るが如し。不思議にもあらず、希有にもあらず、いさゝかの思案に



も及ばず合點したり。用事あらば喚ばんほどに、一同餘所へ行て暫時遊べど座敷のものを遠ざけ、座を下りて、この身が佐太夫と挨拶すれば、女房も禮を返して、餘義なき用事ゆゑに卒爾の推參、我事は田島弦左衛門が女房、これは悴と紹介はすれば、その口上に連れて二人の兒は、しほらしくも一様に兩手を衝きて禮を施しぬ。

## (三十五)

佐太夫二人の兒に擦寄り、お噂にはかねぐ聞きつるがお見上げ申すは今が始めて。行末頼もしく賢こげに生長たまひけるよ。この姉は佐太夫とて父様のお侍、姉なれば、遠慮なう今宵は我儘をおほせられませ。遠きところをようこそ來たまひたれ、と兄弟の面貌を交、代視て眼を數瞬き、遠き所を來たまひつる成績もなう。お父様は……何處におはしますや御存じかと弟の背を撫づれば、弦次郎は見も馴れぬ佐太夫が衾襦袢の目眩に呆れ、扇子の尾を叩へながらじろく流盼て返詞なれば、佐太夫重ねて、弦次郎様には御存じなきやと問ふに顔を上げ、父様お果てなされし故母様とこの江戸に参りたりとの言葉に、母親は顔を背けぬ。承はればお二方ともに御幼少の頃、お父様お國元を出たまひしとの事なるが、お兄様はお父様のお顔を

少しは覚えさせたまふかといへば、弦介頭を掉て、少しも記憶なし。さればこそお父様も焦れさせたまひて今は道路にて遭ふとも識らぬばかりに生長ちたらむに、一目なりとも見たき者と何かにつけて言出したまひけるが、如意ならぬ世のならひとて、月夜の影を逐ふ如く、お父様江戸におはす時にはお國に在りて、お國を出たまへば江戸におはさず、此上は逐ふことかなはぬ冥土の旅路。つひ此間まで、これ此疊の上にてお父様御酒を召上らば、何時も倚懸りたまひしはこの床柱……おそれくと茶棚より大湯呑を取出し、茶をなみく注ぎて二人の前に置き、菓子紙に配分け、此湯呑の御紋は？といへば、二人とも聲を揃へて、やア！母様家の御紋と引合うて茶を翻せば、佐太夫中に入りて、争ひたまはずとも弦介様は兄様なれば了簡して弦次郎様よりまづ召上れ。これはお父様のお湯呑なれば、なか好くお二人して召上らば、お父様も御満足のお歡喜といふ間に、弦次郎飲みてお兄様と差出せば、弦介受取りて、口を接する前に推戴くを見るより、母親も佐太夫も齒を嚙緊め、忍ぶに餘る涙を吾兒の手前愧かしと鼻拭むに紛らして、母親膝を進め、佐太夫殿はるく此方を尋ねました。次第は如此そ、聞てたもれ、所夫弦左衛門一大事の企圖ありしとの事も、それゆへに世を忍ぶ命は風前の燈火より、安からぬ身上との事はなほ知るによしなく、只々この江戸に無事に



## 伽羅枕

勤められて、お上のお覺愈愛たき事とのみ想へば、我等家内一日も早く呼迎へられて、無恙再會を此上の慾にあらゆる神佛も祈盡し、今日は明日はと音信を待ちに待つ年月積りにけるに、先月二十六日は朝より不吉なる事のみ續き、絶間なく胸騒ぎて物に驚けることし。遠國に人を待つ身は、さらぬだに物事を卜占にして我と心を驚かすものなれば、凶事あらむと其ばかりの苦に此一日を暮して、夜の目はなほ合はず、近曙にとるどろとまどろむ枕頭に、懐かしや弦左衛門殿の姿ありくと願はれ、一大事を企圖の段々より、此席のしかじかの樓に佐太夫といへる遊女ありて、馴染薄すきに義心強く、身に替へて我を世話してくれたれど、非理の志は貫き難く、何月何日終に捕はれて、明日はいよく死罪と事極まりたれば、名残を惜まむとて来りしなり。二人の兒は大事にかけよ、其方が身は草葉の陰より護らむ。爰に頼むべきは、われ亡後は佐太夫並に其方の生靈わが亡靈との三ツを合はせ、三魂神社として祀りくれよ。思ふ事あれば佐太夫には一生所天を持つまじきやう傳へよ。かへすくも三魂神社の事は佐太夫とも相談してわが本願を遂げさせよ。もし此言葉に背きなば七生までの遺恨たるべし、とするくと進寄て二人の兒の腰顔を覗き、涙を落せしかと思へば、二人一時にわつと聲を立てるに、我も夢ならば覺めし心地して、起上りて燈火に火を攝立つるを見て、この

子供等も目を開き今父様がといふ。其日は朝より不思議ありて氣懸りすくめの折から、まさくとせし夢に何の疑ひもなく旅立を急ぎ、今日着きて直様此方を探ねたりしも、吉原に龜和泉といへる樓のまさしくありとも知らず、また其樓に佐太夫といへる女のありとも知らず、只夢知らせを心當に來て見れば、一々指す如き不思議に身毛も彌立つばかりなり。かほどの執念を盡らさずは、成佛の障礙ともならむほどに、形ばかりなりとも三魂神社といふを建てて浮ばせたく、それゆゑの御相談にわざと此まで出向きましたと語れば、望む所と佐太夫も淺からず歎び、其夜は弦左衛門が生前の物語に更して三人を還しけるが、例のくるしき内證なれば是は僅少なれど佐太夫の寸志と、田島が遺族の前に出すべきほどの金子なければ、襦袢一枚引剥ぎ、手まはりの道具を添へ、翌日十五兩を調へてその旅宿まで届け、萬事を指圖して日ならず千住のさる法華寺に三魂神社を建てけるより、母子は最早歸國と急ぎてせわしき袂別をしけるが、其より今に四十餘年生死を知らず音沙汰なし。

## (三十六)

この玉手千人の枕に接れて、夜毎の繁昌に更る客の數々、孰れか魂の位置動きて形までも崩れざるはなけれ

## 伽羅枕



ば、悉本心の亂るる果は、無造作に身を滅し命を捨て、仇なる戀に犬死の奴多し。

田島並左衛門全盛連なりし頃、土佐の「今山三郎」と遊女の口々に唱はれ、晝行けば家々の格子内に時ならぬ花の姿ならびて、その前渡を見物せざるものなく、一度見ては氣を遠くして逢はむに心を惜まざるなく、此廓開闢以來の罪作土佐の藩士に小鈴木半之丞とて二十三歳の美男子あり。

當世と人氣相違の往時は、「しぶさき」、「苦味ばしりたる」、「凜々しき」などは女人の採用よろしからずして、おほくは人形を好きしものなり。それに伴れて色に遊ぶ男子も媚嫵かしき扮装を専一として、一目に濡事師と見ゆべく勉めたりとかや。半之丞が鼠鳴して悦ばれし風俗は、黄八丈に五紋の黒羽二重を重ね、白博多の帯に絞鞘の大小おとし佩、額口より一寸巾に月代を剃上げ、厚髪の下垂懸、大束の鬘に薄紫の組糸を巻懸けて蝶々に結び、白天鵝絨緒の雪駄を鳴らして、欄の上に組手しながらゆらりくと大門を入來る姿は、役者が花道を出でたる風情ありて、按摩の外に見ざるものなし。

一たび逢ふ女人は心より底より泥みて懐に忘れず、昔信人橋矢のごとくまたくの御見をど、今宵顔見ずば死ぬやうに哀はれをいひ送れど、半之丞それらに眼も懸けず、われからも少しは凝りて足近きは、玉屋の

白露、大文字の花夕この二人は擇りに擇りたる廓の名花にして、情仕懸の手管は勝負なき名譽上手の一對なれど、我よりする戀は七分の弱身ありて、部屋住の青二才に手もなく緩なされ、孰れも心火に身を焦して賣色を餘所に、この男一人の奪合ひに浮身を變しぬ。

此汰沙一面に陰れなければ、その今山三郎といふはいかほど絶世の優男なれば、あれほどの傾城二人を手玉に取る事か、と茶屋張の夕店前を過行く半之丞を見て微笑しければ、流星の太夫様も迷ひたまひけるよ、と茶屋の女房新造等左右より弄懸れば、佐太夫領き、まことに世に珍らしき美男なり。さりながら我賣色をして十餘年、男子に迷ふといふ事皆て覺なく、嘘にも情夫といふものなければ、百人の客を百人一様に鹿略なく勤むること、これを遊女の節操とやいふべき。生娘ならば知らず太夫ともあるべき身にして、人の所聞も羞かしく初心らしき事ならずや、二人揃うて顔に惚れ姿に迷ふとは。われ容姿は白露殿花夕殿に及ばむ事遠けれど、あれしきの若衆あがりを手に入れむはいと易き事をと晒へば、茶屋の女房利かぬ氣の女とて、佐太夫の廣言を其儘に措かせず、太夫様なればともあるべき事なり。私取持ちまして今山三様を太夫様方までさし上げますほどに、美事引留め引身さて土俵外へ投出したまふや。くとい事と答へてかの談話は其まゝに消



えけるが、二日経ちて小鈴木牛之丞佐太夫を指名にて登樓りけるに、これほど思懸なき折から、かの女房よりお約束通り今山三様を上げたれば、其方様にも暫文空言はない道理、今は一刻も早くお手際が見たしどの手紙送かけて来りぬ。

## (三十七)

小鈴木牛之丞美貌に生れたるは其身の徳か、行く所として女人の中に持離され、色飯鬼若年のおもしろ味之に上越すものなく、徳過ぎて身の損となり、放埒無頼に身を持崩し、父親亡せて女親一人と侮り、幾十度の異見に改心の色なく、亂行日々に募れる趣薄々上役の耳を駭かし、または家中の譏り草ともなりけり。亡父が貯はへたる金子も九分擲出しけるより、母親僅少の殘金を藏して見せざれば、衣類大小手に當るにまかせて持出し、揚句は百方を借盡くす不行蹟に、母親はあるにもあられず日夜の憂慮に身を裂なまれ、いちじるしく毛髮に霜を置添へ、顔は皺に刻まれ、頬は骨に貫かれ、乾く間なき涙に眼際紅爛の淺ましき姿も半之丞家に尻の落着く時なければ能も見ざるかして、露ばかりも之を苦にする氣色見えず、たま／＼戻るかと思れば微醉の、醒るかと思れば影なし。まことに其の心中には主なく、母なく、武士なく、家なく、我も

なければ世間もなく、只此一箇に萬事を見替へたる、佐太夫の面影のみ濃く染附きて裏面に透り、義理の水も分別の汁もこれを洗去るの驗なし。三日三夜續けて歸らぬ夜の女親の物思ひ、人間我子のごとく性根亂れては、再び眞人間に回復り難し。色狂ひの資本を仕送りの果、此家の壁落ち柱傾かむは、憎けれと心は可愛き子ゆゑなれば厭ふべきにもあらねど、牛之丞が不埒かく日増に劇しくては、主君のお咎を急ぐに等しく、家督の不行蹟なれば小鈴木の家名爰に斷絶せむこと、實子の科にあれば我とても罪は同じく、御先祖への謝罪立ねば、未來にて所天に合さむ顔なし。我子なれど此家の大敵、口を酔くし、舌を爛らし、落涙には血をまぜて、幾度の異見も聞ぬこそ是非なれど、女人なれど年老たれど武家氣質の義に強く、三代忠實の家臣と頼む藤藏を呼び寄、つぶさに腹中を語りて、とても生かし置くべき牛之丞ならねば、明夜は闇を幸ひ吉原へ行きて人無き所に誘出し、斬て捨てよと聲を絞れば、藤藏あつとばかり魂消て目瞬もせず其顔を視入れば、半之丞の母ははらくと涙を流し、其方が聞くだに左程の驚駭なれば、親の身の勝断は推せよかし。天にも地にも唯一粒の愛兒なれど、この家には替難く、義理には人情を曲ねばならぬ世間なり、子を殺さむは無慈悲に似たれど家の益なり、臣として主を討たむは不忠に似たる大忠義なり。藤藏きつと頼みましたぞといへ



ば、身を退りて壁に額をすり付け、お家のお盆たまを思おもうて勇剛けなげなる御分別はさる事ながら、餘りと申せば御無慈悲過とぎて若旦那様がお傷はしや。今のお年輩としなうにして御衛身には、誰しも有内の廊通ひ、人の娘をそこのかすか、夫ある女を汚すかなどならば、不埒ふちとも亂行とも申すべけれど、若き時代をりから一時の色遊いそあそびは、此方様のお口から斬るの殺すのと、さまでに御折檻の罪にもあらねば、これまで御勘辨の次手に今一度御勘辨あらば、藤藏命に替かわして諫言御申せし上、なほもお行狀復みもちなほらさば異議なくお言葉に従ふべければ、此度はかりは平に平にと、我身の罪を詫わぶることく眞實面色に顯はれぬ。母親いかな聴かず、今に始めぬ其方が主思ひのその申分は忝かたじけなきぞ。我とても一人の子を何好みて殺さんや、只この家が大事なればなり。勘辨も異見も爲飽きたれば、一太刀こそ此上せむすべの手段なれ。半之丞は早我子と思はぬからは、其方も構へて主従とな思ひそ。小鈴木家の大敵を討てくれよと頼むに、其方は聞ぬか、女人と侮りて主命を背くか、斬れ、斬れ、見事に斬て此家の再興の忠臣になりやれと、長持の中より刀箱を取出し、蓋を開きて藤藏忘ればすまじと差附くるを、おづく面を上げて見れば、半之進殿の佩料さしれつはと、家中の腕立うでたてしや者に唾を飲ませし無銘備前の業物なり。藤藏はツと頭を下げ、少時は不覺の涙に暮れけるに、主婦は曇れる聲を勵まし、この刀にて斬捨てな

ば、半之進殿手打にしたまふに同じく、其方が又先に主人なし。わづかの恩愛に絆はたされて仕損じなば、小鈴木の家は其方が潰すに當るぞ、この刀にも鈍刀なまくらの名を貰はずぞ。さ、さ、早行けく、行かぬか。はッ、行かぬか、未練まゐ者

## (三十八)

白露、花夕の手管に未熟なりけるか、半之丞佐大夫に懸りてより弗と餘所の垣を覗かず、唯この色香に浮れければ、廊くろわらし暴の今山三が行衛はと、誰眼を配らぬものなき男子の、ちか頃佐大夫へ通話との沙汰は忽ち弘まり、客も遊女も鳴らせる同志、これこそ面白とりくみ一對と見物にして、昨夜の口説くせつ今朝あさなほりの和合——二人の舉動なるほど今山三を我物にはしたれど、萬更木佛を抱く心持はせず、自分からも陥はまりて待不來まちほかされの明る夜は、心からの悋氣に山様當惑せし始末を確に見たりとの言葉より浮名立ちて、佐大夫なより既弄るゝを憂うれさ事に思へど、苦心はかりごとの計略は此所ぞと、唯ただなるまゝになりて顔を擧めねば、半之丞いよく魂を蕩かして家の不首尾を重ねぬ。



一夜遊客立込みて、佐太夫身體ニツありても足らざる多忙中を潜り、一寸部屋に来て見れば、半之丞一人殘されて寂しげなり。とても今宵はゆるりと話す間もなければ、明日一日は歸さぬお身なれば、たまには、巢守も良薬なり。待身の可愁をよくよく味ひたまひて、此後我にもかうした憂目は見せたまふな。夜更けなばまた参らむほどに、それまで宵内其所等家外の景氣を、一周見物して歸られよ。此所に一人おきては大事の男を鼠に引かれむも氣遣はしやといへば、半之丞笑ひながら起立り、衣桁に懸けたる我小袖を指さし、其れをと帯を解けば、佐太夫單笥より仕立おろしの我部屋衣を出して、其れを着たまはば故郷遠に戀しくなりたまひて、大門を脱げばなしに五六日迷子にならむは必定なり。其手はくくと、周圍は緋山藪に、雪折笹の飛模様ある黒縮緬の胴拔を被せ、紫鹿子の上帯を前結にして、此上は何所なりと勝手な所へ失せたまへと引出されて、其姿往來に氣耻かしながら、心中は此男が佐太夫の命のぬし、虚誕ならぬ看板は御覽の風俗と鼻高く、廊中隈なく散歩きして、二三十人はたしかに刀物なしに殺生せし氣は、揚々として馴染の茶屋に一眼と飛入れば、家内異口同音に、似合ひました濡事の開山と喚くを、うるさといふ顔に聞流し、太夫に逐出されて少時遠調の身の景氣直しと、絃音に笑聲を交ておもしろき酒事に夜を更しぬれば、もはや太

夫の待頃と、歸際の一言に、散々打たれ抓られて此家を出でしが、酔を吹く風は末社どもの追従より、時にとりて心を浮かせ、ふらくと大門を出づれば、闇夜ながら見知れる田圃の景色は薄隈に現れ、土手を急ぐ駕籠の火影見えつ滅えつ、今まで亂騒ぎに逆上せて重かりし頭に、風吹抜きて中なる塵芥を凌ふごとく覺ゆる心快さに、また一足と進み二足と進み、土手の半まで來懸る後面より、御免と聲を懸けて、見向せもせず、左の肩頭より、ぱらりブんと浴びせし一太刀に、狼籍と叫ぶ力もなくよろめく所を、また一太刀さくりと腰車を薙がれ、半之丞仰天に仆れ、雙拳を握りて呼吸は絶えけり。曲者は留を刺して刀の血汐を拭ひ、大地に跪つて幾度か死骸を拜し、不忠不義の謝罪は即刻あの世にてと、佛名唱へながら立去りけり。

夜明近きに半之丞戻らざるを佐太夫氣遣ひて、雛髪を茶屋に走らせ、もし此方にもやと尋ねさせれば、八時頃歸りたまひしがとの返事に眉を蹙め、此上は手配して尋ねむと騒立つ折しも、往來に人足繁く、土手の人殺といふ聲に膽を冷し、男を遣はして見せけるに、無残や半之丞腰と肩と二ヶ所の深手に仆れるを、早歸の武士などの所業とかいひ傳ふるは、この男あるゆゑに佐太夫我を振りたり、我を突出したりとさらぬ



伽羅枕

遺憾を被せて、手足の指を一つ残さず根元より断落し、刺へ面部に土足の痕あり、腹を突壞れる疵あり。目もあてられぬ弄殺は大勢の悪戯なるべし。二太刀に斬殺せしは家臣の藤藏、謝罪なして其曉一通を遣し、わが部屋にて腹掻切つて果てけるよし、數日を経て噂ありけるが、淺ましきが上に淺ましきは牛之丞なり。明夜より一時廓に唱ひし歌は、容姿よいとて謙退ふるな土佐の小鈴木の末を見よ。  
 (三十九)

よしや敵百人の怨恨は結ぶとも、味方一人の反眼には替難し。世間は我一人對手一人ならざれば、味方同勢の心を攪らすしては、十百萬の大軍に當るべきにあらず。就中遊女の身に其廓の牽頭は獅子身中の蟲のごとく、生死は其口頭一つに在りて之を怖れざるものなし。遊客の身體の縦横に操りまはして、我思ふ遊女へ持遊ぶこと人形を舞すより易すければ、大事なる客一人二人は棄てても、葉ぶりよき牽頭の心を傷ねざるを其身繁昌の一つの秘傳とするなり。

高村支養といへば名に高き有徳の茶坊主、多財に任せての散財、餘所に見る人の心を冷つかせて、此頃佐太夫が隨一の客は是なり。藤巴といへる引手茶屋の二階に藝者牽頭打洗せ、支養朋輩の茶坊主と同勢六七

伽羅枕

人花札の賭博しけるに、連敗の牽頭丹孝紙入を振るひて、損料屋の書き出し二三本ばらりと落し、いよいよ一坐の物笑になりて無念の血眼、今一ト勝負に會稽山の恥辱をまくりて力めど、軍用なき身は手出もならず、默然として二三番を見過せしが、其興味と失敗の遺憾に堪がたき容體なりしが、つと起て下へ行き、また一二番濟むまでも來らざれば、瘦我慢の丹孝將軍旗を捲て問道から一騎落かど、大笑の眞唯中に猛然と現はれ、思知れやと血相變て懸りしが、少時の勝負に又負の綱と離されて、折角切來し鬼の腕をまた攫はれぬ。

急の御用あれば一寸の御歸宅と宅よりの人に、支養駕籠よ支度と騒ぎ、丹孝腰の物をといはれ、南無三！運の盡と驚きしが、太夫様にお預け申して置きましたと、當座遁の口上圖に當りて、先を急ぐ支養は唯々ばかり領きて茶屋を出ければ、丹孝胸を撫で、壽命三年ばかりも短めたり。かうしては居られぬ急場と、馳出でむとする顔色の非常を怪しみ、何事を仕出來したるぞと衆の尋ぬるにも應へず、一散に龜和泉へ驅込み、佐太夫の座敷に飛入りて、丹孝が一世の浮沈一代の難儀、お慈悲に好管略貸して當座を濟くはせたまへと兩手を合はせ、疊に領伏し、お慈悲くと泣聲になれば、佐太夫その思道れる様子に驚き、つひになぞ何



事ぞ。申すも面目なき次第なれど、額を叩き、實は只今藤巴にて高村様御一座にわれ等交り、花札を致せし所いかなる悪日か一番の勝もなく、見る間に輕少なる持合を奇麗に吸取られ、其儘に思斷りて手を引かれぬが勝負事の弊とて、口惜紛れにと小聲になり、高村様お預の例の黄金製の腰物を質屋に投籠み、金十五兩借りて其をも悉皆拂きたり。素よりさかど勝つ心算なればこそ、後ともいはれぬ旦那のお品を曲げたれ、またも貢と知らば何程無念にても口惜くても、かゝる前見えすはすまじかりしを。旦那お宅よりお見ええて一寸御歸宅といふ際に、丹孝腰の物とおほせられし時は、早腰も抜けるばかり驚きたれど、いふにいはいれぬ始末なれば一寸遁れに、此方様がお預りのやうに申したれば、今にも旦那お戻りなされなば宜様にお周旋下されて、丹孝が扶持離れの大厄を逃れむこと、太夫様のお慈悲ばかりを身の依頼と、凋れ返りての言葉に、佐太夫牽頭を流盼に見やり、以後は随分慎みて勝負事は廢めたまへ。客の對手とならば何も業務餘儀なけれど、調子に乗りて身錢を絞り、難儀を思はぬなどは未熟のことなりと、好加減に懲りて逐歸しぬ。即夜支養來りて脇差の事をいひ出しければ、羞かしながら當座の無錢に質入して十五兩調へたり、堪忍したまへといへば、支養苦笑ひして然るさもしき事せずとも、これく入用なりと直に我に語らば、それしきは

何時にても用立べきものを、是にて取戻せと小判を掴み出せば、席に居合せし丹孝飛附いて、拙者お使者にと一目散に驅出しけり、丹孝此禮どの心にて大身三人まで引いて来て、佐太夫が身の膏血の客としけるどかや。

## (四十)

阿部伊勢守家來にて高坂時雄といへる兎唇の武人、黄金は懷中に喰るほど持ちながら、堤の切れたる上唇の空隙より前齒三枚、露出せる顔の喰附くべく見ゆれば、何所に行くも可厭がられて、一度逢ひしもの多は二度目を断り、御威光の物が欲しさに三度四度を忍ぶものは、身内の梅毒に惱む如く、嬉しからぬ顔をしながらも介抱をするなり。

如此ても此道は面白きか、好色の念彌逞ましく、此所彼所を狂轉りて佐太夫に打當りけるに、例の氣性の女子なれば、手一盃に浮せて上せて迷はせ、散々に陥められて筋骨ぐにやくとなり、性根もなく通ひければ、此までに大分減りし有金全く盡き、衣類持物に贅澤を極めたりし男が、いかにも鹿末なる大小佩して來るほどになりぬ。最早長くはあらざるよと見る間に、約束の夜を來ざりければ、まことに油盡きて車は止りたり。當



人が勝手に迷ひて勝手に破滅する事ゆゑ、もとより此方の知る事ならねど、一時大盡と仰がれし威勢は生神の如くにして、編笠紙衣被ぬばかりの風俗になりても、煩惱色慾は今を愧ぢず、往時の意にて通ひ來る客の、末路を見るほど可厭なるはなし。兎辱殿殊勝にもあれほどの緊思を斷ちける歟、武士！と昨日話せし今宵またく來りぬ。

新造ども色香なき挨拶して、小陰に入れば顔を繋め、居間の隅に箒を立て、呼べば生返詞して尻重げに起つなど、一々氣に障る事のみ。時雄之れを見ての所感、十人切百人切の無法も、氣逸者は随分しかねまじき理なれど、我に於てはかの本尊の太夫此身を不便がりて、眞實を盡すこと往時一倍なれば、其に免じて腹も立たねど、かほどに迷はでは武士やめて乞食にはなり難し。

座敷にて酒事の間は浮かぬとも見えざりしが、閨房に入るより、太き吐息を泄しては佐太夫の顔をじつと凝視め、幾度も同じ舉動を繰返せば、佐太夫怪みて、心得難き御容子かな、深き物思に惱ませたまふと見えたり。推秘したまふは水臭し、兼ての御言葉に詐欺なくば、俱々に苦勞して此方様ゆる瘦せて弄られなば、此身の本望と持たすれば、時雄ぞくく寄添ひ、我から語るまでもなく、かく姿の淺ましく成果てたるを

見ても様子は知らるべし。家中にては餘裕ありといはれし高坂の内證も、從來の我念入の放蕩に大穴放下て、なほ義理悪き借財の返済覺束なきに、之には何より面皮を缺きて武士道の塵芥となるなり。さりとして往時に還る便宜なき身は、死なむより外なし。いひ交せし言葉が反古ならずは頼むといひながら、蒲團の下より袴に持参したる白鞘の九寸五分を取出し、俱死にと眼を据ゑて佐太夫を覗めば、大方かうした事と覺悟したりし女は、更らに動ずる色を見せず。身をなほ擦寄せ、其お願望はいと易けれど、死なむ事は何時にても死なるべし。散財過から思逼りて情死とは覺さずや。近頃意氣地なき舉動と、大事の命を二個まで亡くしながら、死後の笑れ草とならむを、餘りに無念とは覺さずや。尙又佐太夫をいかに不束なる女人と、見下げたまひての今の御言かは知らねど、借財ゆゑに死たまふお身の隨行は不足なり。添ふに添はれず、離るに離られず、扱は未來の夫婦を頼みに心中との事ならば、喜びても果つべし、願ふても死ぬべし。其にしてもいよく此世にて添はれぬ結極まで往きても見ず、誰が何といふゆゑ死たや、何が何したゆゑ死にまじよと。思ひたまへ、人間一人につき命は一箇宛の規定ぞかし。

## (四十一)



さりながらいかにしても、此世は面白からず、此佐大夫をも可厭とあらば是非なき事なれど、若乃人目な  
 き里に身を忍ばし、しだらなき水仕業も我ゆゑかと、辛抱したまふほどのお心あらば、我も其氣にて此樓を  
 出奔すべし、出奔しても此方様と添ふべし。可厭か、お可厭か、死たまふか、無分別など白鞘を強奪て、可愛人  
 を既の事と疊に打附け、時雄の膝の上に身を載懸て、制規殿しき中を脱出して添はむといふ此眞實が知  
 れぬか、届かぬかと作聲をして怨ずれば、望外の喜悅に時雄は心を跳らせ、佐大夫を抱めながら、神以て  
 此方輩の女房ともなり給はむとならば、百萬年も長命したくこそあれ、何を思出に死を急ぐべきや。  
 さらば死なむ事は思止まり、明夜誰にても入魂の人に萬事を含ませ、初會にして我方へ遣はしたまはば、  
 其人に連れられて遁出すべし。さる事を頼みたまふ男ありやといへば、時雄疑念の充てる眼色にて佐大夫を流  
 盼り、甘々と此場を欺き、一盃陥むとの計略ならむも知れず、まづ試験にと捨たる白鞘を取上げ、變易さ  
 女子心、明日となりていかなる料見にならむも測られねば、さる憂慮なしに、今宵死出三途の同伴頼む  
 と、脱放ちて胸部に閃かせば、佐大夫其手に縛り、かほどに申すも御疑念は露れぬと見えまじ。申すは  
 可笑けれど佐大夫とて、妻に妾といふ客の三人四人、なきにもあらぬ身にして此樓を脱出し、いはん今は

貧に魅入れたまひし此方様と女夫になりて、苦勞難義に寝れむことを思はば、なか／＼死るは可恐らず。我身  
 は兎も角も此方様を思へばこそ、生延びて添はむとも申せ、其れがお氣に入らずして、死ぬ——死なむとなら  
 ばお言葉にまかすべし。さりながら何日は齒を染めまして素人名を呼ばれ、手づから調茶して御膳  
 を上げて見たらばと、思ひに思ひし念願も口惜や水泡となる事かと、面を掩うてさめくと泣けば、抜刀を  
 鞘に飲めて、其心を見るからは何とて殺さるべき。明夜は心利きたる男を遣さむほどに、必ず用意して待て  
 居よ、泣くな泣くな、飽くまでのろくなりて女人の背を撫づれば、佐大夫なほ盛聲にて、眞實お心を願へし  
 たまひ、女房に持ちて行末長くいとしがつてたまはるか。嬉しや、一念といふものは巖をも透すといへり。  
 前祝に一盃過したまへ、と躬ら膳拵えして俯めければ、時雄は今宵を極樂世界と、恐悅に而想の崩るるを  
 覺えず、喰酔ひて朝まで一息に就眠て、臨歸に萬事を打合せ、其夜を契りて戻りぬ。佐大夫送出せし足を  
 回して樓主に赴き、密談あればと衆を拂はせ、扱今歸せし兎唇の高坂事、漸く身の逼道となれる苦し紛  
 れに、昨夜は短刀を突附け、心中せよと血相變へての強談、我ゆる身代果せし男子の申分を一々立てなば、此  
 麻の女郎一夜の中に種切となるべし。愚味漢！否といふ氣色を見せなば、首筋捉へても刺しかねまじき見



伽羅枕

脈なれば、今宵此樓を脱出さむと口頭くちのたまに轉がし、油斷あぶらきりとして一先は還したれど、名代の邪推深じやくすぶるかにして蛇の如き執念しやくねんものなれば、此まゝ誑欺たぶらかし放しにして置かば、此後什麼いかな無法を仕懸けむも知れず。其後難の根を絶ち、二百兩ふたひゃくりゆうはたしかに握つて歸る目算めざもあるれば、少時この籠の鳥を放遣りたまはぬか。佐太夫の根性は、大略見貫て知りたまふらむ、預物の千金の身を遁げ懸れして、此方に迷惑を懸けても素人になり濟さむなど、さる卑怯に生れたる佐太夫ならず。神術はなれわざのこの工夫に同意はしたまはぬかと吹籠めば、樓主ていしゆ思案にも及ばず領うなきて、尋常なみくの太夫ならば千兩箱三ツ背負うて、明日の朝戻るといふとも承引うけひがたき一大事なれど、對手が此方なれば異儀なし、見事にヤツて退けて此上の技倆を見せたまへ。さりながら、之は苦肉の大手管とて、我も一味の上に力を盡すとはいひながら、抱女郎かいはらなを大門の外へ手放し、二月三月と捨置む事は公然に許しがたければ、此方が情人杯ありて出奔いげんし、其後にも八方へ手配して隨分ぬかり手落なく詮議するやうに擬し、家の奉公人の前を繕ひて、此事この二人の外には洩さむこそ無用たるべし。さほどに此方が味方したまふからは、憚るものなく恐るものなく、首尾よく仕遂げてお目に懸けむ。落着所おちつくところは明日にもお知らせませむほごに、暮々も御心配なされるな。承知、承知。今宵人知れず裏の切戸の錠を外し、刎橋はなはしも一推ひとおしに

伽羅枕

架るやう仕て置くべし。隨分首尾よく。合點あてなと囁ささや合あひて別れけるが、佐太夫は新造かぢう難裏の眼を忍びて手荷物を拵え、日暮を待けるほどに、やがて初會の客揚りたれば此男こそと胸轟とどろきて、顔に床の急がるも可笑。樓主も承知の上の出奔いげん、其身は狂言の所作事しよさくじ、いはゞ兒戯たはぶれをするにさへ、かばかり心の穩ならざれば、想ふに、人目を掠めて悪事を働く男女の膽はどればどかどか恐ろし。閨房に入るより早くかの客狀一通を取出たし、委細は此の中に。私は高坂様へお出入の道具屋と名乗りければ、此度は手敏懸る段を厚く勞ねがひ、此ものを案内に夜更を待ちて吉原を逐電ちくてん。

(四十二)

佐太夫少時ちうじの賣色つどろの間に、色に陥め手管に懸け、誰様はおほしんじやう大身上の家を傾け、其様は身の所おきところ措おきなごに繪れたりなど噂うわさに聞きて、氣毒な我ゆるにかと思ひはすれど、目前まへ其形かたち状を見るにあらぬば、心に障る事は、風曝ふくさせなば、いかなすれからしの女郎も、自身の惡業に心注こころきて身毛を彌立やたて、中にも胸狭むねせまきは逆上して即座すわに果はすべし。



佐太夫時雄の居室に連れられるが、門口の構造など一際にて由緒あり氣に見られ、いふがごとき家内の貧困は、外部に少も其氣を徹さざれば、もしや我欺れけるにや。さらば一層おもしろしと、佇みながら四邊を回顧す中、かの道具屋が咳拂を合圖に手燭の火影射して、久助殿か首尾は何ぞ、目那樣お待兼と門戸明けしは從僕つかひの文七なり。年輩五十路に近く、瘡肉にして丈長く、色緒黒く皺多く、眼上に瘤あり。篤實の氣象眼中に溢れ、音調武骨に堀立のまゝなり。佐太夫を見るより恭しく腰を屈め、かゝる深夜にようこそと足元に手燭を見せながら、此方へと案内して玄關を入れれば、佐太夫かと闇中なる一聲に驚かせしは、奥に落着すして時雄が歓迎に出たるなり。手を執り導かれて居間に通りけるに、是はそも什麼、人間の棲家か鼠の巢なり、唯大いなる鼠の巢なり！疊は縁断れ表剥け、襖は紙破れ骨折れ、秋の末の夜はやゝ寒しといふに、火鉢火桶、やうのものはなく、竹籠の鉢巻せる古摺鉢に粉炭を熾し、雜煮箸を灰に突挿たる始末、是一ツにて全豹を思ふべし。明放せし月棚の中を覗けば、荷物と思はしきもの何一箇見えすして、炭器、爛徳利、皿小鉢束菜、飯櫃等一隅に塊まりて、外はからりと明たり。佐太夫ひと呆れ顔にてきよろくと四顧せば、時雄手近なる煤行燈の心を揺立てながら、太夫此容體は何ぞや、君が一夜の情に此有様愛想盡かさば

未練ながら怨恨に思ふぞ。伊達に見すべきものならねど、文七と從僕を呼び、二人が此姿を見たまへ、かくても武士か、阿部伊勢守は頼もしき御家來を持たまひけるよと、佐太夫を見、文七を見、自身を見て測るれば、文七俯せし面を擡げ、御未練なり、そのお言葉はかゝらぬ前にこそあるべきを、今と相成て益もなき御繰言なれ。眞實ありて渡らせられたる太夫様に怨恨がましく聞こえて、其篤志に背くに似たり。命を捨ても捨てかねる遊女と、かねてのお言葉もあるに、主從淺ましき妾如きにて事濟み、かく太夫様の御自由になるは願ふてもなき事、芥子粒ほどの御不足も得言ひたまはぬ理なりと宥むれば、時雄も満足の顔色にて、其方には是まで一方ならぬ苦勞を懸たれば、明日よりは報恩に二人して大事に懸るぞ、と二人の物語の傍に佐太夫黙然と坐りて、一家瓦解の有様、主從困厄の始末を視て、是悉我口頭の悪戯か、迷はせば、迷はずもの、迷へば又迷ふもの、虎皮より緋縮緬とや。女色の可恐を我ながら呆れぬ。

## (四十三)

百遊町人の家にしても遊女風情の變、娜せむは、世間の手前愧づべき事なり。弓馬の家中には八幡大菩薩の宿らせたまふに、と藩士の擯斥、主君の勘氣を畏るれば、晝間は空長持を佐太夫の坐敷として、闇中に